

## 第2部 聞き取り調査

## 第1 研究の実施概要

### 1 目的

本研究は、一般市民に対して行った聞き取り調査（以下、「面接」と略す。）で得られた事例をもとに、児童虐待の実情を明るみにすると共に、児童虐待を受けた者の社会適応状態や虐待経験を克服する過程について分析することを目的とした。加えて、児童虐待を受けた者が必要とした、あるいは必要としている社会的サポートの在り方についても検討することとした。

### 2 方法

#### (1) 面接内容

面接内容は、①どのような状況でどのような虐待が行われたか、②虐待の被害経験がもたらした影響の範囲と程度、及び、その克服の過程や克服の程度、③虐待を受けた者に対する社会的サポート体制の問題や望ましいサポート体制のあり方、を明るみにする目的で、以下のア～オとした。

##### ア 基礎情報

面接対象者の学歴、現職、婚姻歴と現在の家族構成、児童期（18歳まで）の家族構成及び家族の状況（年齢、学歴、職業、病歴、犯歴、経済状況、家族関係、地域・近隣関係等を含む）

##### イ 児童期に同居した家族からの被害及び当時の状況

面接対象者と加害者の続柄、被害の時期、被害の具体的内容、被害を受けたことについての当時の気持ちや解釈、被害への対処方法、被害に対する周囲の対応、当時欲しいと思ったサポート

##### ウ これまでの社会適応状況

登校・就労状況、対人関係における問題点、病歴、非行・犯歴、児童期に同居した家族以外の者からの被害の有無及びその具体的内容

##### エ 現在及び現在までの経緯

被害を受けたことによる心身の変化の経過及び現在症、被害に遭ったことについての現在の解釈、現在の加害者との関係及びその経過、現在欲しいと思っているサポート、今日に至ることができた理由やそれに影響したと思われる要因、家庭観、異性観をはじめとする将来観や現在の悩み

##### オ その他

児童虐待防止対策に関する意見、面接に応じた理由や感想

加えて、面接対象者が面接時点において精神的に健康であるかどうかを測る目的で、日本版 GHQ(12項目の短縮版)<sup>(\*)14)</sup>（以下、GHQ と略す）を使用することにした。

#### (2) 面接対象者

本報告の第1部に詳述したアンケート調査において、いずれかの被害を受けたと回答<sup>(\*)15)</sup>し、さらに、

(\*)14) GHQ (The General Health Questionnaire) は英国の Goldberg,D.P.が開発したものである。今回の調査では、日本版 GHQ の短縮版 (12項目) を用いたが、その妥当性は、福西 (1990) に示されている。なお、同論文に基づき、本論文では、2点以下のスコアの者を健常域にあるとみなすことにした。

(\*)15) いずれかの被害を受けたとの回答者は609名であった。

(\*)16) 聞き取り調査に協力してくれるかどうかについての質問の回答分布は、「協力してもよい」が10.0%、「内容を教えてもらってから、協力するかどうか決めたい」が20.2%、「協力したくない」が58.1%、無回答が11.7%であった。

聞き取り調査への協力の意向についての質問で、「協力してもよい」あるいは「内容を教えてもらってから協力するかどうか決めたい」と回答した者(\*16,17)に対して、面接を依頼した。依頼方法は、アンケート回答者の希望により、電話、手紙、E-mailのいずれかとした。最終的な面接対象者は45名（男性11名、女性34名、うち女性1名はデータの妥当性に欠けるため、以下の分析では除く）(\*18,19)であった。

分析対象となった44名については、表1に提示してある。年齢層の内訳は、10歳代後半が3名、20歳代前半が8名、20歳代後半が7名、30歳代前半が15名、30歳代後半が11名であった。面接時の学職等は、有職者が25名、学生が7名、無職者が12名（うち7名は主婦）であった。学歴は、中卒は1名にとどまり、11名が大学（短大を除く）進学者であった。また、婚姻歴を有する者は19名であった。

- 
- (\*17) アンケート調査における回答の分布が、聞き取り調査への協力の意向についての質問に対する回答によって異なるかどうかを調べるために、「属性」「身体的暴力の有無」「ネグレクトの有無」「性的暴力の有無」「心理的暴力の有無」「間接的暴力の有無」「被害の影響」「法知識」「しつけ意見」のそれぞれについて $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「身体的暴力の有無」「ネグレクトの有無」「心理的暴力の有無」「被害の影響」において有意差が見られ、それぞれの経験がある者の方が、また、被害の影響が大きいと判定している者の方が、聞き取り調査に協力的である（あるいは、否定的でない）傾向がうかがえた。アンケート調査の自由記載欄にも、「今回の調査の対象とは違って軽微なものに過ぎないから協力しない」といった記載があった。しかしその一方、「思い出したくないから」「相対して話す自信がないから」といった記載も見られた。
- (\*18) 実際には、記載されていたE-mailアドレスがあて先不明として戻ってきてしまったり、何度電話連絡してもつながらなかったりした場合があった。また、面接に協力してくれる場合には希望の日時や場所を回答して欲しい旨の手紙やE-mailを送ったところ、その返信がないことも少なくなかった。このほか、面接に必要な時間や場所の調整が付かず辞退する者等もいた。
- (\*19) アンケート調査における回答の分布が、面接対象者とそうでない者と異なるかどうかを調べるために、「属性」「身体的暴力の有無」「ネグレクトの有無」「性的暴力の有無」「心理的暴力の有無」「間接的暴力の有無」「被害の影響」「法知識」「しつけ意見」のそれぞれについて $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「身体的暴力の有無」「性的暴力の有無」「心理的暴力の有無」において有意差が見られ、面接対象者の方が、それぞれの経験がある傾向が見られた。なお、「被害の影響」については、被害の影響が大きいと判定している者の方が、面接に協力する傾向はあったものの、有意差はなかった。

表 1 面接対象者の被害状況等

性別	年齢層	学歴	学職等	婚姻状態	身体的暴力	ネグレクト	性的暴力	心理的暴力	間接的暴力	時期	加害者の人数	その他の被害
男性	20歳代前半	高卒	有職	未婚	●					14,17		
男性	20歳代前半	大学在学中	学生	未婚	●					5	複	●
男性	20歳代後半	大学院(修)修了	無職	未婚					●			
男性	20歳代後半	大学中退	無職	未婚	●			●		12～15	複	●
男性	30歳代前半	中卒	有職	初婚	●	●				1～7		●
男性	30歳代前半	高校中退	有職	初婚	●			●		乳幼児期～15		●
男性	30歳代前半	大学中退	有職	未婚				●		10～18		
男性	30歳代前半	大卒	有職	未婚	●					7～12	複	
男性	30歳代後半	大卒	有職	初婚	●				●	乳幼児期～12		
男性	30歳代後半	高校中退	無職	未婚	●			●	●	7～13		
男性	30歳代後半	専門学校卒	有職	未婚				●	●	乳幼児期～15		●
女性	10歳代後半	高卒	有職△	未婚					●			
女性	10歳代後半	短大在学中	学生	未婚	●			●		3, 6, 12～18		
女性	10歳代後半	短大在学中	学生	未婚	●			●		乳幼児期～18		
女性	20歳代前半	専門学校在学中	学生	未婚			●			12～19		
女性	20歳代前半	高校在学中	学生	未婚		●	●	●		3～現在	複	●
女性	20歳代前半	専門学校卒	有職	未婚	●	●	●		●	乳幼児期～16		■
女性	20歳代前半	専門学校在学中	学生	未婚	●				●	10～11		
女性	20歳代前半	大学在学中	学生	未婚				●		乳幼児期～現在	複	●
女性	20歳代前半	専門学校卒	無職	未婚			●			6～7, 9～10	複	●
女性	20歳代後半	短大中退	有職	再婚	●			●	●	10～20	複	■
女性	20歳代後半	高卒	有職	未婚	●			●	●	10～15	複	
女性	20歳代後半	高卒	有職	未婚	●			●	●	乳幼児期～7, 18～現在	複	●
女性	20歳代後半	大卒	有職	未婚	●				●	8～20		●
女性	20歳代後半	大学中退	有職△	未婚	●				●	乳幼児期～15		
女性	30歳代前半	専門学校卒	無職	初婚	●			●	●	4～15		
女性	30歳代前半	専門学校卒	無職	初婚	●			●		乳幼児期～23		
女性	30歳代前半	高卒	有職	初婚	●			●	●	乳幼児期～20	複	●
女性	30歳代前半	高卒	無職	初婚	●			●	●	乳幼児期～15	複	●
女性	30歳代前半	大卒	有職△	初婚	●			●		乳幼児期～28	複	
女性	30歳代前半	短大卒	無職	初婚	●		●	●		5～12		●
女性	30歳代前半	高卒	無職	未婚				●	●	乳幼児期～現在		●
女性	30歳代前半	大卒	有職	未婚	●			●		乳幼児期～18	複	
女性	30歳代前半	高卒	有職	未婚	●		●	●	●	幼児期～24	複	
女性	30歳代前半	高卒	有職	離婚				●	●	乳幼児期～22		○
女性	30歳代前半	高校中退	有職	離婚	●	●			●	乳幼児期～10		■
女性	30歳代後半	高卒	有職△	再婚					●			
女性	30歳代後半	短大卒	無職	初婚	●				●	乳幼児期～13		
女性	30歳代後半	短大卒	無職	初婚	●			●	●	乳幼児期～18		
女性	30歳代後半	専門学校卒	有職△	初婚				●	●	4～17		
女性	30歳代後半	専門学校卒	有職	初婚				●		6～20		■
女性	30歳代後半	高卒	無職	初婚	●			●	●	乳幼児期～14		
女性	30歳代後半	専門学校卒	有職	初婚				●	●	乳幼児期～18		
女性	30歳代後半	高卒	有職	未婚	●			●	●	5～18		

- 注 1 「学職等」欄のうち、「有職△」は、週40時間未満の常態的でない就労を示している。
- 2 「身体的暴力」「ネグレクト」「性的暴力」「心理的暴力」欄は、面接対象者の語った内容を「児童虐待の防止等に関する法律」を基に分類した。また、「間接的暴力」欄は、広義の虐待と位置付けられるとみなして加えた。同法律では児童期(18歳まで)を対象としているので、上記欄では児童期に経験があることを●で示しているが、加害者については、保護者に限定せずに同居している家族すべてを対象として示している。
- 3 「時期」欄は、「身体的暴力」「ネグレクト」「性的暴力」「心理的暴力」のいずれかを受けたおおよその時期(数字は年齢)を示している。
- 4 「加害者の人数」欄は、「身体的暴力」「ネグレクト」「性的暴力」「心理的暴力」の加害者の人数が、「複」は複数人を、空欄は一人を示している。
- 5 「その他の被害」欄は、児童期に同居した家族以外の者からの被害が、●は児童期のみに、○は児童期以降のみに、■は上記いずれの時期にも経験があることを示している。

### (3) 実施方法

面接は、平成14年5月から9月までの間、週末を含め午前9時から午後5時の時間帯で実施した。犯罪者や非行少年に対する臨床経験を有する本研究担当者(\*20)6名のうち1～2名が、面接対象者1名に対して行った。

面接場所は、主として面接対象者の居住地から比較的近い法務省の施設(\*21)の会議室とした。このほか、公務所の閉庁日には、民間の貸会議室等(\*22)で行った。調査に当たっては、面接対象者のプライバシーを確保できるよう、個室を確保した。

面接者は、調査開始前に、本調査の目的が、アンケート調査で詳細に聴けなかった児童虐待の内容の詳細、その後の経過、必要と感じたサポートなどを明らかにすることを通じて、児童虐待への対策を講じるに当たっての資料を集めることにあることを説明した。加えて、「面接で得られた情報は、報告書としてまとめるが、その際、個人のプライバシーは守れるよう配慮すること」「面接で得られた情報は、研究目的以外に使用することはないこと」「正直に語ってほしいが、答えたくない質問には無理をして答えるには及ばないこと(\*23)」を確認した。

面接は、上記(1)面接内容のア～オについて明らかにすることを面接者が念頭において、半構造化面接方式(\*24)で行った。なお、GHQについては、質問用紙を手渡し、面接者の前で面接対象者自身に記入してもらった。

## 3 分析の意義と制約

近年の我が国の児童虐待への問題意識の高まりの中で、現在、児童相談所等の公的機関や医療機関に係属している児童についての虐待の被害状態やそれへの対策に関する調査・研究は活発に行われている。また、病院、婦人相談所、司法機関等に係属している成人の中に、虐待を受けたとする者が少なくないことも知られている。しかし、公的機関や医療機関に係属しなかった人々についての虐待の被害状況やその後の経過の把握は十分ではなく、そういった意味で、一般市民を対象とした本研究は意味があると考え、以下では、面接対象者が面接時に語った内容を中心に分析する。

しかし、本研究には、以下のような制約がある点是否めない。まず、本研究の面接対象者とは、本報告の第1部で紹介したアンケート調査に回答し、さらに、面接を了承し、約束した面接日に面接会場に出向き、自らの被害経験を語ることができた、あるいは語ろうと試みた人々であるということである。したがって、こうした面接対象者が明るみにしてくれたことが、児童虐待被害者にどの程度一般化できるかは定かでない。

また、本研究では、面接対象者以外からの情報を得ることはしておらず、面接対象者が語った内容については、客観的事実とみなすよりも、面接対象者の心象風景と位置付けることが適切であろう。さらに、面接時、過去について遡って尋ねているものについては、面接対象者の記憶が変容してしまったものが含まれている可能性もある。実際、記憶が曖昧になって詳細までは不明とする者もあり、不確かな情報も含まれていることは否めない。

(\*20) 具体的には、保護観察官、少年院の法務教官、少年鑑別所の法務技官としての経験を有する者であった。

(\*21) 具体的には、法務総合研究所（研修施設を含む）のほか、法務局、矯正研修所に会場の提供を受けた。

(\*22) 会場の選定に当たっては、利便性や会場の知名度等を考慮した。

(\*23) 面接対象者の様子を観察しながら、面接者側が適宜、質問を差し控えるなどの配慮もした。

(\*24) 質問項目は予め決めておくが、比較的自由に答えてもらう方法で、場合によっては、面接者の裁量で、臨機応変の質問も許す手法である。

本研究には、このような制約がある。しかし、被害を受けたと自己申告している面接対象者の被害を巡る心象風景を明らかにすることは、児童虐待対策についての一側面の手掛かりとなることは間違いない。

以下では、まず、面接対象者が語る虐待とはどのようなものであったかを紹介し、つぎに、虐待が起きた家族像について明らかにする。加えて、虐待を受けた面接対象者の逸脱行動等を明るみにする。さらに、虐待を受けた者が、どのような過程を経て、面接時点ではどのような状態であったか、さらに、虐待経験を乗り切るに当たって何が役立ったと振り返っているか等について、紹介することにする。そして、最後に、面接対象者が被害を受けた当時、あるいは面接時点において、援助についてどのような意見を有していたかを分析することで、児童虐待についての援助対策の在り方についても考察を加えることにする。

なお、事例の引用については、面接対象者のプライバシーを保護するために、各章毎に独立の記号を付すこととした。

## 第2 被害の実態

面接対象者が語った被害について、「児童虐待の防止等に関する法律」を基に、以下では、まず「身体的暴力」「ネグレクト」「性的暴力」「心理的暴力」について分析する。また、「間接的暴力」については、広義の虐待と位置付けられ、第1部に詳述したアンケート調査においても調査対象となっているため、分析することにした。同法律では、児童期（18歳まで）を対象としているので、児童期の被害に焦点を当てることにするが、実際には、児童期以降も継続しているものも見られた。なお、面接対象者が語った被害の加害者については、両親よりも兄弟や祖父母などからの加害が深刻と見られる事例もあったので、以下では同居する家族全員をその対象とみなすことにした。なお、面接対象者の中には上記児童期に同居した家族からの被害以外の被害を受けている事例も少なくなかったため、そのことについても触れることにする。

表1が示すように、被害の種類は5種類だが、単一型と複合型に分けることができる。単一型は、1種類の被害しか受けていないもので、身体的暴力のみ（3名）、ネグレクトのみ（0名）、性的暴力のみ（2名）、心理的暴力のみ（3名）、間接的暴力のみ（3名）であった。それ以外の33名（75.0%）は2種類以上の被害を受けた複合型であった。複合型を間接的暴力を含むものと含まないものという内容に分けて見ると、前者が23名、後者が10名であり、間接的暴力を含む複合型が含まない複合型の倍以上であった。

### 1 身体的暴力

面接対象者44名中、30名（68.2%、男性8名、女性22名）が被害を受けていた。身体的暴力のみは3名であり、27名は複合型であり、心理的暴力と複合しているのが19名、間接的暴力と複合しているのが18名、ネグレクトと複合しているのが3名と、心理的暴力や間接的暴力と結び付きやすくなっていた。男性面接対象者に対する加害者は、実父が2名、実母が2名、両親が2名、祖父、姉がそれぞれ1名で、女性面接対象者に対する加害者は、実父が12名、実母が5名、両親が3名、実兄が2名であった。

身体的暴力の内容は、殴られたといっても「タバコを吸っていたのがばれて、数発殴られた」「学校で悪さをしたので殴られた」など理由がはっきりしていて、体罰と虐待の線引きの難しい軽度のものから、「木刀・竹刀で殴られた」「布団たたきで殴られた」「ほうきで叩かれた」「熱いアイロンで叩いてきた」「ラケットが折れるくらい叩かれた」など、物を使って「ばしばし」「みみずばれになるまで」「あざが出来るまで」「鼻血が出て止めない」「容赦なく」「とことん」等、徹底的に殴られた重度のものまであるが、後者の方が断然多かった。また、「外の手すりに逆さ吊り状態で縛られた」「逆さ吊りにされて風呂場で水攻めにあった」「ナイフが飛んできた」「風呂に投げ込まれた」など、死の危険を伴う暴力を受けたものも少なからずあった。その他には、「髪の毛を引っ張られた」「蹴られた」「びんたを張られた」「床に投げつけられた」「殴られて長時間正座させられた」「口の中に足を突っ込まれた」などがあった。

面接対象者自身が主たる被害者ではない場合もあり、中には、面接対象者が父から母への暴力を止めに入る過程で容赦なく暴力を受ける結果となる場合もあった。

当時の気持ちとしては、理由がはっきりし、身体的暴力のみの場合（しつけとの線引きがあいまいなもの）には、「恨みはなかった」「（暴力の）おかげでタバコをやめた」などその暴力をポジティブに捉えていた。それ以外は、「とにかくつらくて怖かった」「怒ると怖い」「いつも気を遣っていた」「びくびく、おどおどした気持ち」「親から戦いを挑まれたらそれに対抗しようと身構えている感じで、リラックス出

来ずいつも緊張していた」などの恐怖感と緊張感、「やられている時は、どういう気持ちだったか覚えていない、一体何が起こったか分からないままに始まり終わっていた」との感覚麻痺状態、「近所の人はなんで助けてくれないのだろう」と第三者に救いを求める気持ち、「なぜ自分の父ばかりこうなんだろう。死ねばいいのに。母もなぜ父と一緒にいるんだろう」と加害者及び加害者を止めない者への非難・恨みなど、様々であった。

当時の解釈としては、理由がはっきりし、身体的暴力のみの場合(同上)は、「自分が間違いをしたから」「自分の行動に原因がある」と非常にポジティブなものであった。しかし、その他は、「父は子供がそのまま大人になったような人だから」「父が浪費家であったことが諸悪の根源」などと加害者の性質によると判断しているもの、「自分が他の兄弟の身代わりとなっていた」「父に殴られていた母が、ストレスがたまり自分に当たった」「家族の中で一番当たりやすい自分に当たった」と自らを家族の中での犠牲者と位置付けて解釈しているもの、に分かれていた。

## 2 ネグレクト

44名中、4名(9.1%, 男性1名, 女性3名)が被害を受けており、いずれも複合型であった。男性面接対象者に対する加害者は実母が1名, 女性面接対象者に対する加害者は実父が2名, 実母が1名であった。

ネグレクトの内容は、「自分が何かの理由で泣いていた時に母から1時間位暗い所に鍵をかけて閉じ込められ、トイレと言っても出してもらえずお漏らしをしてしまった」「季節を問わず素っ裸にさせられ外に出された, 日曜日は一日中家から閉め出された」「唯一の保護者である母が家を出たり入ったりで家族を顧みず, 後に児童相談所を通して施設に入れられた」というものであった。

当時の気持ちとしては、「加害者が怖かった」「これが当たり前なんだからと我慢するしかない」等, 恐怖と諦観であった。

当時の解釈としては、「自分が悪いことがきっかけであるが, 加害者がそこまでやるのはやりすぎだ」と, 自分も悪いが加害者も悪いと両者に責任を負わせているもの, 「家族みんながやられているんだからこれが当たり前なんだ」と, 事実を認めたくはないが自分にそう言い聞かせようとしているもの, 「納得できない」と, 加害者に全責任があるとするものに分かれていた。

## 3 性的暴力

44名中、6名(13.6%)が被害を受けており、いずれも女性であった。性的暴力のみは2名であり, 4名は複合型であった。加害者は, 実父が4名, 義父が1名, 実兄と実父が1名であった。

性的暴力の内容は, 単一型は, 「胸を触られる, 陰部へ指を挿入されいじりまわされる」「夜部屋に入ってきて体を触る, 携帯電話でホテルに誘う」というもので, 複合型は, 「性交を要求される」「自分の性を触らせる」「自慰行為を見せる」「風呂をのぞく」といったものであった。

当時の気持ちとしては, 「幼すぎて意味など分からなかった」と分別ができないものから, 「怖かった」という恐怖感, 「嫌だったが深く考えないようにした」「実の親なのかと疑った」という抑圧や否認など, 虐待の内容や程度, 被害期間によってさまざまであった。

当時の解釈としては, 性的暴力のみの被害者については, 「実の親だったらしめないはず」「近くにいる女子である自分に興味があったのであろう」「夫婦間の仲が悪いためにその性的不満が自分に向かっていたのだろう」などが挙げられた。また, 他の被害とあわせて性的暴力を受けた被害者の中には, 「相手にそこまでさせる自分が悪いのではないか」と解釈し, 自罰的な感情を抱く者がいた。



#### 4 心理的暴力

44名中、28名（63.6%、男性5名、女性23名）が被害を受けていた。心理的暴力のみは3名であり、25名は複合型であり、池田(2000)が指摘しているように、心理的暴力以外の被害をも伴う場合が多かった。

25名中、身体的暴力と複合している者が19名、間接的暴力と複合している者が16名、ネグレクトと複合している者が1名、性的虐待と複合している者が3名いた。男性面接者に対する加害者は、実父が1名、実母が4名、女性面接者に対する加害者は、実父が8名、義父が1名、実母が7名、義母が1名、両親が4名、伯母が1名、祖母・姉が1名であり、女性の加害者が目立った。

心理的暴力の内容は、もともと「言語的虐待」とも言われるように、主として言語によるものが非常に多かった。例えば、「死ね」、「産む子じゃなかった」「産まなきゃよかった」「自分の家系にこんなやつはいない」「汚い」など自己の存在そのものを否定されるような言葉であったり、「ばかだ」「だめな子」「何をやってもだめ」「ばか息子」「なんでできないんだ」「養護学校に行きなさい」「頭がおかしいから病院に行け」など能力等に対して攻撃・否定し、自尊心を失わせる言葉を言われたり、親の思い通りに行動しなかったり、気に入らないことがあると、なじられたり、ののしられるというものであった。長期間言われ続けていることが多かった。また、兄弟との比較・差別、特に男子や長子を優遇するようなものも多かった。言語によるもの以外では、行動の制限、価値観の押し付け・束縛、家族旅行に自分だけ置いていかれた、大学に行きたいのに短大にしか行かせてもらえなかった、などであった。教育問題が絡んで、兄弟と差別されていると面接対象者が感じたものも少なくなかった。

当時の気持ちとしては、恐怖感こそないものの、「何で自分は勉強ができないのかなあ」と自罰的なものから、「けむたい親を避けたかった」「なんで自分のお母さんはこんなに怒ってばかりいるんだろう」「こんな理不尽なことがあっていいのか」「自分が否定されることは許せない」「嫌悪感や憎しみでいっぱいだった」と加害者に憤りや反発を感じているもの、「家族に味方がいない」と第三者の援助がないことを悲観しているもの、「学校から帰って来る時が憂鬱で、他のお母さんがうらやましかった」「他の家の子供だったらよかったのに」「家にいたくない」「逃げ出したい気分だった」と逃避的なもの、「いつも我慢して気持ちの向け場がなく、いらいらすることが多かった」「仕方がないんだ」「我慢するしかない」「反抗すればよりひどい虐待を受けるので耐えよう」と抑圧的なものなどがあつた。また、「ずっと嫌な気持ちで、3か月に一度は落ち込み、自殺も考えた」「生きていても仕方がない」「小学生の時、死にたいと漠然と思った」「生きていては迷惑な存在だと思った」「生きていること自体しんどかった」「生きている意味がない」「閉じこもったり、死ぬと楽かなと思った」など、かなり追い詰められて希死念慮・自殺念慮を持つまでに達するなど深刻なものも目立った。

当時の解釈としては、基本的には非常にネガティブなものが多く、「分けがわからない」「原因は見当がつかない」と原因がつかめないものから、「自分は長女なのにしっかりしていないし、役に立たない人間だから」「妹の方が成績もよく、要領もよかったから」「自分が望まれていない女子として誕生したから」と自罰的解釈をするもの、「加害者が家長制度をひきずった価値観を持っていたから」「実子でない私を嫌って」「家で抱える問題が大きかったから持って行き場がなく私に当たったのではないか」「自分が父親似だったから母が腹を立てたのかも」「子どもは自分の所有物だから自分の自由になると思っていたのだろう」と加害者の歪んだ認知や価値観のせいだとするものに分かれていた。なお、軽度（短期も含む）な被害については、「自分には被害者意識はなかった」「自分が悪い、自分にも問題があったので仕方がない」とポジティブな捉え方をする事例もあったが、長期の被害については、「自分が悪いからお母さんはこんなふうにすると思ったけど、次第に、他のうちと違うと分かってきた。でも、仕方ないこ

とだと思った」と解釈が段々と変化する事例もあった。

## 5 間接的暴力

44名中、26名（59.1%、男性4名、女性22名）が被害を受けていた。間接的暴力のみは3名であり、23名は複合型であった。23名中、身体的暴力と複合している者が18名、心理的暴力と複合している者が16名、ネグレクトと複合している者が2名おり、身体的暴力と結び付きやすくなっていた。男性面接対象者における加害者と被害者は、「父が母に」が3名、「父が姉に」が1名、女性面接対象者における加害者と被害者は、「父が母に」が9名、「父が家族全員に」が4名、「父が母、義母及び兄弟に」が2名、残りは、父が兄弟姉妹に、父や兄弟が母に、祖父や父が家族に、兄が父母や兄弟に、母が父方祖母に、祖母や伯母が父親あるいは母親になど、加害者と被害者の関係はさまざまであった。

間接的暴力の内容は、些細なことで、又は原因もよく分からず父が母を殴る、蹴る、物を投げる、脅す、怒鳴る・暴言を吐く、という事例が最も多く、その他、家の物を壊す、着る物を切り裂く、アイロンを当てる、男性関係を疑る、中には、「暴力によって母が3回入院した」「興奮するとナイフや包丁で脅した」「包丁を持って暴れた」というものもあった。加害者には酒癖が悪い、酒乱が原因という者もいたが、さほど多くはなかった。

当時の気持ちとしては、「(当事者ではないので)あまり気持ちの変化はなかった」「被害者である母が耐え、子供たちにも愚痴らなかったため心理的影響はほとんどなかった」と、あまり我が事として感じていない者もいたが、このタイプの気持ちは2名だけだった。むしろ逆に、「自分への暴力より、他の家族に対する暴力の方が怖かった」「自分が怒られているわけでもないが、とても父親が怖かった」「男の人全般が怖くなった」「いつ自分に暴力が向かってくるのかと思うと脈が早くなった」「怒鳴った声を聞くとびくついた」「びくびくおどおど湧えない気持ちでいた」「発狂するのではないかと思った」と間接的な暴力を自分のこととして捉え、恐怖感や精神的不安を抱いたものが多かった。「母親が死んでしまうのではないかと心配だった」「母が泣くとつらくて、それしか覚えていない」「母を見ているのもつらいし、自分が何もしてあげられないのもつらい」と被害者に対して同情や感情移入していたもの、「けんかは自分のせいなのではないか」と自罰的な感情を抱いたもの、「なぜ自分の父はこうなんだろう、死ねばいいのに」「なぜ母は、こんな父と一緒にいるのだろう」「嫌悪感、憎しみでいっぱい」と加害者である父や被害者である母を非難するもの、「酒が悪い」と加害者を直接的に非難せず、「仕方がないと我慢するしかなかった」「見ないように聞かないようにしていた」「死にたいと漠然と思った」など抑圧してしまったり逃避的な感情を抱いたりしたものなど、間接的暴力と言えども事態は深刻で、ダメージを受けているものも多かった。

当時の解釈としては、「よく分からなかった、わけが分からなかった」「ショックだったが、被害にあったとはいえないかもしれない」と客観視できていないものから、逆に「そもそも両親は諍いが多かったが、自分の存在がその関係を悪化させていたのかもしれない」と間接的にもかかわらず解釈し過ぎて自罰的に暴力の原因を考えるものまであった。「酒さえ飲まなければ他の面ではよかった」「わがままで我慢できなかったが、可愛がってくれることもあり憎みきれなかった」などと加害者をかばう者も5名いたが、「我が家だけではなく、他の家にも苦労はあるわけだし、思い過ぎだろうと考えた」「両親とも戦前生まれで、男尊女卑が当たり前で耐えるしかないという受け止め方をしていた」と暴力を合理化するものもあった。「同胞の中では年長の者が親から暴力を振るわれていた」「加害者・被害者とも性格が激しく、被害者の反抗的な態度も気に入らなかったからだろう」と冷静に分析するものもあった。

## 6 その他の被害

44名中、19名（43.2%）がその他の被害、すなわち、児童期に同居した家族以外の者からの被害を、面接時までのいずれかに経験していた。

その他の被害を複数受けている者もいたが、その内訳として最も多かったのは、級友をはじめとする生徒からのいじめ等であり、11名に上った。また、学校等の教師からいやがらせを受けたとする者が6名おり、その具体的内容としては、「自分がやっていないのにやったことにされて体罰を受けた」「自分の気持ちが受け入れられることなく一方的に問題児と決め付けられた」「成績が悪いとして体罰を受けた」「性的いやがらせと感じる発言があった」「他生徒の前で頭ごなしに叱責されるなど、はずかしめを受け、自尊心を深く傷つけられた」「兄弟と比較された」「生徒の気持ちを度外視して、あれこれ強要された」などが挙げられた。また、家族以外の親族から心理的いやがらせや性的いやがらせを受けたとする者も3名いた。加えて、恋人や夫、あるいは以前そうであった者から暴力を受けたり性関係を強要されたとする者が4名いた。このほか、親の友人や、面接対象者の友人の友人から性的いやがらせを受けたとする者や、全く見知らぬ人から被害を受けたとする者もいた。

なお、その他の被害と家庭内での児童虐待の発生を時期的に比べてみると、家庭内での児童虐待が先行している者が17名、一方、その他の被害が先行している者は2名にとどまった。人間の発達段階で、まず関係を持つのは家族であり、当然と言えば当然の結果とも言える。しかし、家族から被害を受けた者の4割強がその他の被害をも受けているとの本結果からは、生れ落ちた家庭によって、その人の人生が大きく左右される可能性について、改めて考えさせられる。

実際、家庭内での児童虐待が先行している者の中には、親に毎日風呂を沸かしてもらえず、その結果、学校で「汚い」といじめられたとする者、学校での集金日に金をくれるよう親に頼んでも粗暴な振る舞いをするだけで、その結果、金を学校に提出できず、そのことでいじめられ、さらに、提出できないことを苦にして学校を休んでは、一層いじめられるようになったとする者など、児童虐待とその他の被害との間に明らかな関連が見られる事例があった。

このほか、親からの身体的暴力を避けるために親戚宅に泊まりに行き、そこで親戚から性的いやがらせをされたが、それを拒まなければその親戚は親切にしてくれるし、それを他言すれば家に帰れと言われるのが目に見えていたため、しばらくの期間は我慢していたとする事例もあった。また、家にしばしば訪れる親の友人から性的いたづらをされたが、それが明るみに出れば、そうでなくても粗暴な親が逆上してその友人を殺してしまうかもしれないと恐れて、親に相談することができなかったとする事例もあった。

なお、その他の被害が先行している2事例とは、面接対象者の遊戯中に、幼稚園の教師から玩具を一方的に取り上げられるなど、本人が不当と感じられるような扱いを受け、その教師の教育方針等を親も呑みにして迎合的な態度を取ったとするもの、面接対象者の頭髪制限等の校則違反に対して多数の教師に囲まれ大声で叱責されるなど、本人が不当と感じるような扱いを受けて心因反応が生じるようになり、その心因反応を回避するために不登校となったところ、親がその不登校を責めたとするものであった。

## 7 むすび

面接対象者の受けた児童虐待を概観したところ、身体的暴力や心理的暴力を受けたとする面接対象者がそれぞれ6割を超えていたほか、1種類のみの被害ではなく、複数の被害を受けている者が四分の三を占めていた。また、身体的暴力や性的暴力については、加害者が父親の場合が多かったのに対して、

心理的暴力については、加害者が母親の場合が多いなど、被害の種類によって加害者が異なることが明らかにされた。このほか、保護者以外が主たる加害者である児童虐待も散見された。

被害を受けた当時の気持ちや解釈についても概括したが、心理的虐待については自罰的な感情を抱くなど、その影響が度外視できないことが示された。また、広義の虐待と位置付けられる間接的暴力についても、深刻なダメージを受けている者がいることが明るみになった。

加えて、面接対象者の4割強が、いじめや学校教師からのいやがらせなど、児童期に同居した家族以外の者から何らかの被害を受けたとしていることも明らかになった。

### 第3 面接対象者の家族

児童虐待を受けた者は、果たしてどのような家庭で虐待を受けていたのだろうか。「児童虐待」と聞くと、父親から暴力を受けた、あるいは母親から受けたと、加害者と被害者の関係性が一対一の対応の中で展開されるイメージを抱きがちだが、果たして実態はどうであろうか。児童虐待とは、虐待という行為に関連する加害者と被害者だけの対関係に帰するところの単純な問題ではないはずである。児童虐待の発生メカニズムを知るには、どのような家族成員とともに、家庭や地域でどのように生活を営んでいるかといった基本的な事柄を把握することが、大切な作業である。

前述のとおり、今回の調査では、法律の定義の枠組みを延長した形で、間接的暴力を受けた者も含めた。そうすることで、家庭の中に存在するさまざまな問題と関連させながら児童虐待の問題に迫ることが可能である。家庭の中のもつれ合った糸をほぐしながら、児童虐待がどのように位置付けられているのかを知ることができる。

本章では面接対象者について、児童虐待の定義に即して、18歳までの家族関係の中で、虐待を発生・促進させるような家族の特質があったのか、発生・促進させる家族史があったのか、どのような状況で始まりどのように終息したのか、等を紐解きながら、児童虐待が発生・終息するしくみに接近したいと考える。

面接実施に際しては、「面接調査を希望しなかった」暗数事例が圧倒的に多く、「面接を受けた人」のみで特徴を一般化することは難しい。しかし、今まで見えてこなかった児童虐待を引き起こす家族の全体像が少しでも見えてくれば、今後の対応や予防に対して、何らかの鍵になるかもしれない。

#### 1 分析の視点

虐待の原因論については、さまざま論じられているところである。例えば田辺（2002）は、心理社会的要因として、①加害者の心理的なもの（加害者の精神障害など）、②妊娠・出産・出生に関連するもの（未熟児や障害児としての出生など）、③夫婦間の葛藤や家族構成に関するもの（大家族や家族間葛藤など）、④その他（転居、周囲とのトラブルによる孤立、養育者の孤立、経済的困窮など）を挙げている。野崎（2000）は、医療機関や保健所、児童相談所などの調査から、①親の要因（親自身の虐待被害経験、経済的困難、親族・近隣・友人からの孤立、夫婦の不和等）、②子どもの側の要因（望まぬ妊娠から生れた育児に負担を感じやすい、養育に苦勞が多い子ども等）、③親子関係の要因（親または子どもが長期入院していたため親子関係が形成されにくい等）などが浮かび上がるが、これらの要因が重なることにより、虐待の発生するリスクは高まるといえる、と述べている。

また、コービー（2002）は、虐待の因果理論に関して、主に三つの視点を持つタイプに分類できるのではないかと述べている。すなわち、①心理学理論（虐待する個人の本能的、及び心理学的資質に注目するもの）、②社会心理学的理論（虐待者、子ども及び直接的環境の相互作用の動態に着目するもの）、③社会学的視点（社会的、政治的条件を、子どもの虐待の存在に対する最も重要な理論として強調するもの）である。なお、田中（2003）は、同じような虐待リスク因子があっても虐待が発生する場合としない場合があることから、リスク因子の存在が即虐待の発生とならないことについて、子どもの特徴と親の特性との相互作用に加えて、地域や社会・文化の因子をも考慮に入れたリスク因子と補償因子の関係から児童虐待の発生・慢性化モデルを提案している。すなわち、加害者である親と被害者である子のそれぞれにある要因に留まらず、システムという考え方からより包括的、複合的に考えるに至っている。

そこで、本章においては、児童虐待現象を家族関係や社会関係の一部であるという位置付けをした上で、その関係性を見ることにする。「面接対象者がどれほどの虐待を受けていたか」を測る客観的指標はないが、その要因として、「面接対象者に向かう暴力経路の数」「被害の直接性」「被害の種類」「被害期間」「介入（虐待を止める行為）の有無」等々が挙げられる。したがって、はじめにこれらについて、1つ1つ分析していきたい。つづいて、児童虐待の大半は、一回性のものではなく、ある期間継続するものであり、発生から促進（抑制）そして終息へという流れをたどるので、18歳までの家族史を概観しながら児童虐待の構造を探っていくこととしたい。

## 2 虐待の程度に及ぼす様々な要因

### (1) 面接対象者に向かう暴力経路の数

家庭内で誰から誰に対して暴力が行われるかの経路を見てみると、加害者から面接対象者へ向かう経路が一つしかない、つまり一対一対応で児童虐待が行われているものとそれ以外のものに大別される。

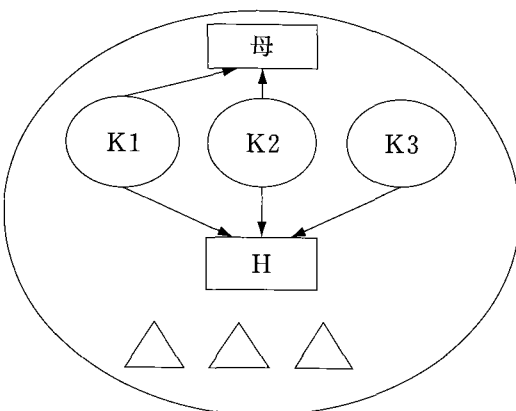
それ以外のものについては、加害者が一人で被害者（被害児童は被害者のうちの一人）は複数（一対多）というもの、加害者が複数で被害者は一人（多対一）というものが考えられる。

面接対象者を男女別に見ると、男性では、10名中（間接的暴力のみの1名を除く）、一対一対応の一経路のものは4名、被害児童へ向かう経路は一つだが家庭内にはそれ以外にも暴力があるものは3名、経路が二つのものは3名であった。男性は、複雑に込み入っている経路はほとんどなかった。

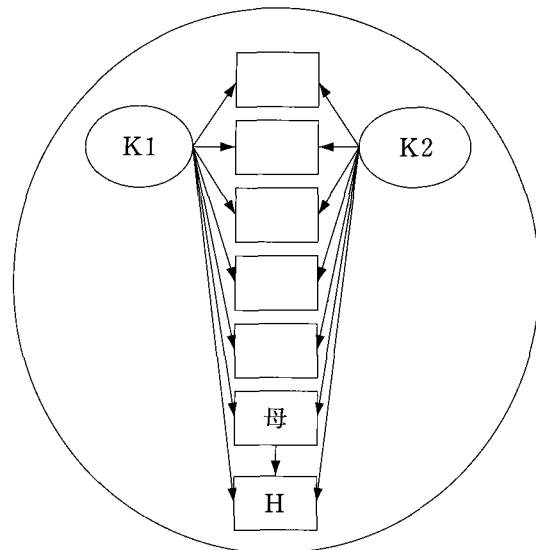
女性では、31名（間接的暴力のみの2名を除く）中、一対一対応の一経路のものは6名であった。また、被害児童へ向かう経路は一つだが家庭内にはそれ以外にも暴力があるものは14名、経路が二つのものは9名、経路が三つのものは2名であった。経路の数だけで、被害の軽重は論じられないが、経路が三つのものは、単に被害児童に三本の経路が向いているだけでなく、込み入っていた（図1）。家庭内で暴力が飛び交い、人間関係が複雑である背景があると言える。

図1 面接対象者に対する暴力経路（3本のもの）

事例【20歳代前半・女性】



事例【30歳代前半・女性】



注 「K」は加害者を、「H」は面接対象者を、△は第三者を表す。

## (2) 被害の直接性

面接対象者44名中、間接的暴力だけの事例は、男性1名、女性2名であり、男性は11名中4名、女性は33名中22名が家庭内で被害児童以外の間接的暴力、いわゆるドメスティックバイオレンス<sup>(\*)25)</sup>（以下、「DV」と言う。）やその他の児童虐待、嫁いじめ・姑いじめに属する心理的暴力などを見聞きしており、すなわち、44名中23名が直接的暴力と間接的暴力の両方を受けていた。

## (3) 被害の種類

面接対象者について男女別に見てみると、男性では11名中、身体的暴力のみは3名、心理的暴力のみは1名、間接的暴力のみは1名、複数の種類が行われた複合型は6名であった。女性では33名中、身体的暴力のみは0名、心理的暴力のみは2名、性的暴力のみは2名、間接的暴力のみは2名、複合型は27名であった。

女性は、複合型が多く、さらに、男性の複合型と比べて複雑なものが多く、大別するとおおむね次の2タイプが見られた（もちろんこれ以外に該当しないタイプもある）。一つ目のタイプは、同一加害者からではあるが、虐待の種類を変化させながら延々と虐待が続いているものである。具体的には、「幼児期には、ひっぱたかれるなどの身体的暴力を受けていたが、加齢につれ、怒鳴る、嫌味を言われるなどの心理的暴力に変化したもの」「保育園時は、父から怒られると素っ裸にして外に出されるなどネグレクトを受けていたが、それ以降は、竹刀や木刀で殴られるなどの身体的暴力に変化したもの」などがあった。また、二つ目のタイプは、複数の加害者から、異なった種類の虐待を連続的あるいは同時並行的に受けたものである。具体的には、「母からは、ばかにされたり卑下されたりといった言語による心理的暴力を受け、兄からは、叩かれる・殴られるなどの身体的暴力を受けたもの」「幼少期以降、母から、妹と差別されるなどの心理的暴力、及び、理由が分からないまま蒲団叩きで叩かれたり階段の手すりに逆さ吊りにされたりするなどの身体的暴力を受け続け、高校時には、父から、性的暴力を受けたもの」「幼少期から、父方叔母からは、『あんたは何をやってもだめ』『（目が悪くてよく）見えないくせに』等の言語による心理的暴力を、また、父からは、殴る・蹴る・包丁を突き付けられるなどの身体的暴力を受け続けたもの」などがあった。

ただし、複合型か単一型かという被害の種類が多さが、被害の程度の多少に反映されないことも多かった。この点については、今回の調査においては、それぞれの被害について客観的な基準を参照しておらず、「1回殴られただけ」「どの家庭にでもありがちなこと」などと面接対象者自身が語っていたものであっても、面接対象者が虐待と位置付けたものを全て含めたことが、その一因であると考えられる。

## (4) 被害期間

今回の面接対象者に限って言えば、明らかに男性より女性の方が被害を受けた期間が長かった。これは、先の被害の種類と関連している部分もあると思われるが、女性の方が、複数の加害者によって異なる虐待を受けている事例が多いこと、また、男性では、「中2か中3のときと高2の時の2回だけ」「5歳時の数か月だけ」「姉が13歳のとき」のように短期間で終息したというものが目立つ反面、女性では、「幼少期から短大入学まで・寮に入るまでずっと」「幼少期からずっと、独立（進学・結婚など）までずっと」「幼少期から父が死ぬまでずっと」など児童虐待の定義の上限あるいはそれ以降の年齢まで続いていたものまであり、児童期のほとんどを虐待されていたものが多いことが顕著である。

男性は、11名中、申告上おおむね10年以上が2名、6年以上10年未満が4名であったが、残りは比較

---

(\*)25) 本章でいう「ドメスティックバイオレンス」は、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（平成13年施行）で定められた配偶者による身体的暴力を指す。

的短期間であった。一方、女性の場合、前述の例のように、幼すぎて何歳なのか記憶のはっきりしない善悪の判断のつかない幼少期から児童虐待をされている事例が多かった。「幼少期」と定義や記憶が明確でないものの、その上限から数えたとして少なくとも10年以上続いていた者が33名中20名強もいた。

また、虐待の開始時期を見ると、男性は11名中、幼少期まで（幼稚園を含む）が5名、小学生時が5名、中学生時が1名であったのに対し、女性は33名中、幼少期まで（幼稚園を含む）が28名、小学生時が5名であり、女性の方が虐待開始年齢の早い（幼い頃から虐待されていた）者が多かった。

終息時期を見ると、男性は、短期間に終了した2名を除く9名中、12歳くらいまでに終息した者が4名、15歳までが4名、18歳までが1名であった。女性は、33名中、12歳くらいまでに終息した者が5名、15歳までが6名、児童虐待の定義上の上限年齢である18歳まで、あるいはそれ以上まで続いた者が22名であった。

すなわち、男性は「開始が遅く、終息は早い、期間は短い」が主流であるのに対して、女性は「開始が早く、終息は遅い、期間は長い」と、全く反対の特徴を持っていた。

#### (5) 介入の有無<sup>(\*26)</sup>

児童虐待現象については、虐待者から児童を救済することに目が向きがちで、その周りにいた（いる）人たちについては、注意が向きにくい傾向にある。しかし、彼らが、何らかの行動を起こしていたら、虐待の沈静化、消滅・中断に移行し、家族全体の生活が変化していた可能性も高いと考えられる。また、何らかの行動を起こす・起こさないのどちらであっても、虐待行為を止める役割か、促進する役割か、やめさせない役割か、という機能に直接的あるいは間接的に結び付くため、虐待の終息という観点からは大きな要因とみなすこともできる。そのため、彼らは、家族や社会という枠組みで虐待を考察する際、無視できないと言えよう。そのような意味から、介入（主として家族）の有無、その働きについて概観してみる。

介入と一口に言っても幅広く、結果的に成功したもの・不成功に終わったものなど程度の差も大きい。ここでは、少なくとも『加害者の虐待行為をやめさせようとしてくれたと面接対象者が認知しているもの』については、「介入あり」と判断することとした。一方、「介入なし」については、①虐待行為を認知していたが何もしてくれなかった、②虐待行為に気付いてくれなかった、③不明、のおおむね3パターンに分かれていた。

また、今回の面接対象者では、「介入の主体が誰か」ということにもばらつきがあった。例えば、介入というと、加害者や被害者ではない第三者とイメージされがちだが、加害者から同じく被害にあっている母が介入者となることもあり、「暴力のかやの外の家族」ばかりが、介入者ではなかった。

なお、ここで使っている「介入あり」の定義とは異なり、今回の分析外としたが、被害児童本人が家族間の暴力に「介入」している事例が数例あり、それらはいずれも「介入」から「虐待」へと発展していたことを付記しておく。

男女別に介入の有無を見てみると、まず、男性11名中、加害・被害の対関係のみのため第三者がいない事例を除く9名を見ると、「介入あり」が1名、「介入なし」が8名であった。その8名を見ると、全員が、第三者がいるのに介入がない事例であった。なお、DVとの関係を見ると、第三者がおらず非該当の2名を除く9名中、DVありは3名、DVなしは6名であった。

(\*26) 本章でいう「介入」は、法的介入を意味せず、実質的な介入行為を指す。



**【男性「介入あり」】**

介入のあった1名とは、幼稚園の教育方針を盲目的に信じた父母が、面接対象者に(当時は暴力と違っておらず)心理的暴力を行っていたものの、時間が経つうちに、母自身が自分たちの面接対象者に対する態度・行動がおかしいと気付き、自らの態度・行為を改めるとともに、父にも助言し、父も暴力を止めるに至ったというものである。教育問題に熱心だった両親の勇み足が虐待を招いた例と言えるだろうが、本虐待以外の家庭内のトラブルはなく、まさに適切な助言という介入によって暴力が終息したと言える。暴力の経路は2本だが、このように、他の要因がない場合には、介入だけで虐待終息に効果が出ると思われる。

**【男性「介入なし」】**

介入のなかった8名のうち、散発的な暴力(しつけの範疇とも解される)で終息した2名を除く6名について前述の①～③のパターンで見ると、パターン①が3名、パターン③が2名、パターン[①+②]が1名であった。パターン①は、「母から長子である面接対象者への虐待を、父、弟、妹、及び祖母は知りながら何もしてくれなかった」「飲酒後、父が末子である面接対象者に身体的暴力を振るっていたが、母は手を出すと自分もやられてしまうので何もしてくれなかったし、兄姉も自分だけは父に殴られまいと思ったのか何もしてくれなかった」などというもので、家族成員が複数名いるにもかかわらず何もしてくれなかったとするものであった。

次に、女性33名中、加害・被害の対関係のみのため第三者がいない事例を除く32名を見ると、「介入あり」が4名、「介入と言えるか判断微妙(\*27)」が1名、「介入なし」が27名であった。その27名を見ると、家族全員が被害者のため第三者がいない事例が3名、それ以外、すなわち第三者がいるのに介入がない事例が24名であった。

**【女性「介入あり」】**

介入があったのは4名にとどまったが、4名が同じタイプではなく、介入者への撥ね返し方や虐待抑止の方向性に違いがあった。まず、介入により介入者自身が被害に巻き込まれたものとして、「兄から面接対象者への暴力を母が止めてくれたが、兄の暴力の矛先が母にも向けられたもの」「父から姉への暴力に対して、母と面接対象者が止めようとした結果、巻き添えをくらう形でやりかえされることがあったもの」があった。また、介入により虐待がよりひどくなったものとしては、「父から祖父母以外への暴力に対して、祖母は止めに入ってくれたが、介入すると逆効果となり、父の怒りが増したもの」があった。加えて、介入時点では特に効果もなく、新たな被害者にもならなかったものとしては、「父から母及び面接対象者への暴力があったが、2人の姉たちが、自分たちが進学して家を出るまでは止めようとしてくれたもの」があった。

この4名は、介入後すぐに虐待行為が止んだわけではない。介入をすると、巻き添えや逆襲にあい介入した者まで暴力を振るわれたり、面接対象者への虐待行為がエスカレートしたりするなど、一見すると介入の意味がないとも思われる。しかし、4名の虐待行為の終息時期を見ると、4名とも15歳までに終息している。前述の終息時期と関連させてみると、その4名は、15歳までに終息している11名の中に含まれている。他の要因を排除していないため介入効果とは断言できないが、女性全体の中では早めに終息している。

なお、「介入あり」といっても、介入者が家族成員の一部か、又は全員か(暴力を傍観する家族がいる

---

(\*27) この事例もDVありであった。

かないか)にさらに分かれる。両者の違いで、暴力終息にどの程度差が出るのか、事例数が少ないため不明だが、今後検討したい点である。

### 【女性「介入なし」】

介入のなかった27名だが、加害者以外、家族全員が被害者となったため第三者がいない事例が3名であったが、それは、父と祖父が家族全員に暴力を振るうため面接対象者に介入する人物がいないというものである。もちろん、同時に複数の家族成員に暴力を振るうわけではないので、介入の余地はあるだろうが、介入すれば必ず暴力の見返りがあるとわかっているため介入する者がいなくなってしまう。まさに暴力支配の典型となっていた。

残りの24名を前述の①～③のパターンで見ると、24名のうち、パターン①が14名、パターン②が6名、パターン③が2名、パターン〔①+③〕が1名、パターン〔①+②〕が1名である。24名の中には、母が面接対象者に身体・心理的暴力を行っているのに「更年期症状だろう」と何もしてくれなかった父、自分の姉や母（面接対象者の伯母・祖母）が面接対象者である娘や妻に心理的暴力（ひどいいじめ）を行っているのに無関心を装う父、など我が子への暴力に対して見て見ぬふりするものや、両親から面接対象者が暴力を振るわれているのを見ても兄は一切かばわず、妹も何もしてくれなかった、両親が面接対象者に暴力を振るうのを見て、自分の生活だけは守ろうと近寄ろうともしないで何もしてくれなかった姉妹、など兄弟姉妹が「自分さえよければよい」として自分の同胞に対して行われる暴力を放っておくものなど、家族成員の結び付きや助け合いなど家族の絆の希薄さが如実に現れていた。

なお、「介入あり」の4名のうち、DV ありが3名、DV なしが1名であったのに対し、「介入なし」の27名は、離婚後に児童虐待を行ったものや配偶者の死亡などにより非該当の2名を除いて、25名中、DV ありが13名、DV なしが12名であった。「介入なし」の家庭においてDV の存在が多いとは必ずしも多いと言えない状況であった。

この27名について見てみると、介入なしでも終息したタイプと終息していないタイプに分けられた。以下に、それぞれの典型例を挙げ、家族全体の視点から見ることにする。

#### 事例 A（30歳代前半・女性）－介入なしでも終息したタイプ－

A の家には子どもが3人いたが、皮膚疾患のある A 1 人だけが、両親から虐待を受けた。具体的には、両親が、皮膚疾患という病気のある A に理解を示さず、それどころか、汚い者扱いをしていた。加えて、父は、自分の意に添わないと感じると、A にだけ身体的暴力を振るった。家族間の結び付きは全般に希薄だった。同胞 2 人は、両親の A への態度を知っていたが、いずれも A をかばおうとはしなかった。A の大学進学を機に、A への暴力はなくなったが、それまでの間ずっと、父の暴力に母が同調、母の暴力に父が同調、同胞の介入なしという状況下、A は孤立無援状況であった。

親子間も同胞間も細い絆であり、その延長で、介入もなされていない。このパターンは、当然のことながら、終息時期が遅いものが多く、A のように、面接対象者の結婚や進学など、消極的方法（離脱するために早く結婚したという例もあるにはあるが）によって、結果的に離脱できたというのが大勢を占め、家を出ていなければ継続していると予想されるものが多かった。

#### 事例 B（20代前半、女性）－介入なしで終息していないタイプ－

B は、男子を待望する大家族の中に女子として誕生し、幼少期から、跡継ぎとされた同胞と

の厳しい差別に心理的に傷付けられて成育している。Bを取り巻く家族関係は、祖父母、伯父伯母を含めた大家族であるとともに、家族間の優先順位や力関係が明確であり、祖母と伯母が権力を持ち、同胞は祖母に溺愛され、母とBとがこの三者による心理的な暴力にさらされる弱い立場に置かれてきたと受け止めている。そして、Bが家族内で親和感を有するのは母であるが、幼少期から、その母の苦労を間近にしてきたことによっても心を痛めてきている。なお、このような事態に対して父は仕事が忙しいからと関知せず、祖父や伯父も同様に、事態にかかわることはなかったとBは受け止めている。

この事例では、家族内に、介入しようとするべきではなかったはずの第三者が、父を始め複数存在するにもかかわらず、いずれも事態に介入せず、Bからは事態を黙認してきたと受け止められており、このような状態においてBは、同じく被害者の立場にある母を心配しながら、心理的な暴力によるダメージに長年苦しんできている。この事例については、Bに向かう暴力経路が3本もあり、かつ第三者がこれを黙認しており、終息が難しい典型例と言えよう。

この事例に見るように、祖父母と同居している場合でも、彼らは介入しないことが多く、また、妻から子への暴力、親族から妻子への暴力に対して、父が介入しなかったり家族を守らなかったりすることが多い様子である。加えて、男性は（加害者になることが多く、介入者としての立場に置かれること自体少なめであったが）、介入者としての立場にいる場合であっても、「暴力を見て見ぬふり」という例が目立った。

以上のように、介入の有無を見ると、男女とも介入なし、つまり「何もしない第三者」のいる家庭が多く、愛情や連帯・保護機能の欠如、盾にならない家族、という背景が浮き彫りにされた。さらに、「何もしない第三者」といっても、加害者の暴力を恐れて介入しない・介入できないタイプ、自分さえ被害を被らなければよいとする利己主義的なタイプがあったが、後者とみなしている面接対象者が多かった。

また、「介入あり」であっても、それが「適切な介入」となっていたか否かは、微妙である。男性1名は、介入後すぐに虐待が終息しており、詳細は不明だが適切だったと判断できるが、女性4名は、介入後すぐには児童虐待が終息していない。単に介入の有無だけでなく、介入の時期や内容、家族の団結力などを含めた「適切な介入の有無」という観点が必要であると言える。とは言え、「介入なし」と比べると早い時期に終息してはいる。どのような形であれ、全く介入しないよりは効果があるとみなすことが出来ることを示唆する結果と思われる。

#### (6) その他の要因

虐待に影響を及ぼす要因と考えられるものは少なくないが、今回の面接調査で確認できたものから、面接対象者の親の個人的要因と彼らを取り巻く状況要因に分けて以下に見ることとする。

##### ア 面接対象者の親の個人的要因

面接対象者の親の年齢については、面接対象者を出産時、年齢不明の者を除き、若年（10歳代）あるいは高齢（40歳代後半）に該当するものは1名もいなかった。父親の年齢が41歳というものが2名いたが、母親が40歳代というものはいなかった。30歳代後半以降の両親が2名いたが、年長同胞がいたり、再婚であったりするなど、ライフコースから見て違和感はなかった。

面接対象者の加害者（間接的暴力及び両親以外からの暴力は除く）の学歴は、父が加害者の場合（23名）、中卒が4名、高卒9名、大卒4名、その他2名、不明4名であった。母が加害者の場合（9名）、中卒3名、高卒1名、短大卒1名、大卒2名、不明2名であった。両親が加害者の場合（5名）、すべて

が大卒（父）＋高卒以上（母）の組み合わせであった。

面接対象者の加害者が精神障害を有していたことに言及していた者はいなかったが、「酒のせいで暴力を振るっていた」「酒を飲むとひどかった」と加害者のアルコール問題を言及した者は、間接的暴力を含めて、44名中8名であった。このほか、加害者の人格や性格について、「内弁慶」「子どもがそのままおとなになったような（わがままな）人」と言及している者も8名いた。

このほか、加害者が虐待された経験の有していたことに言及している者が4名いた。

#### イ 面接対象者やその加害者を取り巻く要因

面接対象者の家族やその地域・近隣等との関係に目を向けると、虐待に影響を及ぼしたと考えられる様々な要因がある。そして、これらの要因については、虐待の加害者を含む家族成員個々の要因にも増して大切なものと考えられる。

まず、家計状態については、上・中・下の3段階に区分して面接対象者の判断を求めたところ、「貧乏だった」「苦しかった」「生活保護を受けていた」など、当時の家庭の経済状況は「下」であったとした者は11名、反対に、「裕福な方だった」など「上」であったとした者は9名であった。この結果については、貧困が児童虐待発生的重要原因の一つであるとする言説に疑問を提示するものである。ただし、面接対象者の「子どもの目で見えた当時の感覚」であることをも考慮して解釈する必要があるかもしれない。

つづいて、家族構成をしてみる。同胞数については、男性面接対象者では11名中3名が同胞数4人以上、1名が同胞数3人であり、一方、一人っ子は1名のみであった。女性面接対象者では33名中5名が同胞数4人以上、12名が同胞数3人であり、一方、一人っ子はいなかった。事実、多子家庭で定職がない父が、面接対象者のみならず兄弟すべてに対して身体的暴力を加えたり、家から閉め出したりするなどして当たっていたと語る面接対象者がいた。その面接対象者が、「子どもが多くてうるさくていらいらしていたのであろう」と父のことを解釈していたように、「子沢山」であること自体が家庭内のストレスを高めることもあるのかもしれない。

祖父・祖母との同居の有無については、同居していた者が、男性面接対象者では11名中3名であり、女性面接対象者では33名中13名であったが、祖父母の面前で暴力が横行するなど、祖父母の存在が虐待を抑止するものとなり得ていない場合があった。加えて、異なった世代が同居している分、様々な主義主張が入り乱れ、結果として、家庭内の秩序が失われる結果を招くといった様子も見られた。

加えて、面接対象者の家庭の中には、義理の親子関係、親の欠損・長期的不在、家族の病気、親の失業や転職、いわゆる「亭主関白」「かかあ天下」など家族成員の力関係が著しく不均衡である家庭など、健全な家族機能が働きにくい家もあった。

DVについては、44名中20名の家庭にDVが併合していたが、児童がDVの巻き添えになったり、DVの被害者から虐待されたりといった現象が見られ、DVと児童虐待とが密接に関連していることが浮き彫りになった。

また、封建的な家風のもと、世帯主が絶対的な存在となっており、世帯主からいわれない虐待を含む暴力が横行しても、それに対する抑止機能が働かない事例、家督相続にからんで、長子を溺愛したり、男児と女兒を差別的に扱ったりするなどの事例も見られた。

上に挙げた虐待に影響を及ぼしたと考えられる家庭の要因について、面接対象者のうち、単発的な虐待行為のみを経験した者を除き、すべての者が、いずれかを有しており、複数の要因を有している面接対象者も多かった。

このほか、地域・近隣との関係にかかわるものについては、面接対象者の目からは、日ごろの近所付

き合いは「普通」に見えるのに、家庭内で暴力沙汰が生じた際には、近所の人が仲裁に乗り出したり、助けてくれることがなかったと受け止めている者が複数認められ、それについて、「近所は、なぜ助けてくれないのだろうと思った」と述べている者もいた。虐待家庭が「特別」な存在として近隣から異端視されていなくても、近所の人々が、虐待に介入することは多くはない様子である。他人の家のことには口をはさまないといった現象が従前からのものであるのか、それとも、昨今の風潮によるものであるのかは定かでない。しかし、いずれにせよ、面接対象事例の中で、地域・近隣関係が児童虐待を抑止する機能を果たしている事例はごくわずかにとどまっていた。

### 3 家族史からの分析

一連の虐待を見ると、面接対象者や加害者のみならず、それ以外の家族の成員までもが、虐待の発生や背景、終息に絡み合っている。原因や終息の理由が明確でないというのはその表れであると思われる。しかしながら、家族史を眺めると、「(なんらかのトピックがあるのを契機に)このとき、この人が、こうしていれば虐待は変化したはず。」という転機のようなものがある。そこで、以下では、家族史をたどりながら虐待を見ていくことにする。暴力経路のそれぞれのタイプごとに事例を取り上げ、虐待の終息までの家族全体の動きやかかわりについて検討していくこととする。

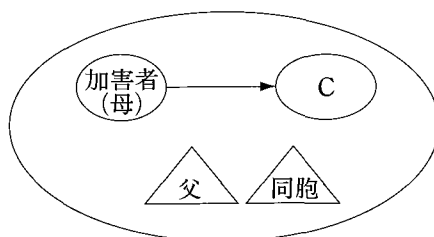
#### 【加害者一人から面接対象者のみへの暴力】

##### 事例 C (30歳代前半・女性)

Cの家族は、弟、両親との4人家族であるが、母が、Cの行動をすべて関与・束縛・規制する形で「支配」していた。幼い頃は、身体的・心理的暴力のいずれも受け、身体的成長につれ心理的暴力のみに変化した。また、同胞に障害があったことで、その同胞の誕生後には、Cへの「期待の裏返し」として、暴力がひどくなっていった。高卒時も就職時も、母はCの意思を尊重せず、思いどおりにしようとした。

加害者の夫婦関係は「かかあ殿下」で、父は母に進言できない状態であった。父は、母の暴力を知りつつも介入することなく、せいぜい休日に息抜きに連れ出してくれる程度であった。

図2 加害者一人から面接対象者のみへの暴力



注 △は第三者を表す。

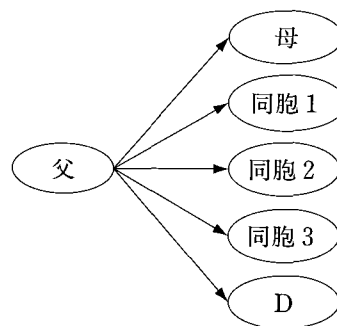
第三者として父がいるが、全く介入せず、結局、ずるずると成人後まで暴力は終息しなかった。暴力経路は1本しかないため、一見、終息しやすいように思うが、1対1の関係で、かつ、介入なしで暴力を容認される環境の中では、逆に転機を見つけ出しにくいのかもかもしれない。同胞の出生とともに暴力がエスカレートしたが、家族の病気や障害が暴力を促進させる要因になっている。

【加害者一人から家族全員への暴力】

事例 D (20歳代前半・女性)

D の家庭では、同胞が 4 名で、多子家族である。父は、毎日仕事がなく、日雇いという就労形態であった。主として母がどうにか家計を支えていたが、生活は貧しかった。また、母は病気で入院することも多く、家庭内が経済面以外でも不安定であった。父は仕事がないことや子どもが多いことなどで、常にいらいらしていたようで、母へ身体的暴力、子ども全員へ身体的暴力とネグレクト (D には加えて性的暴力) を振るっていた。その暴力は、D の幼少期から 16 歳ころまで続いた。家族全員が被害者であるため、第三者はいない。なお、父自身、暴力を受けて育っているらしい。

図 3 加害者一人から家族全員への暴力



注 第三者はいない。

父は、その生育歴において暴力を学習しており、加えて、経済的困窮や家族の病気、夫と妻の収入逆転など物心ともに安定感・満足感を欠き、ストレスが重なって、暴力を振るっていたと思われる。一方、母は、子どもたちへの暴力に対しては介入者と成り得たであろうが、自身への暴力や入院等で心理的・物理的に介入できず、子どもへの暴力を結果的に容認することになったとうかがえる。なお、同胞の多少の抵抗はあったものの、功を奏するまでには至らなかった様子である。

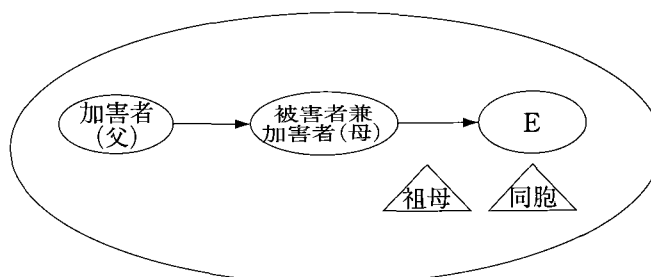
この事例のように、家族全員に暴力を振るう事例は (若干の変形も含む)、44 名中 4 名もいた。いずれも経済状態は中以下であり、生活が苦しいものが多かった。

【加害者一人から面接対象者のみへの暴力だが、加害者は別の暴力の被害者であるもの】

事例 E (30歳代後半・男性)

父が飲酒して、母に難癖をつけて心理的・身体的暴力を働いていた。母が父から暴力を振るわれた時は、兄、祖母が第三者としてそばにいたが、介入することはなかった。E たちは、母と一緒に叔父のもとに逃げたりしており、E の中学 1 年時には離婚に至り、以降、母子のみの家庭となり、生活保護を受けている。ところで、E は、小学生の頃から (E 自身に小学生時から問題行動もあったのだが) 母から心理的暴力を受けている。同胞と比較され、「産まなきゃよかった」などと言われてもいる。

図4 別の暴力の被害者が虐待の加害者となるパターン



注 図2に同じ。

この事例において、父の暴力に祖母等が介入できなかったのは、恐怖心からと思われる。また、母によるEへの心理的暴力については、Eに問題行動があったことが直接の原因であろうが、背景的な要因として、母は父からの暴力で、ストレスがたまり、加えて、離婚後は経済的負担も重なったことが挙げられると思われる。

44名中4名が、このような形の暴力の被害にあっていた。4名のうち、離婚まで至ったのはこの事例Eだけであったが、夫婦仲が悪い、夫婦間コミュニケーションが欠如しているという点は共通していた。

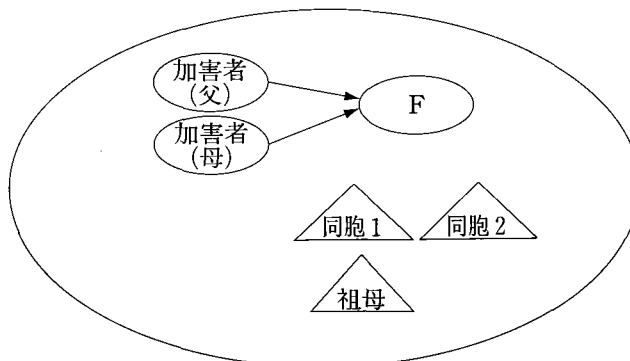
暴力経路は1本だが、加害者が被害者を兼ねているため、暴力のエネルギーが高まる場合がある。ある意味では、「暴力の連鎖」「暴力の学習」の被害と言えるであろう。中には、第三者であった者までもが暴力を学習して、面接対象者に暴力を振るうものもあった。

#### 【加害者複数（両親）から面接対象者のみへの暴力】

##### 事例F（30歳代前半・女性）

Fの成育したところは保守的な土地柄であり、跡取が大切にされる閉鎖的な環境の中、長男は溺愛された。Fは、幼少時期から28歳まで、主として心理的暴力を父母に振るわれたが、年少同胞2名及び父方祖母は傍目にもわかるFへの暴力に対して、介入してこなかった。父は体罰を含め厳しく育てられており、祖母も旧家の意識から、父の振る舞いに疑問を持たず、介入しなかったと思われる。一方、母自身は嫁ぎ先でよそ者扱いをされていたため、家風に合った落ち度のない養育を心掛け、父に同調行動をとっていた様子である。なお、Fは心理的暴力を受けていると感じていながら、進学などの転機はあったにもかかわらず、28歳になるまで独立していない。

図5 両親から面接対象者のみへの暴力



注 図2に同じ。

この事例の暴力の経路は2本である。しかし、両親が結託して子どもの暴力に走っているという構図でもない。夫婦間の情緒的交流がないなどその関係は良好でなく、それぞれがそれぞれの思いで子どもに当たっている。また、同胞がいるが、同胞はかわりを持とうとしてない。

なお、この事例では、児童虐待の法律上の定義年齢を超えた時点以降も「暴力」が継続していることも注目に値するが、こうした傾向は、この事例に留まらなかった。

#### 4 むすび

これまで、様々な要因の虐待の程度に及ぼす実情を見てきたが、端的に言えば、虐待は、個々の要因の単純な足し算ではなく、いくつもの要因が複雑に絡み合い、相互作用の中で増幅された結果であることがうかがえる。言い換えれば、それを引き起こした複数の要因の総和以上の現象となって現れるのである。しかし、児童虐待の多くは、ある期間継続している。したがって、相互作用の中で増幅されるだけでなく、それにブレーキをかける十分な時間も要因も持ち合わせており、増幅だけでなく抑制できる可能性も秘めているのである。要するに、その機能が働けば、総和以上ではなく総和以下になるという現象も出てくる。そして、そこに影響するのが、家族なのである。

虐待を行う加害者においては、夫婦のコミュニケーションの不足を含めた「社会的絆」が欠如・不足し、家族全体についても、「絆」が欠如している家庭が多かった。絆が欠如すると、家族成員の結び付きは当然希薄になり、何か問題があっても家族で助け合おうとせず「利己主義」的解決方法を取りがちである。同胞や子どもの危機場面にあっても、自分が「逃げる」「かわらない」ことを選択してしまう。その結果、止める者がいない、あるいはそれが不適切であると、暴力が継続・増長する。

また、不幸なことに、二次被害的な児童虐待もあった。前述の介入巻き添えタイプでなく、家庭内に間接的暴力がある場合(多くはDVであるが)、その被害者が、新たに加害者となって子どもに暴力を振るうタイプである。子どもが大人たちの犠牲になる。しかも、加害者は、他から暴力を受けたストレスがかかっている分、子どもへの攻撃にはね返る力は大い。

DVと児童虐待、両方の暴力が家庭内にあるものが面接対象者に多かったことは先に述べた(女性は33名中17名が、男性は11名中3名)が、DVが生じ、それを止めようとすると、助けた者が巻き添えをくらい、DV(夫婦間)と児童虐待(親子間)のどちらが端を発したかわからないくらい両者が大きな問題に発展する場合が多かった。また、暴力にかかわらないようにしようとする第三者も多く、その結果、ますます面接対象者への暴力が増長してしまうものもあった。DVの被害者が離婚や死亡などで対象喪失すると、それが転機となって暴力が消失する場合もあったが、その代替として矛先が子どもに向けられることもあった。DVの児童虐待に与える影響は、直接的にも間接的にも大きいと言えよう。

介入については詳しく述べたが、虐待は当事者だけの問題ではない。介入があった家庭には、大なり小なり、暴力へ立ち向かう強さ・家族を守る気持ちがあり、虐待の終息に寄与していると思われた。

以上が、家族という視点をとって見た虐待の構図である。



## 第4 面接対象者の逸脱行動等

児童虐待から逃れるため、あるいは虐待による痛手を多少とも緩和するために、児童虐待を受けた者が様々な逸脱行動等をするようになることは十分に考えられる。本章では、虐待を受けたことの直接的影響と判断できるかはさておいて、児童虐待を受けた者である今回の面接対象者に見られた逸脱行動等について、概観する。はじめに、面接対象者の犯罪行動について紹介するが、犯罪行動をしていないとする者も少なからず存在したことから、犯罪に至らなかった理由についても触れることにする。つづいて、児童虐待が行われる「家」から離れる現象について言及する。家出等によって保護者の監視が十分に行き届かない状況下では、未成年者が犯罪に至りやすいと考えられるが、一方、児童虐待を受けている者にとって家を出ることとは、家での虐待から逃れるための対処行動であるとも位置付けられるので、この現象について触れることにする。さらに、児童虐待が起きるような家庭では適切な養育を受けられない分、そうした子どもに対する学校での教育に期待するものは大と言えるが、その学校適応の実情について紹介する。加えて、面接対象者の多くに、自らを傷つけようとしたり、あるいは実際に傷つけたりする現象が見られたので、それについて言及し、犯罪に携わる一方で上記現象が併存する事例についても紹介することで、本章を終えたい。

### 1 犯罪とのかかわり

#### (1) 犯罪の具体的内容

法務総合研究所（2001）では、少年院在院者のうち虐待を経験した者の割合が高いとの結果を報告しており、また、日本弁護士連合会（2001）は、一般の高校生より非行少年の方が虐待を経験した割合が高いこと、及び、一般高校生の中でも虐待の経験がない者よりもある者の方が非行経験の割合が高いとの結果を得たことを示している。一般人を対象とした本研究の面接対象者の中には、受刑歴を語る者はいなかったが、面接対象者44名のうち8名、男性面接対象者のうち4名、36.4%(\*28)、女性面接対象者のうち4名、12.1%が、自らが犯罪(\*29)にかかわった旨、言及していた。以下に、男女別に、その内容を見てみることにする。

男性面接対象者の中には、学校不適応で不登校になり、そのことで親からも責められるようになった状況下、本を数回にわたり万引したものの、店長に「今度万引きしたら警察に通報する」と言われてやめたと語る者がいた。また、父が母に暴力を振るうのを目の当たりにし、さらに本人自身は母から心理的暴力を受けたとする者が、検挙には至らなかったものの、小学校のころから金に困ったとか親を困らせたかったなどの特別な理由からではなく単にしたいからの理由で万引をし、中学校時代には不良顯示的な格好をするにとどまらず、恐喝などもしていたと語っていた。また、母から身体的暴力及び心理的暴力を受けていたとする者が、学校でいじめられた相手を片っ端からやっつけたところ児童相談所係属となった旨を語っていた。さらに、父から母や本人が暴力を振るわれたとする者が、高校進学後、暴走族にあこがれ、暴力団とも関係を持ち、傷害事件を起こし保護処分を受けたとしていた。

(\*28) 男性面接対象者11名のうち、被害の程度が軽く、しかもその被害について面接対象者自身も納得しているとする2名を除くと、9名中4名、すなわち、44.4%が犯罪に関わった経験を有するとの結果となっている。

(\*29) ここでは、家出、不純異性交遊などの刑罰法規に該当しない不良行為を除き、刑罰法規に触れる行為に限っている。

これらの事例からは、犯罪の動機が家庭の問題と直結しているわけではないこと、また、軽微な財産犯のみならず粗暴な犯罪に至る場合もあるなどの特徴がうかがえる。

一方、女性面接対象者については、4名中3名が、犯罪の動機として家庭での不満に言及していた。具体的には、ネグレクトや心理的暴力を行う母に対して、母と一緒に買い物に行った際に母を困らせようとして万引をしたと述べる者がいた。また、父に定職がなく食べ物に事欠き、中学時代、食べたい物を準備していたスーパーの袋に詰め込み客に紛れて店から出ることを繰り返していたものの、そのようなことをし続ける人間になるのが恐いと感じ、高校に入ってからはやめたとする者がいた。さらに、家族がしょっちゅう金銭面でもめており、面接対象者自身も物を買ってもらえなかったので小学校時代に万引をしたと語る者もいた。なお、この者の兄弟は学生時代、不良顕示的に振る舞っており、面接対象者自身も万引に加えて、高校時代には校則違反もしていたとするが、その一方で、大きくはみ出して非行・犯罪をするのは自分らしくないし、無理と感じたと述べている。後者2事例については、自分にとっての非行・犯罪の意味を自ら問い直し、抑止するに至っていることがうかがえる。

このほか、非行の発覚で親が子にしっかりと向き合い親子関係が修復され、非行も収まったとする以下のような事例もあった。

#### 事例 A (30歳代後半・女性)

A は、高校時代、学校に興味を失い、不良グループと交際するようになり、小物や雑貨と一緒に万引していたが、それがある日、母に見つかった。兄に比べて何かと出来のよくない A に対して身体的暴力や心理的暴力を加えていた母が、その時は、A が不良になった原因について両親の夫婦仲に起因するものに違いないと母自身を責め、A を怒らなかった。そして、母は A の問題行動について泣きながら1日かけてじっくりと A に諭した。A はそれ以来、万引をやめたし、不良グループとも付き合わなくなった。

まとめると、女性は、男性に比べて犯罪に走る比率が少なく、かつ、家庭が犯罪の促進あるいは抑止に影響を及ぼしやすいこと、また、軽微な財産犯にとどまっていることなどの特徴がうかがえる。

#### (2) 犯罪に走らなかった理由

一般人を対象とした本研究の面接対象者の多くは、非行・犯罪に関わっていないと述べていた(\*30)。したがって、以下に、面接対象者が語った非行・犯罪に走らなかった理由について分析する(\*31)。

自らが非行や犯罪に至ることを「思い付かなかった」と明言する者が6名いた。本研究の面接対象者44名のうち、家族成員が非行(文化)や犯罪(文化)とかかわったことがあるとする者は6名いたが、思い付かなかったと明言する者の中に、そのような家族成員を有する者はいなかった。実際、身近にそのような者がいなかったので思い付かなかったと言及している者もいた。この結果からは、非行(文化)や犯罪(文化)との接触の有無が、非行・犯罪に至るかどうかに影響を与えていることがうかがえる。

他方、親戚が非行・犯罪防止活動に関わっていることもあって、非行・犯罪などとんでもないといっ

(\*30) 面接開始時に「正直に語ってほしいが、答えたくない質問には無理して答えるには及ばない」としていることから、面接対象者の中には、非行・犯罪についての言及を避けた者が含まれた可能性も考えられる。

(\*31) 「なぜ非行・犯罪に走らなかったか」の質問に対しては、日ごろ非行・犯罪をするかどうかを念頭に置いて生活していないためか、簡単な語りで終わる事例が多かった。特に男性面接対象者については、明瞭な回答は得られなかった。

た雰囲気のある家庭に育ち、さらに、高校時代、有機溶剤吸引をしている人と接触し、自分は絶対にその人のようになってはいけないと思ったとする者もいた。

また、「他者を心配させたくないとの思いから踏みとどまった」とする者が4名いた。具体的には、兄弟が親をすでに十分心配させているので、あるいは、親自身現状を乗り切るのに大変なのに、これ以上の心配をかけるわけにはいかないとの思いから踏みとどまったとする者や、かわいがってくれる祖父母に心配をかけてはいけないとの思いが自らを律したとする者がいた。他者との心理的絆が非行・犯罪を抑止するに至ったと解釈できよう。

このほか、自分にとっての非行・犯罪の意味を勘案したとする者もいた。「非行に走るのはあほらしい」「非行者になりたいとは思わなかった」などと全面的に非行・犯罪に対して否定的意見を表明する者がいた。加えて、「自分は先のことをあれこれ考えるタイプであり、犯罪に走ったら親も困るけれども、同時に自分も困ってしまい、自分が困ってしまうことへの不安や恐怖からできなかったと思う」と振り返る者、「周囲には非行に至っている者がいたものの、自分は気が小さく怖がりなので、非行などといった大胆なことはとてもできない。それに、家族間のトラブルを目の当たりにしており、トラブルに巻き込まれるのはまっぴらと思っているが、自分が非行などにかかわれば、それは自らがトラブルの種となることを意味するのであって、そのようなことはとてもできない」とする者もいた。また、「不良になれたらどんなにいいだろうと思う一方で、不良は自分には似合わない」と友人から言われた」とする者もいた。

なお、児童虐待と関連した発言としては、2事例が「非行や犯罪に至ることで、虐待がより一層ひどくなると受け止め踏みとどまった」としていたが、その虐待内容はいずれも、母の意に添わない面接対象者の言動に対して母から身体的暴力や心理的暴力が加えられるといったものであった。

## 2 家出等の家から離れる現象

家族からの虐待から逃れるための対処行動の一つとして家出が考えられる。法務総合研究所（2001）では、虐待を受けた際、少年院在院者がとる最も多い対処行動として家出が挙げられることを示している（\*32）。したがって、一般人を対象とした本研究の面接対象者についての家出の様子を以下に分析する。

まず、男性面接対象者については、義務教育終了後、棲家や頼れる相手の見通しが無い状況下でも、家を出たまま転々としていたと語る者が4名いた。具体的には、親から遺棄され、中学卒業までは施設で育ち、一旦は住み込み就職をしたものの、その後、友人に誘われ他の土地に移り住み、その時々をどうにか乗り切って今日に至ったとする者がいたほか、幼少時期から家出経験があり、一旦は家出がやんだものの、中学卒業後は親元を去り、職を転々としながらも自活してきたとする者がいた。このほか、中学卒業後、家に寄り付かなくなり反社会集団と行動を共にしていた者、友人宅等を転々としながらしばらく生活していたとする者がいた。

カフマン&ワイグム（1999）は、家出中に非行に走る危険性は高いが、児童虐待の被害を有する者が非行に陥る危険性が高い理由の一つとして、彼らが家出に至る比率が高いことを報告している。今回の男性面接対象者においては、家を出た状態で非行に走ったことを認める者は1名にとどまったが、その他の者でも、親元等を離れた後、生活の見通しが十分得られず、不安定な生活状況であったこと等を鑑みると、非行・犯罪に陥る危険性が決して低かったとは言い切れないと思われる。

（\*32） 身体的暴力（軽度）、身体的暴力（重度）、性的暴力（接触）、ネグレクトのそれぞれの被害に遭ってどうしたかの質問において家出を挙げたもの（重複回答）は、（家族被害群と被虐待群を合わせて一部再計算）男子では、42.3%、48.5%、17.2%、54.4%、女子では、61.6%、74.2%、44.1%、42.1%であった。

一方、女性面接対象者については、加害者との接触を極力減らそうとはする(\*33)ものの、男性と異なり、行き先を定めず、長期間にわたって家を出るといった現象は語られなかった。家を出る場合も、親戚宅や友人宅をその行き場とし、中には、実家から離れたいとの理由から結婚に踏み切ったとする事例もあった。父からの身体的暴力に我慢できなくなって家を飛び出し、警察などに保護を求めに行った事例もあった。

また、友人の家出に付き合ったところ、ホームシックになるどころか親からの心理的暴力から解放され楽だと感じる自分にびっくりしたとしながらも、その友人との縁が切れて以降、家出をすることはなかった事例もあった。

加えて、加害者である父から「出て行け」と暴言をはかれると、一旦は家を出るものの、友人宅に長居するわけにもいかず、やむなくこっそりと同居する祖母の部屋に戻っていたとする者、粗暴な父から逃れるために、兄弟と家出しようかと話し合ったものの、結局誰も家出しなかったと述べる者など、行き場が見つからない際には家出自体を諦める事例もあった。

このほか、自らは家を出ることについて思い付かなかったものの、他者から助言され、家を出るに至った事例もあった。具体的には、父から性的暴力を受けながらも、父が生活・行動全般を厳しく束縛・制限していたため、家を出ることを思い付くことすらなかったものの、ある時親戚に相談したところ「家を出た方がよい」と言われ、一人暮らしに至ったとする者、家庭の状況を心配してくれていた学校の先生が「絶対に家を出た方がいい」と熱心に勧めてくれ、自分も家を出ようと思うようになり、家から通うのではない進路を選んだとする者がいた。

男性に比べて女性は、家にとどまることをごく当然と考える傾向があり、行き先が定まらない状況下、長期間にわたって家を空ける行動に出ることは少ないとまとめられよう。

### 3 学校不適応

家族から虐待を受けている者にとって、学校が虐待から遠ざかることができる安息の場となることは十分に考えられる。実際、本研究の面接対象者の中にも、兄弟に比べて出来が悪いとして親の監視下で身体的暴力や心理的暴力を加えられながらあれこれ課題に取り組まされていたとする者は、「学校は気の抜ける場所だった」と語っている。

しかし、その一方で、家族から虐待されることで虐待を受けた者の社会化そのものが遅れてしまうおそれも考えられる。また、家族で十分に養育されていないことについて教師や他生から中傷されたり、あるいは虐待されたことによる不安定な気持ちやうっ屈した感情を学校生活で発散させてしまったりする結果、安定した学校生活が送れないといったことなども推測される。

実際、本研究の男性面接対象者のうち3名が学校不適応について言及していた。その具体的内容としては、親のことを中傷されたり、面接対象者自身の言動についてからかわれたりするなど他生と良好な関係を保てず孤立し、学校から抜け出すことを繰り返していたとするもの、困ったと感じたことはなかったものの小学校時代から他生と交流することなく一匹狼的存在であったとするものなどであった(\*34)。

また、女性面接対象者の中にも、学校でいじめの対象となり、学校を抜け出しふらふらしていたり怠学したりしていたとする者が5名いた。また、学校の方針と自らの希望が違うので不登校気味だったと

(\*33) 加害者の機嫌をとった、あるいは加害者を刺激しまいとしたなどの対処行動に言及する者もいた。

(\*34) このほか、小学校時代から他生徒からいじめられた上、中学に進学してからは教師から不当な扱いを受け、心身症様の反応が出て不登校に至り、その不登校となったことで家族から虐待されるに至ったとする者が1名いた。

する者も2名いた。このほか、精神エネルギーが低下してしまい、学校に行けなくなってしまったとする者もいた。なお、家族からの虐待と関連させて不登校に言及している者としては、中学時代、家族関係のストレスに加えて受験のプレッシャーもあって精神的に参ってしまい不登校になってしまったとする者、家族のことで思い詰め、自殺までも考えた際、短期間ではあったものの学校を休んだとする者がいた。

#### 4 自己毀損現象等

ハーマン（1992）は、児童期虐待を経験した人は他人を虐待するよりも自分を傷つけるようになる確率の方がずっと高いとしている。したがって、一般人を対象とした本研究の面接対象者についての自己毀損現象について以下に分析する。

まず、男性面接対象者については、11名中、「死」が頭をよぎったとする者は1名のみ（9.1%）であった。一方、女性面接対象者について見てみると、33名中12名（36.4%）が死のうと考えたと言及しており、さらに2名が死への願望とも思える行為を自らが行っていたと言及していた。これらの数字からは、男性に比べて女性の方が自殺を意識する割合が高いことが読み取れる。なお、これらの女性は、死を思い立った理由として、「生きていては迷惑な存在と思った」、「生きていても楽しくない」あるいは「生きている意味が見いだせない」、「死んだら楽になる」あるいは「現状（のつらさ）から逃げたい」などを挙げていた。そして、上記12名の女性のうち3名が、これまでに実際に自殺を図ったところを危うく発見されたとしていた。また、直接的に自殺を考えたわけではないものの、「投げやりな気分になり自分がどうでもよくなり、好きでもない男と性関係を結んだり、危ない運転に付き合っており、意識的ではなかったものの自殺願望の表れだったかもしれない」と振り返る者、「湯船に顔ごとつけて呼吸が苦しくなりながらも電灯の光を見ることに快感を覚えるとか、スピード狂である自分について、その延長線上に死への願望があるのかもしれない」とする者もいた。

また、男性面接対象者のうち、自傷行為に言及する者はいなかった。ただし、面接対象者自身が自傷行為と意識して行っているかどうかは別として、1名が大量飲酒に至っていた。一方、女性面接対象者については、死の意図があったかどうかは定かでないものの自傷行為を行っている者が4名いた。具体的には、児童虐待に加え、学校でもいじめにあった状況下、カッターで手首を切ったが誰にも気付かれなかったとする者、家族から虐待されては、壁に頭を打ち付けたり、手で頭をがんがん叩いたりしていたとする者がいた。加えて、性的虐待を経験した者は、後日、カッターで腕を繰り返し切り、数日間傷口がぱっくりと開いていたこともあるが、「血が流れるのが良かった」「切ったら落ち着く」と説明していた。なお、この者は、煙草に加えて家にあったシンナーらしきものを単独で使用してみたこともあるとし、大量飲酒も行っているほか、行きずりの者とも性関係を持っており、徹底的に自分を痛めつける行動をとっている。このほかにも、2名が不純異性交遊を経験していたほか、中学時代喫煙しながら夜遊びをしていたとする者もいた。これらの行為は、本人が意識しているかどうかは別として、自らを傷つける行為であることは間違いない。

このほか、自らの心身に異常が生じることも自らが痛めつけられていることであり、広義に言えば自己毀損現象に含められよう。男性面接対象者では、11名中4名、36.4%が精神疾患や神経性と思われる身体症状を経験したことを語っていた。その具体的内容は、児童虐待を受けていた当時、爪噛みやチック症状が出現した、幼少時期に虐待された上、高校時代に別の被害に遭ったところ、視線が気になるなどの症状が出た、教師から不当な扱いを受けたと感じたところ胃液が口から出て止まらなくなったり身体がしびれて動かなくなるなどの症状が出現し、未だに心身症状が完治していない、虐待当時はさほど

意識していなかったものの、成人になって以降、焦燥感や不安が募りやすくなってきており、さらに不眠も伴っているといったものであった。一方、女性面接対象者については、33名中15名、45.5%が精神疾患や神経性と思われる身体症状を経験したことを語っていた。その具体的内容とは、家族からの虐待や学校でのいじめなど本人にストレスがかかっている状況下での、下痢、嘔吐、腹痛、急激な体重減少、頭痛、不明熱、しびれや硬直状態、人前で声が出ない症状、視力の低下、生理不順、過呼吸、チック、抜毛、潔癖症など多岐にわたっていた。このほか、メヌエル氏病様の症状、他者と接するのが怖いとした引きこもり、摂食障害、医者から精神分裂病（統合失調症）、躁うつ病と診断されたとする者もいた。男女いずれも、低くない割合で心身の異常を来していることがうかがえる。なお、上記女性面接対象者15名中10名は、上記の自殺念慮あるいは自傷行為にも言及している者であった。

## 5 逸脱行動等の方向性

これまで見てきたように、本研究の面接対象者には様々な逸脱行動等が見られた。ところで、一人の面接対象者が複数の逸脱行動等にかかわっていることも少なくなく、さらに、その逸脱行動等の方向性についても、犯罪のように外界に向かう行為が見られる一方、自らを傷つける行為にも出る事例が見られたので、以下に紹介する。

### 事例 B（30歳代後半・男性）

父が酒に酔っては家族に暴力を振るっていたとする B は、中学卒業以降、家に寄りつくことなく、反社会集団と行動を共にし、傷害事件を起こして保護処分を受けている。成人以降も、人といさかいになって警察が呼ばれるようなもめ事になりかけたことが一度ならずある。かつて、B は父を見て、酒乱には絶対にならないと強く心に決めていた。しかし、素面だと妙に不安になったりイライラ感が募ったりして、毎日大量に酒を飲む生活が続いている。さらに、夜よく眠れないとの訴えがあり、眠剤を酒で飲んでいる。

### 事例 C（30歳代前半・女性）

小学校時代、家で物を買ってもらえないため万引をしたとする C は、家庭での虐待に加え、小・中学校時代、学校でもいじめられ、そのいじめを苦にして、2度自殺を試みている。また、学校に行くべきと思いつつ行きたくない気持ちが強まると、自然に目が見えなくなったり発熱したりと身体が不調になることがしばしばあった。しかし、高校入学後は、同じ試験で入ったのだから力の差はないと強気の姿勢で臨み、校則違反も含めて、やりたいことはやるとの態度をとった。すると、いじめはなくなり、上記症状もおさまった。

事例 B では、警察沙汰になるような他者への威嚇行為が見られ、一見、攻撃性が外界に向いているように映るものの、その一方で、面接対象者自身、焦燥感、不安感を強く抱き、不眠をも訴えているなど内界も安定しているとは言えず、酒に依存することで多少とも内界の不安定さを感じまいとしている様子がうかがえる。また、事例 C は、事例 B に比べて攻撃性の矛先が自分に向いている傾向がうかがえるものの、虐待やいじめへの対処行動として万引や校則違反といった行動をも伴っている。虐待を受けるなどの状況下、釈然としない気持ちのはけ口を人は求めると考えられるが、これらの事例からは、そのはけ口の方向性が外界に向かうか自らに向けられるかが二者択一とは限らず、随伴して生じ得ることが、性別を問わず見て取れる。

## 6 むすび

本章では、児童虐待を受けた今回の面接対象者に見られる逸脱行動等について概観した。

まず、女性面接対象者よりも男性面接対象者の方が、刑罰法規に触れる行為にかかわった旨言及した比率が高かった。また、男性面接対象者については財産犯にとどまらず粗暴な犯罪に至ったと言及している場合が認められた一方、女性面接対象者が犯したとするものは軽微な財産犯にとどまっていた。なお、男性面接対象者は犯罪の直接的動機として家族について言及する者はいなかった。一方、女性面接対象者については、犯罪の直接的動機あるいは犯罪に至らなかった理由として家族に言及する者が多かった。このほか、女性面接対象者の中には、非行・犯罪に自らが走ることを勧告し、踏みとどまったとする者もいた。

つづいて、家庭での虐待の被害から逃れるための一つの対処行動と解することもできる「家」から離れる現象については、男性面接対象者では義務教育終了後、行き先が十分定まらない状況下であっても長期間にわたって家を離れる現象が見られた。一方、女性面接対象者については、家にとどまることをごく当然と受け止める傾向がある様子で、行き先がはっきりとしていない状況下、長期間家を離れる現象は見られなかった。

一方、学校適応状況については、男女いずれの面接対象者についても、孤立したりいじめられたりや学校関係者と良好な関係を結べない者や学校生活に興味を抱けない者が少なからず存在していた。児童虐待を受けた者の場合、家庭で適切な養育を受けられない分、学校での教育に期待するものは大と言えるが、本研究結果からは、その難しさが示唆されるところと言えよう。

加えて、今回の面接対象者の多くには、自らを傷つける願望を抱いたり、あるいは実際に傷つけたりといった現象が見られた。男女いずれも自殺念慮を有した者が存在したが、女性面接対象者のうち自殺念慮を有したとする比率は三分の一強にまでのぼり、男性面接対象者に比べて高かった。なお、その理由については、生きていては迷惑な存在、生きる意味が見いだせないなどと自己肯定感を持ってないことを挙げる者がおり、現実生活のつらさから逃避したいというのみならず、自らの価値を見いだせないといった深刻な自己イメージを有している様子がうかがえた。さらに、男女いずれも精神疾患や神経性と思われる身体症状を経験したとする者がおり、女性面接者においては半数近くにまでのぼっていた。なお、犯罪にかかわりながら、その一方で自らをも傷つけるといった現象も見られた。

## 第5 面接対象者の現在及び現在までの経緯

今回の面接対象者は、様々な児童虐待を乗り越えて今日に至ることができた者と位置付けることができるが、児童期を過ぎた彼らが、現在、どのような状態であるかを明るみにすることは興味深いことであろう。そこで、まず初めに、GHQの結果を中心として、面接時点における面接対象者の精神的な健康度について言及し、つづいて、児童虐待の種類別に被害当時以降の経過について紹介することとする。つぎに、面接時点における被害経験や加害者のとらえ方について言及することとするが、面接対象者の精神的な健康度や加害者との接触の程度から分析を行うと同時に、加害者との関係性の変化に面接対象者の性別に由来すると思われる異なりが見られたのでその点についても言及する。また、虐待を受けた経験は、その経験者の家庭観や他者関係の持ち方にも大きな影響を及ぼすことが考えられるので、その点についても言及してみたい。加えて、「虐待の連鎖」といった概念が普及してきたこともあってか、面接対象者の側から、虐待の連鎖にかかわることに言及する事例が多かったので、その様子についても触れてみたい。そして最後に、面接対象者自身が、今日に至ることができた要因をどのようにみなしているかについて紹介することで終わりとしたい。

### 1 当時の被害状況とその影響の経過及び現在症

#### (1) GHQ からの分析

トラウマ（心的外傷）を体験をした人全員が、PTSDの症状を示すわけではない。しかし、子ども時代の虐待は、深刻な長期的影響を及ぼすことが少なくない。ハーマン（1992）は、虐待のひどさ、続いた期間の長さ、どれほど幼い時から始まったかに比例して、トラウマからの回復は複雑で厄介なものになるとしている。カープら（1996）も、虐待された子どもにトラウマが生じる要因として、虐待が長期間続くこと及び繰り返されること、虐待をする人が一人ではなく何人もいること、性的虐待の場合には実際に性交がなされること、性的虐待が力づくでなされること、乳幼児期に虐待されること、性的虐待や心理的虐待に身体的な暴力を伴うこと、虐待を受けたときに子どもが無力感を覚えたり、親に裏切られたと悲しい思いをしたり、自分は汚れてしまってもう元には戻れないと思い詰めたりする場合などがあるとしている。

現在、PTSDの症状として、DSM-IV（APA, 1994）では、①トラウマとなった経験が何らかの形で繰り返し再体験され、しかもそれがその人の意思に反して生じるといった「侵入性の症状」、②トラウマに関連した刺激やトラウマの想起につながるような刺激を回避しようとする意図的な傾向、トラウマとなった経験の記憶の一部が想起できないという形で回避すること、及び、社会的活動や人間関係からの引きこもり、情緒的な反応性の減退、将来のプランや意欲の喪失など、生活や人生に対する全般的なエネルギーの低下といった「回避性および麻痺の症状」、③「自律神経の興奮及び過覚醒の症状」を挙げている。

加えて、ハーマン（1992）は、児童虐待のように、トラウマとなる体験が1回限りではなく反復されたり蓄積されたりしていくような場合、しかも人格形成が十分に行われていない発達段階で経験する場合、その症状は、このような神経症レベルの中核的 PTSD 症状にとどまらないとしている。DSM-IV の PTSD の定義の作成に携わった委員会は、より包括的な PTSD の定義として、①感情的興奮の調整における変容、②注意及び意識の変容、③身体化、④慢性的性格変化、⑤意味のシステムの変容といった5つのカテゴリーに分類した「他の特定されない極度のストレス障害（DESNOS）」という試験的な診断基



準をまとめ、それは、DSM-IVの「関連特徴と障害」の項目に加えられている。このほか、クルーズら(1994)も、虐待を受けた者に顕著に現れる問題として、①エンパワメントの欠如、②機能不全ではあるものの生存のために必要とされる対処機制、③信頼感の欠如、④自己信頼の欠如を挙げており、さらに、子ども時代の虐待／トラウマの長期的影響として典型的に見られる不適応症状について表2のようにまとめている。

表2 子ども時代の虐待／トラウマの長期的影響

<b>I 認知的枠組みの歪み</b> 自信の減退 他者に対する不信感 自己-対象表象の障害 エンパワメントの欠如 自己価値の損傷 安心感の減少 自律性の損傷 親密性の損傷	<b>IV 身体面の問題</b> 頻発する頭痛／偏頭痛 月経前症候群（PMS） 背痛 呼吸障害 胃腸障害 心臓障害 婦人科障害 服薬治療の増加 泌尿器科障害
<b>II 感情面の問題</b> 不安／恐怖／恐怖症の増大 不合理な罪責感 感情収縮 怒り／敵意／激怒の抑圧 抑うつ パニック障害 羞恥心 精神的苦痛／苦悶／苦悩 孤立感 恐怖／嫌悪感 情緒的過敏性 感情の硬さ 悲しみ／悲嘆／絶望	<b>V 性機能不全の問題</b> 強迫的性行動 性欲障害（性嫌悪／性欲低下） オルガスムスの障害 性的興奮の障害 性交とう痛障害 性的同一性混乱の諸問題 関係の性化 性の行動化 性指向性の問題
<b>III 行動上の問題</b> 学習された無力感 自己破壊的行動 反復強迫 心的外傷後ストレス障害反応性症状 嗜癖 解離 強迫観念 強迫的行動 出来事やトラウマの健忘 攻撃性 学習障害 学業成績の過剰達成／学業不振	<b>VI 対人関係／社会性の問題</b> 親密性への恐怖 再被害化傾向 社会的孤立／疎外感 自他の境界設定の困難性 社会的過活動性 社会的消極性 婚姻／夫婦関係不調 限界設定能力の損傷 対人関係能力の不足 生活管理／対処術の不足 反社会的行動 接触恐怖 親業の不足 犯罪的行動

今回の面接対象者44名中40名<sup>(※35)</sup>が、程度の大小はあれ、虐待を受けた後に、前記の多様な症状のいずれかを示していた。しかし、カープら(1996)も言及するように、こうした症状は、見方を変えれば、虐待という異常な環境を生き延びるための対処策であるとも言える。実際、面接時点においては、その症状の一部を残している者も少なくなかったものの、GHQの結果では、44名中25名、56.8%(男性11名中8名、女性33名中17名)が健常域にいた。また、GHQでは健常域から外れているものの、少なくとも外見からは、ごく普通に見える社会生活を送っている者もいた。例えば、父から身体的暴力を振るわれ、中途からは父のみならず家族成員相互が暴力を振るい合うようになったとする者は、現在、感情に翻弄されそうな自分を感じる一方で、カーテン越しに世の中を見ているようで社会生活に現実味を感じられないとし、さらに、児童期を終えたところからメヌエル氏病様の症状も出ていたとしていたが、結婚し子育てをしながら就労もしていた。心身の状態が悪くて社会参加ができずにいる者は3名にとどまった。

以下では、ひどい虐待を受けても、場合によってはこの程度にまで回復するといったことを示すために、今回の面接対象者のうち2事例について、当時の被害状況、及び、それが当時及ぼしていた影響、並びに、現在症について紹介することにする。

#### 事例 A (20歳代後半・女性)

Aの父は、優しいときもあるものの、興奮すると手がつけられなくなる人だった。実母は父の暴力が原因でAの幼少時に離婚しており、まもなく再婚した義母も、父の暴力が原因で何度も家出し、結局、Aの小学校高学年時に離婚している。父のAへの暴力は、幼少時期からあったものの、そのピークは中学時代であり、父が投げつけたナイフで足を切ったこともある。しかし、父はかわいがってくれることもあり、「家族を殺してしまうのではと本当に恐かった」としながらも、憎みきれなかったとしている。このほか、Aは、中学時代の後半に再婚した義母からきつく当たられ、高校時代には親戚宅に身を寄せている。

ところで、Aの社会適応状況については、人と接することが好きで、学校も好きであったとし、現職にも10年以上勤務している。被害を受けていた当時、授業中などにその光景が突然思い出されて授業に集中できなくなったり、被害を受けたことが遠い昔のことに思えたりすることがあったとしている。また、父から暴力を振るわれる危険性がなくなってからも、エアコンの音などを聞いていると、遠くで怒鳴り声が聞こえているような気がして急に不安になり、自分の体の動きが速くなったように感じるなどの症状があったことを認めている。しかし、面接時のGHQは健常域にある。

#### 事例 B (20歳代前半・女性)

Bの家庭では、父に定職がなく、母が働きずくめになって、どうにか生計を支えていた。Bは幼稚園のころから、家にいる父に頭をよく拳で殴られ、幼稚園時には、物が食べられず、しょっちゅう吐いていた。一番、恐かったことは、小学校の低学年のころ、父に片足を持たれて逆さ吊りされて、風呂場で水攻めにあったことであるとし、そばで見ていた姉が、「お父さん、やめて」と泣いていたのを覚えている。また、父から兄弟と一緒に家を締め出されたこともある。

(※35) いずれの症状も示さなかった4名の内訳は、被害を受けた当初から当然の叱責と受け止めていた男性2名、姉の問題行動に父が体罰を加えるのを目撃したとする男性1名、及び、兄弟喧嘩を諫めようとして、父が兄弟に暴力を用いたのを見たとする女性1名であった。

当時、感情の起伏の激しいヒステリックな子であったと自らを評し、お父さんお母さんがいて、食事を作ってくれて、家族で食卓を囲めるような里親みたいなどころに行きたいと思ったとも述べている。父に入浴を覗き見されていたことに加えて、一度だけではあるものの、寝ている時に下半身を触られてもいる。中学校時代は、学校に通っている人は勉強だけしかしない別世界の人と感じて、後半は不登校状態となっている。しかし、当時から将来に対して夢を抱き、現在は、就労で生計を立てながらその夢の実現を目指している。まるっきり何もしたくなくなっただけで仕事も休んでベッドから出ないで過ごすことが時々あるが、2～3日とか1週間で自然と直ってしまうとし、面接時のGHQも健常域にある。

この2事例は、前述のハーマンやカープらが挙げている観点を鑑みても、決して軽度の虐待事例とは位置付けられない。しかし、同時に、そうした虐待を受けた者であっても、かなりの回復力があることが示唆される。

なお、多くの他者から被害を受けた場合、ダメージがより大きくなることは容易に想像できる場所である。「第2 被害の実態」の章の「6 その他の被害」の節で言及したように、今回の面接対象者44名中19名は、児童期に同居した家族からの児童虐待に加えて、その他のなんらかの被害にも遭遇していたが、この19名のGHQの結果については、7名のみ(36.8%)が健常域にいた。一方、児童虐待以外の被害を受けずにきた25名のGHQの結果については、18名(72.0%)が健常域にいた。自分が育った家族以外からも被害を受けるということは、被害を受ける場なり相手が家庭や家族といった限定されたものではないとの体験を意味する。GHQの結果からは、そうした場合の回復には、より一層の困難が伴うことが示されている。

## (2) 各種被害からの分析

「第2 被害の実態」の章で示したように、今回の面接対象者の多くは、一種類のみの被害にとどまらず多種の被害を受けていた。ただし、被害の種類によって、その後の経過や影響に若干の異なりが見られたので、その点について以下に示すこととする(\*36)。

### ア 身体的暴力と間接的暴力

#### (ア) 暴力への親和性

身体的暴力を受けた者が、後日、問題場面に直面した際、暴力を用いることでその解決を図ろうとしたと思われる事例があった。以下に、その事例を紹介する。

#### 事例C (30歳代後半・男性)

Cの父は単身赴任時代に酒びたりになり、Cの小学校低学年のころから、手で殴ったり、物を投げるなどの暴力をCに振るうようになった。父は、Cの中学生時代の中頃、母が他界したことを機に、腑抜け同然となったが、Cはこの時とばかり父に対して反撃に転じた。さらに、高校生になってからは、暴走族活動を通じて暴力団事務所に出入りするようになり、シンナー少年に吸引をやめるよう指導しようとして傷害事件に発展し、保護処分に至っている。保護処分を受けて以降は暴力団に戻ることなく、また、現在は失業中であるものの、数年にわたり同一の就労先に勤務していたこともある。ただし、父とのいさかいで、パトカーが来て留置所に入れ

(\*36) ネグレクトについては該当事例が少なく、いずれも他の被害との複合事例であったため、ネグレクト特有の経過や反応と同定できるか不明であったので、割愛することにした。

られたことがあり、また、市役所の係員と言い合いになり、その時も危うく捕まりそうになっている。見下したように話をろくに聞かない相手だと腹が立つらしい。

奥山（2001）は、暴力にさらされることで、暴力による解決方法を学習するとしている。この事例では、他者の自らに対する接し方に過敏で、平静心を保てなくなるとは、軽視されまいとして他者を脅かす行動に出る傾向がうかがえる。

一方、今回の面接対象者の女性については、同年齢以上の者に対して、暴力を振るうことで物事を解決しようとするエピソードは出てこなかった。ただし、我が子に対する暴力に言及する者はいた。その点については、本章の「4 虐待の連鎖」の節を参照されたい。

#### （イ）間接的暴力の後遺症

身体的暴力を直接振るわれなくても、身近な他者が暴力を振るわれているのを見るだけで、それが本人に影響することは少なからずある様子である。以下に、それに相当する事例を示す。

##### 事例 D（30歳代後半・女性）

Dの家では、幼少時期から夫婦仲がよくなく、父が酒を飲んで、母に殴る、蹴るの暴力を振るっており、Dが高校生になったころからは、弟までも、母に暴力を振るうようになった。父からの暴力がないと思えば、弟からの暴力があり、毎日毎日めちゃくちゃだったと当時を振り返っている。面接時点においても、当時の暴力の詳細な内容について、D自身、話したくないと述べたり、うつむいたまま黙ってしまうことが多かった。なお、Dは現在結婚しているが、今でも夫婦でいざこざがあった時、父や弟が母に暴力を振るっている場面が思い出されるとしている。

##### 事例 E（30歳代前半・女性）

Eの父は、Eが物心ついたころから、母に怒鳴ったり暴力を振るったりしており、母は、入院するような怪我を繰り返し負わされている。父が母に暴力を振るったことで、警察沙汰になったこともある。E自身は、グズでなかなか言いつけを守らないなど何かにつけ兄弟より出来が悪かったため、父から兄弟差別は受けたとしているが、Eが悪いことをした際も、父の怒りの矛先は主に母に向けられ、E自身が身体的暴力を振るわれたことはない。しかし、Eは、ひたすら父を恐れ、学校でも、男性の教師とはできるだけ接触を持つまいとしてきた。今でも、職場で男性の上司などに大声を出されるだけでびくついてしまう。児童虐待やドメスティック・バイオレンスの記事やドラマにはとても興味がそそられ、思わず読んだり見たりするものの、特に暴力シーンでは今でも生理的嫌悪を感じてしまう。夫が浮気するようになって離婚しているが、「自分にも子どもができなかったし」と離婚を受け止めている。両親が未だに離婚しないことに不可解さを抱きながらも、離婚してしまった自分に引き替え、離婚しない母の方がごく普通なのかもしれないとの思いもある。なお、以前、母に父との結婚理由を尋ねたところ、「あなたがお腹にいたから」と言われ、「じゃあ自分がいなかったら……」と母に聞いたところ、話題を逸らされてしまったとのエピソードについては、やや感情を高ぶらせながら語っていた。

事例 D は、その暴力が直接自分に向けられたものでなくとも、現時点においてすら、他言することに抵抗感を有したり、突如としてその当時の記憶が感情を伴ってよみがえったりするほど、自我を揺さぶ

るものであることを示している。また、事例 E については、暴力を予期させるものへの過剰反応がうかがえる。なお、生理的嫌悪を感じながらも児童虐待やドメスティック・バイオレンスの記事やドラマに惹かれることについては、家族間のいさかいで体験した無力感などの感情を、疑似環境に身を置きながらそこで動じない自分を感じることで克服しようとの試みであると解釈することが可能かもしれない。このほか、事例 E では、自身を卑下するといった自己イメージにも深く影を落としている。自分の出生そのものが、間接的暴力を発生させた根源ではないかとの思いもうかがえる。これらの例からは、間接的暴力についても、決して軽視できないことが示されている。

## イ 性的暴力

### (ア) 性的暴力の意味が分かるということ

「性」の意味を十分に理解できていない発達段階において、性的暴力を受けることがある。その場合、その段階では、漠然とした不快感を有する程度にとどまるものの、後日、その意味が分かり、いたたまれない気持ちになるといった現象がある様子である。以下は、その経過を示す事例である。

#### 事例 F (20歳代前半・女性)

F の両親は、本人が物心つく前に離婚しており、小学校高学年ころ、母は義父と再婚した。本人も当初は義父を優しい人だと思っていたし、小学校時代、母のみの家庭であることを気にしていたこともあって、父ができたのがうれしくて、すぐになつた。小学生のころから、義父に身体を触られていたが、当時はその意味が分からず、あまり気にしていなかった。中学に入ってから以降も、義父の性的暴力は続いた。次第に、義父としゃべらなくなっていった。しかし、嫌は嫌だったが、深くは考えず、忘れるようにしていた。高校生のころは遠距離通学で疲れて夜は熟睡しており、就寝中のことについては覚えがない。専門学校に入学してからは、恋人との性関係も経験し、その行為の意味が分かるようになってきた。義父の行為が嫌で嫌でたまらなくなり、深刻なことで感じて悩むようになり、よく部屋で泣き、耐えられなくなっていった。義父が、自分を子どもとしてではなく性的な対象と見ていると感じてショックを受けた。そして、義父の顔を見るのも嫌で、避けるようになっていった。

### (イ) 不適切な性行動

性的暴力を受けた者が、性について過度な関心を持ったり、自らの性を大切にしないといった事例が見られた。以下に、その事例を示す。

#### 事例 G (20歳代前半・女性)

G は、兄から性的暴力を受けた。兄からの性的暴力の記憶があるのは、小学 3 年生のころからで、小学 4 年生のころまで続いた。その後、小学校高学年になってから、G 自身、性に対して非常な関心が出てきた。同年齢の女兒に比べてませていたという程度ではなく、「とにかく性的関心が高まった」と自らを振り返っている。そして、後日、性的虐待の被害を受けた人は性的なことに関心が強まると書かれている本を読み、「私と全く同じと思った」としている。なお、専門学校のころ、やけくそになった折、売春をしている。売春は面白くなかったし、いいこともなかった。お金をいくらもらったかも、相手がどんな人だったのかも覚えていない。しかし、やってみたからこそ、面白くないことが分かったので、後悔もしていない。行きずりの相手と関係を持ったことも 2～3 回ある。

奥山（2001）や村瀬（2000）は、性虐待の被害者には、不適切な性行動が見られるとしている。この事例で見られた過度な性的関心、情緒的交流を持つことなく見知らぬ人と性関係を持つことなどは、いずれも不適切な性行動の典型例と言える。

#### （ウ） 性的暴力を口外すること

児童虐待がなされていることを他者が気付けば、その他者が虐待の抑止につながる行動をとったり、あるいはそこまでの効果はないにせよ、虐待での傷つきを多少とも癒してくれる可能性があるだろう。しかし、性的暴力については、そのほとんどが人目に触れないで行われるものであり、性的話題がタブー視されていることも加わり、他種の児童虐待に比べても、被害者自身、口外することに抵抗を感じる様子である。その様子を、先に引用した事例 G について、引き続き見ていくことにする。

#### 事例 G（20歳代前半・女性）のつづき

G は、兄からの性的暴力にショックを受けたものの、「そのことが明るみになれば、家族がばらばらになってしまう気がして自分さえ我慢していればいいと思った」、さらに「そもそも自分の話を信じてもらえないかもしれないとの思いもあった」とし、家族に言わないまま今日に至っている。兄から性的暴力を受けて以来、G は兄と一切口をきいていないので、両親も「何かあるな」程度には思っているが、両親から特別に聞いてくることもない。このほか、G が自傷行為をした際も、傷がふさがったころ、母が「その傷どうしたの」とたずねてきただけで、ごまかして答えたところ、それ以上に追求されることはなかった。なお、G は、「両親は喧嘩をすることはないし、世間体非常に気を配っているんで、外から見たら、きっといい家族に映ると思う」と評している。

すなわち、自分さえ我慢すれば周りはいまよくいくのではないかとの思い、訴えてもまともに取り合ってくれないかもしれないとの不安が、口外することへの抑制要因となっている。なお、この事例では、家族成員同士が、互いに正面からことの真実を見るよりも、取り繕いながら、これまでの関係を壊すまいと配慮している様子がうかがえ、そうした家庭の雰囲気、口外することをより困難にしている可能性も考えられる。

さらに、性的暴力を親に相談したにもかかわらず、聞き手側がそれを軽く受け流し、その聞き手側の反応に更にショックを受けたとする事例もあった。クルーズら（1994）は、近親姦被害者の母親は、高い比率で子ども時代に身体的虐待や性的虐待を受けており、そうした母親は、自らの子ども時代の虐待の記憶から自分自身を守るために、我が子に起きている虐待を否認しがちであること、さらに、その問題に立ち向かうべき洞察力や方法を持ち合わせていないことに言及している。実際、その事例の母自身、そうした被害を受けていたとのことであり、まさにこのメカニズムが働いた結果の反応であったと推察できるが、性的暴力を口外することの困難性は看過できない問題と言えよう。

#### ウ 心理的暴力

西澤（1999）は、虐待のサブカテゴリー中、性的虐待、身体的虐待、ネグレクトに比べて心理的虐待の認識は最も遅れたものの、これらの心理的虐待以外のサブカテゴリーについても、それが親から与えられたという心理的傷つきが、その子どもを長期にわたって苦しみ否定的な影響を与えると述べている。クルーズら（1994）も、心理的虐待は、子どもへの不適切な関わりの中核的な問題であるとしている。これらの議論からは、心理的虐待のみを受けたとしても、それはないがしろにできないことが予想される。以下では、今回の面接対象者のうち、主たる被害が心理的暴力である事例を示すが、実際、そ

の影響は看過できないことが分かる。

**(ア) 愛情が十分に注がれなかった場合の心理的暴力**

親自身の関心が子育て以外に向けられ、子どもを邪険に扱う事例があったので、以下に、その事例を示す。

**事例 H (30歳代後半・女性)**

H は、兄弟と年が離れており、父とも出稼ぎ等で一緒に生活した記憶がなく、実質的には母 1 人子 1 人といった環境で育っている。父が不在の家には、入れ替わり男性が母を訪ねて来て明け方に帰っていくといったことが繰り返された。一方、H は、母から身体的暴力を振るわれることはなかったものの、「おまえはできが悪い」「生む子じゃなかった」などとののしられ、ちょっとした失敗でも叱られ、理由が分からないまま怒られることも多かった。小学校時代はいじめられっ子グループの一員であり、家では家事をやらされた。なぜそんなことをしたのか自分でもよく覚えていないとしているが、小学校時代、天井にぶら下がっている紐で首を吊ったところを危うく発見されたこともある。現在、H は、自分には他人に対する感情がないとし、また、自分は結局一人であり、他者には期待していないと言い切っている。周囲との関係について、何か不都合なことがあるとすぐに自分のせいにされる、何かとトラブルに巻き込まれると受け止める一方で、自分が何とかしなければといった思いも強い。GHQ は健常域から外れている。

カーブラ (1996) は、5 歳以前に虐待による不快トラウマを受けると、人間に対して基本的な愛着を持つことが妨げられる結果、人を信じることが不可能になってしまうことさえあるとしている。また、繰り返し裏切られると、誰も信用できなくなる、あるいは、ある人が信用できるかどうか判断できなくなるとしている。加えて、虐待された子どもとは、自分を取りまく世界におけるコントロール感を奪われ、自分の境界が侵入される体験をしているので、自分と他人との間の正しい距離・境界線がどこなのかについて不確かで混乱していることが多いとしている。ヴァン・デア・コルクら (1996) は、トラウマを受けた者には、責任を正当なところに帰属させる能力が欠如してしまう傾向があり、自分では当然コントロールができないようなその後の人生や生活の問題について、深刻な責任感に悩まされる傾向があるとしている。この事例で、人を信用しないと一言いながらも、結局は、様々なトラブルにかかわる結果となっている背景には、これらの要因が影響を及ぼしている可能性がある。

**(イ) 過干渉タイプの心理的暴力**

親自身は、一生懸命に子育てしているつもりであっても、それが功を奏しないばかりか、心理的虐待になってしまうこともある。以下に、それに相当する事例を示す。

**事例 I (30歳代前半・女性)**

I の両親はいずれも、親ないし大人の価値観を押しつけるばかりで、I の考えや気持ちを汲み取ってくれなかった。I 自身の意見を言うと、「口答えばかりして、本当にかわいくない」と一層怒られた。したがって、I は両親から戦いを挑まれたら、それにいつでも対抗できるよう身構えている感じで、いつも緊張していた。親なりの愛情の注ぎ方であるところどこかで分かっていた気もするが、両親を見て、大人全般に不信感を抱いていた。そして、家族外の人に対しては、その評価が気になって思っていることを言えずじまいのことが多かった。中学校時代には、両

親からの束縛から逃れたいとの思いから、常態的に自殺を意識していた。また、中学校から高校時代にかけては、原因不明の頭痛、心臓の痛み、しびれや硬直状態などの症状も出た。I自身、「自分は『分かってほしい願望』が強いのではないかとと思っている」としているが、この人だと思えば、自分の全てをさらけ出そうとし、相手から、「そこまで出す？」とびっくりされることがしばしばあるらしい。また、夫と出会うまでは、人に甘えることができなかったとしている。現在、GHQは健常域にあるものの、特別なことがないにもかかわらず、抑うつ的な気分に襲われることがある。うつ時には、何もかもマイナス思考になってしまうことが今でもある。

この事例では、他者と良好な関係を保ちながら自分を自由に表現することができにくく、他者関係が不安定になりがちであることがうかがえる。奥山（2001）は、他者関係の障害として、他者への希求と回避があるとしているが、自分をさらけ出そうとして相手からびっくりされるとのエピソードからは、他者との境界の設定の仕方が適切に行われにくいことが推察される。なお、対人関係に過敏に反応しては自らの内的世界も不安定になりがちで、それが心身症やうつ症状につながっている可能性も考えられる。クルーズら（1994）は、加害者の思慮のない行為によって加えられる情動的痛みは、それが完全に意図された結果ではなかったからといって放置されるべきではないと明言している。

## 2 被害体験や加害者の現在のとらえ方

西澤（1999）は、「トラウマを解決する」ということは、トラウマとなった体験を、通常の体験と同じように自分の歴史上の一部として統合することで、その延長線上に、そうした体験を持つ存在としての自己イメージを、あるいは、そのような体験をもたらすものとして対象イメージを再構造化し、新たに構造化された自己と対象との間に展開されているものとして対人関係を把握し直すことであるとしている。

今回の面接対象者の中には、児童虐待の被害を克服するための専門的な心理療法を受けたとする者は皆無であった。しかし、そのような療法を受けないものの、自ら被害や加害者について、あれこれ考えたり、それなりに理解しようとしたりする者がいた。そして、そのような試みを行っている者の方が、概してGHQが健常域にある傾向がうかがえた。

### (1) 被害経験の現在のとらえ方とGHQ

面接対象者の中には、自らの被害経験について、前向きにとらえようとしている者がいた。具体的には、①「体罰はダメである」「子どもの目線で見られるようにしたいと思うようになった」など、被害経験を反面教師として利用しようとしている者、②被害経験をしたことで、「強くなった」「（自立心が付くなど）しっかりとした」など、自分が成長できたとする者、③被害経験に対する周囲の対応から、周囲の自分に対する愛情を確認できたとする者、などがいた。このように前向きにとらえようとしている者のGHQについては、健常域にいる者が9名（男性8名中2名、女性17名中7名）、それ以外の者が1名（男性3名中0名、女性16名中1名）であった。

しかし、言うまでもなく、そうした面接対象者のほとんどが、被害に遭っていた当時から、被害について前向きにとらえていたわけではなかった。その当時は、「その場その場を乗り切るのに精一杯で、被害をどのように受け止めようなどと考えている余裕はなかった」と被害に翻弄されたり、「耐えるしかない」と受け止めていた」「これが当たり前なんだと我慢するしかなかった」などと被害を受身でとらえていただけであったりしていた。さらに、「兄弟と違って、なぜ自分はできないのだろうと責めた」など、自分に責任があるのではないかと受け止めている者もいた。こうした者達が、被害体験を前向きにとらえ



られるように至ったことは、その被害体験に圧倒されるのではなく、自分の歴史上の一部としてしっかりと統合できた、あるいは、統合しようと試みていることの表れであると解せよう。ウォーリンら(1993)は、問題の多い家族の中で育ち幼い頃から困難に出会うことは、長い間続く痛みをもたらしかねない一方、それは並はずれた強さと勇気を生み出す土壌であるともしている。前記②は、このウォーリンらの指摘するものに相当するものとも考えられる。

一方、GHQが健常域外にいる者の中には、「虐待の詳細は思い出せない」「起きてしまったことは変えようがなく、なかったこととしてやっていく」「自分の人生は実家を離れてから始まったのであって、虐待のあった過去については過去のことにとらえる」「虐待をしたとて親は親で、ずっと恨んでも仕方がなく、開き直って自分の道をいくしかない」と発言する者がいた。これらの発言は、虐待という経験を自らの中に統合することができず、健忘、他の意識領域と切り離す孤立化、疎隔化といった機制を働かせることで、トラウマとなる体験から心を取りあえず保護するという防衛の働きをなしていると理解できる。

実際、ある面接対象者は、「以前は、辛いことがあると、虐待等のことが思い出され、気持ちが悪くなり、その部分をそれ以上見ないように避けてきた。しかし、最近は精神的に成長したためか、虐待等の記憶と付き合えるようになってきた。虐待の記憶は消えるものではなく、糖尿病患者のように、生涯付き合っていくものと思うようになった。」としている。

すなわち、GHQが健常域にあるかどうかと被害のとりえ方には関係が見られるものの、実際に虐待と向き合えるようになるためには、虐待を受けた者にそれなりの準備状態が必要なようである。トラウマの心理療法でも、初めからトラウマに直面させることはしない。たとえば、ハーマン(1992)は、トラウマからの回復について3段階を設定しており、第1段階である虐待を受けた者の安全の確立を十分に行わないまま、第2段階のトラウマとなった出来事の想起や、それによって失ったものを悼む段階に移行しても、結局は回復に至れないとしている。また、カープら(1996)も、セラピストと信頼し会える関係を結び、虐待を受けた者が自分の感情を素直に受け入れたり、自分と他人との間の正しい距離・境界線がどこなのかを十分に体験させたりした後に、トラウマの持っている様々な側面を探っていく作業にかかるとし、その体験を十分にしないままにトラウマを探らせようとする、新たなトラウマを負わせる危険性すらあるとしている。

このほか、面接対象者のうち2名にとどまったが、暴力を受けた当初から現在に至るまで、その暴力は「虐待ではなく、躰であった」と本人自身納得しており、実際、そのGHQも健常域にあった者がいた。安部(2001)は「叱る」と「虐待」の境目について、①子ども自身が納得できる理由があるか、②行為と罰の程度が相応しているか、③親が子どもを心理的に分離しているか、の基準が挙げられるのではないかとしている。この2名はいずれもこの基準を満たしていたことがうかがえる。ただし、カープら(1996)も指摘するように、虐待を受けた者には、自分に責任のない他人の行為に対してまで自分に非があると思う傾向が見られるので、この基準についてはその点を勘案しながら用いる必要があろう。

## (2) 加害者への現在の理解と感情

面接対象者の多くは、加害者が行った加害に対して、色々に理解しようと試みていた。

まず、加害者の生い立ちを省みて、理解しようとしている者がいた。具体的には、「加害者自身に適切な親モデルがなかった」「加害者が我がままに育てられた結果、我慢できないようになってしまった」「加害者自身が殴られて育つなど、児童虐待の被害を受けながら育ってきた」などが見られた。

また、虐待が発生した当時の加害者の置かれていた状況等に目をやり、加害者自身がストレスを抱えている状況にあったと理解しようとする者がいた。具体的には、「職場不適応やリストラなど仕事上のス

トレス」「夫婦関係におけるストレス」「加害者自身が周囲から感じるプレッシャー」などがあった。

このほか、加害者の振る舞いに影響を及ぼしたと思われる時代や文化、例えば、家長制度や職人文化に言及する者もいた。

しかし、このように加害に至った理解を面接対象者が言語化しているからといって、それがそのまま加害者との感情の和解に直結するとは限らない。以下は、その一例である。

#### 事例 J (30歳代前半・女性)

Jの父は、母によく暴力を振るっており、息子のことはかわいがるものの、娘であるJに対しては、罵倒するだけで、親身に何かしてくれるということがなかった。父のこうした振る舞いに対して、Jは、父はちやほやされて育てられた結果、人の痛みが分からない人間になってしまったとし、「父自身も被害者であると思えるようになった」「両親いずれも戦前の生まれであり、男尊女卑の考えが根底にあることも影響している」と述べている。しかし、未だに父が兄弟の子どもに比べて我が子に無関心な態度を取ると、感情が乱れるようである。我が子にその理由を聞かれたら返答に窮してしまうとし、父のことを嫌いではないと明言する一方、一層のこと、あまり実家に行かないようにしようかなと思ってしまうと語っている。

この事例は、父の言動についての理由付けはそれ相応にできているものの、未だに感情が揺さぶられてしまうことを示している。理由付けを試みていることから、その加害の事実と直面しようと試みている様子はうかがえるが、頭で理解することと感情面でじっくりいくことは同義でないことがよく示されている。

一方、面接時点において、感情を交えることなく淡々とした様子で、父が酒に酔っては母に暴力を振るっていたものの、自らはいつも冷静に対応し、そのことによる自らへの精神的影響は当時も現在もないと語っていた者がいたが、GHQは健常域外であった。ヴァン・デア・コルクら(1996)は、感情に触れるようなことから遠ざかることで、虐待が自分の人生に影響を与えているということを否認する者の存在に言及しているが、この者は、それに相当する事例である可能性が考えられる。

#### (3) 加害者への現在の感情と GHQ

これまで見てきたように、加害者への感情が理詰めできちんと整理できるわけではない。加害者への思いが複雑であるのは、ごく当然であり、今回の面接対象者の中でも、加害を受けながらも憎みきれないと感じたり、加害自体も加害者なりの愛情表現であったかもしれないと感じたり、あるいは、加害当時ではなく現在に焦点を当てて現在の自分にとって大切な他者であると感じたり、と様々であった。また、加害者の気持ちが不可解のままであるといった釈然としない気持ちを引きずっている者もいた。

しかし、その中でも、加害者への否定的感情を前面に押し出す者がいた。具体的には、加害者に対して、「会わない」「話さない」「許さない」「いじめてやりたい」「憎んでいる」「好きになれない」「思い出したくもない」などとはっきり拒否的・悪感情を示したり、「今でも自分を脅かす存在でしかない」との不安や「自分に対する処し方は不当である」との不満を示したり、「加害者は変わらない」「恨み続けても仕方ない」といった否定的感情を伴った諦めや「何の感情も沸かない」「親と思っていない」と突き放したようなとらえ方をしている者がいた。そして、このような否定的感情を前面に押し出す者の GHQ は、健常域にいる者が5名(男性8名中1名、女性17名中4名)、それ以外の者が12名(男性3名中3名、女性16名中9名)であった。すなわち、GHQが健常域外にあることと、加害者への否定的感情との間には、関係が見られるが、このことは、被害体験を自分の一部に受け入れられるほど精神的な余裕がない

ことを示している可能性がある。

なお、こうした者の中には、「被害の詳細は思い出せない」としながらも「暖かい思い出はなく憎しみの感情のみが残っている」とする者、「起きてしまったことは変えようがなく、なかったこととしてやっていく」としながらも「加害者は絶対に許せない」とする者、「こういう星のもとに生まれた」としながらも「加害者をいじめてやりたい」とする者がいた。こうした反応については、被害についてあれこれ考えまいと試みているにもかかわらず、被害あるいは加害者に対する怒りなどの感情がふつふつと沸いてくることがあることを示している。

#### (4) 加害者との現在の接触の程度からの分析

##### ア 「加害者との音信不通」と「加害者の死去」の違い

面接対象者のうち、3名は現在加害者と音信不通であるとし、4名はすでに加害者が死去していた。現在、音信不通の場合も死去の場合も、加害者と接触していないという意味では同じである。しかし、面接対象者の加害者への思いには、異なりが見られた。

まず、音信不通となっている3名はいずれも、今後加害者と会おうと考えてはいなかった。うち1名は、小学校低学年ころ母に遺棄されており、成人になったころ一度会ってはいるものの、「あまり思い出したくない」としている。残りの2名はいずれも、両親の離婚に伴い暴力を振るっていた父と音信不通になっているが、そのうち1名は、「虐待の詳細は思い出せないものの憎しみの情だけは残っている」としており、もう1名も、「今は父と接触していないのでなんの感情も沸かない」「父に会って今の生活を壊されてしまっては困るので会わないでいたい」としている。

音信不通とは、会わないという選択を本人がしている結果とも言えるが、実際に加害者に会うことによって、自分なりに築いてきたものが壊されてしまうかもしれないといった不安や恐れをうかがうことができる。

これに対して、加害者が他界した場合は、別の反応が見られた。

アルコール中毒の父に家全体がかき回されていたとする者は、父がああ時点で亡くなっていなかったら、自分を含め家族が本当にひどい状況になっていたかもしれないと、父の他界に安堵の念を隠さない一方で、今自分が手にしている幸せは、父が守ってくれているからかもしれないとの思いがあるとしていた。また、父の生前には父から暴力を振るわれ、その情景はよく夢にまで出てきていたものの、死んでしまっただけからは不思議といい思い出ばかり浮かんできて、今でも生きてくれたらなあと思うと語る者もいた。このほか、幼少時期から散々父から暴力を振るわれていたにもかかわらず、父が亡くなったことで、自分が自分でいられなくなってしまったような心許なさを感じると述べる者もいた。

いずれの事例においても、死去した加害者に対する思慕の情がうかがえる。音信不通の加害者への反応との違いは、加害者の他界によって、自分が脅かされる危険性がもはや完全に排除されたことにあるのかもしれない。

このほか、加害者が他界してしまったがゆえに、当時、なぜあんな暴力を振るったのかを冷静に問い正す機会を失ってしまい非常に残念であるとの反応もあった。これは、加害者の死去に伴い、その真相が未解決となってしまったことに対する釈然としない気持ちを表現したものと言えよう。

##### イ 別居の影響

今回の面接対象者の中で、面接対象者の周囲の者が、その被害を少なくさせるために加害者側を別居させる策を講じたとする者は、2名にとどまった。しかし、別居することで加害者と接触する機会が減れば、被害に遭う危険が減ることは間違いない。

実際、面接対象者の中には、「加害者が変わるとは思えないが、結婚して実家から独立しているので、

干渉されずに済んでいる」、「加害者側から謝罪があったわけでもないし、今でも会えば安心できない怖い存在であるが、別居して接触の機会が少なくなったので、最近、トラブルは生じていない」などと語る者がいた。加えて、別居して、支配服従関係から抜け出したところ、加害者も他のことに興味を見出し、自然と良好な関係になったなどの発言もあった。この後者については、物理的距離を調整したところ、心理的距離も適度となったことを端的に示している。

しかし、被害から逃れようとして、あるいはそうした家から逃れようとして、結婚することで別居に至ったものの、結局、離婚してしまったとする者もいた。

## ウ 同居の実態

面接対象者の中には、被害を受け続けている状態であるのに、あるいは、加害者との折り合いがついたと感じているわけではないのに、児童期を過ぎた面接時点においても、加害者と同居し続けている者がいた。その実態を、以下に紹介する。

まず、被害を受け続けていると現状を認識しながら、別居しない者がいた。加害者に抵抗しても効果はないと諦めるにとどまり、被害への具体的対処策に向けて、自ら行動を起こすには至っていない事例があった。別居するには、ある程度の経済力が必要であり、それが障壁になっている可能性もある。

また、単身生活には、経済的事情に加えて、ある程度の精神的健康さを要すると言えるが、加害者のいる実家で同居している者のうち、精神科や心療内科に通院中とする者が2名いた。

さらに、加害者の顔を見れば虐待を受けたことを思い出すとし、同居しながらもほとんど口をきかないとする一方で、これまでの見返りとして自分を「援助するのは当然」と受け止め、同居している事例もあった。加害者としっかりと向き合うことを避けながらも、虐待され受容されてこなかったとの思いをどうにか解消しようとして、このような言動に出ている可能性も考えられよう。

一方、加害者と同居し、色々と加害者の世話をしている者もいた。先に紹介した事例Aがそれに相当するので、以下にその内容を示す。

### 事例A（20歳代後半・女性）のつづき

父からの暴力がひどく、Aは自ら保護を求めて施設に入ったこともあるが、現在は、実家で、義母と共に父の面倒を見ている。兄弟は実家を離れ、自分だけが残ってしまい、「貧乏くじを引いてしまった」との思いはある。しかし、あのまま暴力が続いていたら許していないであろうものの、病身となり、気も弱くなった父をかわいそうと感じている。暴力を振るうだけでなく、かわいがってくれたこともあるとして、「自分が父のそばにいてやらなければならない」と述べている。

この事例のほかにも、加害者が病身になった際、甲斐甲斐しく看病し、自分の寿命が短くなっても加害者に長生きしてほしいと祈ったほどであると述べている者がいた。ハーマン（1992）は、虐待経験者の中には、虐待の反復を避けられない運命として受身的に体験し、他者からの情緒的要求に対してノーと言うことを考えることもできなくなっていることがあり、大人になってからも、虐待した者の願望や欲求に従い続けてしまう者が珍しくないとしている。ハーマンのこの解釈のほかにも、加害者のために自分がしてあげることを通じて、エンパワメントされた自己を確認しようとする、あるいは、そのように尽くす過程で、幼少時期に満たされなかった愛情欲求を獲得しようとするなど、そのメカニズムは様々な考えられる。このような様々な解釈は可能であるが、いずれにせよ、加害者のために自己犠牲的に振る舞うといった現象がうかがえた。

## (5) 面接対象者の性差にみる加害者との関係性変化の過程

### ア 男性面接対象者と加害者との身体的力関係の逆転がもたらすもの

今回の面接対象者のうち、男性においては、身体的発達と共に、加害者に表立って抵抗するといった現象が見られた。以下に、その事例を示す。

#### 事例 K (30歳代前半・男性)

K は、幼少時期から、母から心理的暴力及び身体的暴力を受けていたが、小学校高学年時に、母の身体的暴力に抵抗しようとしたところ、予想外にも、母がひっくり返った。自分の体が母より頑丈だ、母より力があるということに気付き、以来、K は逆に母に手を上げるようになった。小・中学校時代の交友関係が良くなかったことも手伝ってか、中学卒業後しばらくしてからは、一人で地元を離れた。転職歴はあるが、就労体験を通じて、自分も人に遅れをとらず普通に引け目なくやっていけることに気付いたと述べ、現在は、妻子のある一家の主柱としての自覚を有している。しかし、母については、小学校時とかに友達から母の悪口を言われるなど嫌な思いをし、つらさをしのいだのに、その際、母は、自分をかばうどころか反対に自分を責めたとの記憶を語り、さらに、自分の可能性を最初から否定するようなことを何度もされてきたとの思いもあるとし、今でも好きになれないとしている。大きめの家を建てたので、物理的には母に住んでもらうことは不可能でないと考える一方、離れてもあれば別であるが、母と一緒に住むことはできないとの気持ちも強いようで、複雑な感情の一端を吐露している。虐待を受けた当時から今日まで、母が K を否定したことを許せないとの思いは変わらないとし、今でも自分の可能性を誰かに否定されると、周囲が驚いてしまうほど感情が高ぶってしまうと述べている。GHQ は健常域から外れている。

この事例からは、加害者に体力面で勝ることで身体的暴力の被害からは免れるようになるものの、そのことが加害者との関係改善、あるいは加害の捉え方の変化に直接つながるわけではないことが読み取れる。すなわち、自我を脅かす存在でなくなったからといって、必ずしもその傷が癒えるとは限らないことがうかがえる。ここで取り上げた事例は加害者が母であったが、父が加害者の場合であっても同様な経過をたどる事例が見られた。

一方、今回の女性面接対象者については、加害者に身体的暴力を用いて反撃したとの発言はなかった。父の身体的暴力で家中がかき回されていたとする者が、中学時代から、父に対してではなく母に対して、体力がついたことを理由に、蹴ったりして当たり散らしていたとのエピソードを語るにとどまっていた。

### イ 女性面接対象者の結婚による加害者との関係性変化

今回の面接対象者のうち、女性においては、実家から独立して、妻になったり母になったりといった発達段階を経る中で、虐待の被害体験を克服する手掛かりをつかんだり、それへの洞察を深めたりといった現象が見られた。以下に、その事例を示す。

#### 事例 L (30歳代後半・女性)

L の家では、父が女性関係や酒で母を苦しめており、そうした状況下、兄に比べて出来が芳しくなかった L に対して、母が身体的暴力や心理的暴力をふるっていた。当時、L 自身、兄に比べて自分はどうしてできないのだろうかと自分を責めていた。結婚するまで、母は L の交際相手に文句を付けたり、見合いで断られると「お前は、資格も何もないからねえ」などと馬鹿に

したりしていた。しかし、結婚して子どもができてから、Lは母に「昔、おかあさん、こんなこと言ったよね」と言えるようになり、それに対して母親も「ごめんね」と返すようになってきた。さらに、仕事を持っていた母が、『「専業主婦って大変よね。見直した。』と専業主婦の私を褒めてくれた時は、本当に嬉しかった」とし、家事が好きな自分でいいのだ、自分はこれでいいのだという自信が出てきたと語っている。さらに、子どものころには親のことは分からなかったものの、子どもを持つと、両親それぞれの気持ちが分かるようになったともし、加えて、虐待の経験があったからこそ、子育ての仕方や夫婦関係の持ち方に気を配れ、さらには、他者への感謝の気持ちも持てるようになったのではないかとしている。GHQは健常域にある。

この事例では、虐待を受けた者が母や妻といった役割を担うようになり、その段階で、虐待の加害者であった母が、かつて虐待を加えていた者に対して肯定的に評価したことで、虐待を受けた者の側がエンパワメントを復権できたと実感するに至ったことがうかがえる。加えて、虐待を受けた者自身も、自らが母や妻といった役割を担う中で、その当時の虐待者や虐待現象に至った背景について洞察を加えることができていいる。

この事例のほかにも、結婚して、夫との関係の中で、母に暴力を振るう父の気持ちも少しは理解できると同時に母側の問題点にも気付くようになったとする者がいた。また、父に罵倒されて「生きていては迷惑な存在」と自身を受け止め、母によく当たり散らす粗暴な父を恐いと感じて、結婚するまで下痢ばかりしていたものの、結婚して夫や夫の実家と良好な関係を結ぶことができ、3児の子育てに奮闘している自分のことを「このままの自分でいいのだ」と思えるようになった最近では、母に「強い者勝ち」とアドバイスしているとする者もいた。結婚して、母にアドバイスできるまでに、自己効力感が得られるに至ったことを示す言葉と理解できる。

このほか、子どもを持つことで、実家の両親が我が子の祖父母になるといった新たな関係性が築かれる中で、虐待の加害者と被害者との関係性に変化が見られることがある様子もうかがえた。

### 3 他者との関係の持ち方や他者への思い

#### (1) 未婚者の異性観や結婚観

自らが育った家庭で様々な被害を経験していれば、「家庭」に大きな夢なり希望なりを持てなくなることは不思議ではない。今回の面接対象者の中には、自らが家庭を作る第一段階として異性との交際について、問題を感じている事例がみられた。以下に、その事例を紹介する。

#### 事例 M (20歳代後半・女性)

Mの父はよく夫婦喧嘩をしており、Mも物心ついたころから、そのとばっちりを受け、暴言を吐かれたり、殴られたり、蹴られたりしていた。口に足を入れられ窒息しそうになったこと、池に投げ込まれたこともある。こうした虐待経験を話すと、多くの異性が疎遠になっていくのを感じるが、その一方で、心が広そうで自分のことを理解してくれそうに見える人には、何かうさん臭さを感じてしまい、近寄れない。また、安全で心を許すことができると自分が思ってしまうと、ほんのささいな食い違いも我慢できなくなってしまい、その関係が終わりになってしまうといったことを繰り返している。

**事例 N (30歳代後半・女性)**

父が父権をかざしては、祖母、母、本人といった女性の家族成員に暴力を振るったり、ば倒したりといったことを繰り返している中で、N は成長してきている。N 自身は、結婚しないつもりでいるわけではなく、「男性ときちんと付き合いたい」「結婚して幸せになりたい」との気持ちがある。しかし、これまで男性と実際に付き合ってみて、結婚したいという感情に到達したことはない。そのことについて、「基本的に人を信用していないから」と自己分析している。

いずれも、状況を踏まえて柔軟に心理的距離を調節しながら異性と交際することができないといった共通点が見られる。父からの加害経験をもとに、異性への脅えの感情や父から満たされてこなかった諸欲求を満たしたいとの感情が混在していることもうかがえる。なお、ハーマン (1992) は、児童虐待経験者は、見捨てられるのではないかと、搾取されるのではないかと恐怖に付きまといながらも、その一方で、底護とケアを求める衝動が強く、それを満たしてくれるのではないかと他者を理想化しがちなこと、そして、些細なことであってもその理想と違うことに気付くと、過去の体験がよみがえるために、不当にあしらわれた、裏切られたとの思いに至りやすいため、安定化した対人関係が結びづらいことに言及しているが、事例 M は、その典型例と言えるかもしれない。

しかし、複雑な思いを抱きながらも、実際に父以外の異性と交際したことで、異性への不信感が軽減できたとする者もいた。以下に、その過程を紹介する。

**事例 O (30歳代前半・女性)**

父が母に暴力を振るっており、加えて、思春期になってからは父が自らに性的暴力を加えるようになってきたとする O は、男性について「気持ち悪いじゃないけど、何を考えているんだろ」という感じがあって、親密な関係になることに抵抗があった。両親を見ているので、結婚についても一生独身と以前は考えていた。しかし、自分よりも年下で、性的に脅かされないと感じられる男性と交際したことで、男性に対するイメージが随分と変わった。結局、その男性とは別れたが、その経験を踏まえて、いい相手がいたら結婚したいと思うようになった。

この事例では、異性との交際について父から想起される異性観に圧倒されないようにするにはどうすればよいかと O 自身が思案し、性的に脅かされないと感じられる年下を交際相手として選択するなど、工夫の跡がうかがえる。そして、父から想起される異性観への歪みを修正するといった課題に対して、実際に、一歩前進することができたものと思われる。

このほか、失敗するかもしれないことを視野に入れながらも、機会があったら結婚したいとの意向をはっきりと示す以下のような事例もあった。

**事例 P (20歳代後半・女性)**

P は、兄から暴力を振るわれてきた。これまでの家庭生活から、結婚生活が甘い夢のようなものでないことはよく知っているつもりであるが、人間として生まれてきた以上、子どもを持ちたいとの希望を持っている。一般に、暴力を受けた人は暴力を振るう人と結ばれがちで、しかも、なかなか離れられないなどと言われていることを聞き知っているが、「自分は、その結婚相手がドメスティック・バイオレンスをする人であると気付けばさっさと別れる覚悟がある」と述べている。なお、離婚しても子どもには幸せでいてもらえるように、手に職を付けておくこ

とが大切であると感じているとし、現在、Pは学校で学んだことを生かした職に就いている。

虐待経験を通じて今後の人生が順風満帆でないだろうことを覚悟しながらも、その場合の対処策をも念頭に置いて、尻込みせず前向きに生きていきたいとする姿勢には、Pの強さをうかがうことができよう。

## (2) 既婚者の夫婦関係や子育て観

表1が示すように、今回の面接対象者44名のうち、結婚経験者は19名(男性3名、女性16名)にのぼっており、児童虐待経験をもとに、自らが家庭を築くことを避けるとは限らないことがうかがえた。しかし、既婚者の中には、自らが築いた家庭の中で生き生きと主体的な生活を送れてはいない者もいた。

まず、既婚者の中には、自分の意志からではなく、異性に言われるままに結婚したといった以下のような事例があった。

### 事例 Q (20歳代後半・女性)

父に暴力を振るわれたQは、男性の存在そのものが恐く、男性なんか、この世の中に存在しなければよいと心底思っている。しかしその一方で、女性は男性と付き合うのが社会的に自然と思われているとし、Q自身もどこかで男性には従うべきと感じているらしい。男性に愛情を感じて交際しているわけではない。男性から積極的にアプローチされると、「こんな私でもいいんですか」といった感じで、結局、ただそれに従ってしまうと述べている。

この事例では、父に翻弄されるにとどまらず、父以外の異性から翻弄される関係をも受け入れてしまっている。「こんな私でもいいんですか」として従うといった下りからは、父からの虐待によって自己イメージが深く傷つき、自らを守ろうとの気持ちが失せていることがうかがえる。

また、夫の意向に合わせることに生活の重点を置いているといった以下のような事例もあった。

### 事例 R (30歳代前半・女性)

父が粗暴であり、いつも家が緊張している雰囲気だったとするRは、夫が結婚に積極的であり、結婚に至り、現在、二児の母になっている。ところで、Rは、中学時代から摂食障害が続いている。幸い、夫は今までのところ、このことに気付いていない。しかし、それが夫にばれてしまうのではないかと不安を抱いている。手に職を持っており、仕事をしたいとの思いもあるが、夫が反対するので我慢している。

この事例では、実際の自分に夫が気付くことに不安を抱きながら、数年の結婚生活が続いていることが示されている。

このほか、我が子に抱く感情に、面接対象者自身、違和感を抱いている場合もあった。何をおいても子どもを守ろうというタイプとはほど遠い父であったとする者は、「子どもにべたべたされるのは気持ち悪い」としていた。また、粗暴な父のおかげでいつも家の雰囲気が緊張していたとする者は、何かあると一日中落ち込んでいたり急にキレたりする息子のことを、かわいいと感じられないとし、かと言って、そうした息子への自分の接し方がトラウマになっては困るので、「(育児書に書いてあるような) 作られた接し方」とどまっていると述べていた。これらは、子育ての過程で、自らの虐待の被害経験がよみがえってしまうことによる反応と解釈できるかもしれない。



しかし、その一方で、結婚して子どもができ、その我が子が「ママがちゅき」と言ってくれるから、今の自分が好きであると言えている者もいた。また、前節5項の「イ 女性面接対象者の結婚による加害者との関係性変化」で言及しているように、結婚して自らが家族を作る立場になった段階で、児童期に受けた被害や加害者についての理解を深め、あるいは、親である加害者を越えることができた実感するようになり、その被害を克服する手がかりをつかめるに至る場合もある様子であった。

### (3) その他の人との関わり

これまで見てきたように、今回の面接対象者の中には、配偶者を含めた異性との関係の持ち方や我が子への接し方に自ら戸惑いを感じている者がいたが、このほかに、社会生活で展開される一般的な対人関係についても、必ずしも良好な関係にあるとは言えないと言及する者が多数いた。具体的には、人嫌いであるとし、できるだけ新たな対人関係を持つことを避けようとする者、他者と関係を持つと何かと自分が悪者にされてしまうとする者、児童虐待の加害者を思い起こさせるような言動をとる人に恐怖心や苦手意識を抱いてしまうとする者、他者の顔色をうかがい自由な自己表現ができないとする者、対人関係の持ち方が上手でないと自認する者、集団の中で協調的に振る舞えないとする者などがいた。このほか、他者と共感し合えることが少ないとする者、初めての人もある程度の対人関係は展開できるものの友人は作らないと明言する者、日常生活を送るに際して支障ない程度の対人関係を維持することはできるものの一人が気楽でよいとする者などもいた。

しかし、その一方で、他者を援助することに興味があると述べる者も多く見られた<sup>(※37)</sup>。面接対象者44名のうち、看護婦の資格を有していたり看護学校在学中の者が5名、福祉関係の就労をしていたり福祉を専攻している者が2名いたほか、今後、福祉関係の勉強をしたいと述べている者もいた。このほか、救急救命士となって人を助けたいとする者、実際にホームヘルパーをしている者もいた。また、仕事や専門ではなくとも、自主的に人の相談にのっているとする者もいた。そして、その動機については、世間で差別されたり弱い立場の人の力になりたいとの気持ちがある、相手から感謝されたりするととても嬉しい、人々の力になれて感謝されている時が一番自分自身の存在意義を感じるなどを挙げていた。このほか、人の相談に応じアドバイスをすることで、自分への虐待についての気持ちも収まっていくものがあるとしている者もいた。

なお、この他者を援助することへの興味を示す者の中には、良好な他者関係を結べていない、あるいは、結ぶことが苦手であるとする者も含まれていた。必ずしも他者関係を結ぶのが得意でないにもかかわらず他者を援助したいとの献身ぶりは注目に値しよう。

しかし、人を援助している仕事をしていると、自分の過去が思い出されて、その人の気持ちに引きずられて、冷静に対処できず、自らの気持ちが不安定になってしまうことがあるとの発言もあった。大澤(2001)は、自分が体験したのと同種のトラウマ被害者に対してすばらしい支援をしているケースも多く見られる一方、他人が経験した悲惨な出来事を見聞きすることで二次的に PTSD 反応を体験するといった現象(二次受傷)への抵抗力には個人差があり、それは特に幼少期のトラウマ体験と強い関連があるとの報告もあるとしている。この発言は、その危険性を示唆しているとも解せられる。

---

(※37) 児童虐待の被害者が他者を援助することに興味があるとの結果については、そもそも今回の面接対象者が、虐待の被害体験についての面接に労を厭わずに応じしてくれた人であるということ、すなわち、献身的な人が母集団となった可能性を勘案して解釈すべきであることは否めない。

#### 4 虐待の連鎖

西澤（1999）は、トラウマを受けた人には、その体験を乗り越え、コントロール感を回復しようとのメカニズムが作用して、他者への加害、自己破壊性、再被害化といった様々な形態を取りながら、トラウマとなった状況を想起させたり繰り返してしまうような事態に強迫的に身をさらしてしまう傾向があるとしている。以下では、再被害化としての配偶者からの暴力と、他者への加害である我が子への暴力(\*38)について、紹介する。

##### (1) 配偶者間の暴力

ハーマン（1992）は、虐待を経験した成人が、成人期においても繰り返し虐待の犠牲者になるということは、少なくとも女性のデータからは反論し難いとしている。さらに、西澤（1999）は、子どもの頃に虐待を受けて成長した女性が、自分に身体的暴力を加える男性になぜか引かれて、夫婦間暴力の被害者となるといった再被害化の実態が様々な形で報告されているとしている。今回の面接対象者中には、結婚経験者19名（男性3名、女性16名）のうち2名が配偶者から暴力を受けていることに言及していた。以下に、その事例を紹介する。

##### 事例 S（30歳代前半・女性）

粗暴な父から家族全員が暴力を振るわれながら育ったSは、夫から暴力を受けている。結婚を前提に夫と交際していたかについてはよく覚えていないが、妊娠し、その出産予定日が自分の誕生日と同じだったので何か運命的なものを感じ、結婚を決めた。夫は、交際中は優しく、武道をしていたので、スポーツマンシップに乗っ取らないような暴力を振るうはずがないとS自身考えた。しかし、実際には、妊娠中から早くも暴力を振るわれるようになった。さらに、夫の浮気を知って、感情的になるSに対して、夫はさらに暴力を振るった。浮気をする夫と冷静に話し合おうと試みたこともあったが、その冷静な態度も、夫を小馬鹿にしているように映るらしく、夫の暴力はエスカレートしていった。Sは「私達、殺されちゃうかも」と思うような暴力を幼少時期から受けていたので、「この人の怒りが収まれば、やがて暴力も収まるだろう」と夫の暴力にじっと耐えていた。両親が離婚し、自分も離婚してしまえば、子どもたちも離婚してしまうようになるのではないかと思い、できれば離婚を避けたいと考えていた。しかし、夫は、自分のみならず、子どもにまで暴力を振るうようになり、ついに、子どもが円形脱毛症にまでなってしまった。そこで、離婚に踏み切った。

西澤（1999）は、こうした現象は、本人の意識レベル以外のものが影響を及ぼしているとしている。実際、この事例でも、夫が暴力を振るうかどうかを全く考慮せずに結婚しているのではなく、Sなりに暴力を振るわない人であろうと判断して結婚に至っている。すなわち、被害を繰り返さないようにといった意識をS自身持っているにもかかわらず、再被害化に至っている。

##### (2) 我が子への暴力

安部（2001）は、身体的暴力を受けた人は、育児に関して暴力を正当化して自分が加害者になってしまうことが、また、心理的暴力を受けた人は、自分の不安定さが子どもの状態で誘発され、子どもに身体的・心理的な虐待を行う可能性があるとしている。また、長谷川（2002）は、2000人の親に調査を行っ

(\*38) 以下では、面接対象者本人に焦点を当てて分析しているが、このほかに、面接対象者のうち4名が、本人の加害者が虐待を受けながら育ったことに言及していた。

た結果、幼児期に虐待を受けた人が、親になって自分の子どもを虐待してしまう確率は、男性69%、女性81%であったと述べている。しかし、その一方で、ハーマン(1992)は、一般に思い込まれている「虐待の世代間伝搬」に反して、圧倒的大多数の者は、自分の子どもが、自分に似た悲しい運命に遭いはしないかと心底恐れており、その予防に心を砕いているとしている。先に挙げた長谷川の調査結果についても、親自身の自己申告によるものであり、虐待経験者が経験していない者よりも自己判断を厳しくした可能性も否定はできない。

以下に、我が子への暴力について言及している事例を示す。はじめの事例はこれまでに取り上げた母から心理的暴力を受けて育った事例 H であり、つづく事例は、酒乱の父に兄弟が身体的暴力を振るわれるといった経験にさらされ、本人自身は、両親からあまり構ってもらえなかったと感じて育った事例である。

#### 事例 H (30歳代後半・女性) のつづき

H が第1子を出産したところ、夫は、男児でなかったことが気に入らなかったようで、子どもが夜泣きをすると、邪険に扱った。また、夫の両親にも、内孫と外孫ではかわいさが違うなどと言われた。言葉の発達が少し遅かったこともあって、H 自身いらいらして、子どもに平手打ちを食らわすこともあった。さらに、なぜか子どもがにっこり笑ったので踏みとどまることができたものの、2歳ころ首を絞めようとしたこともある。

#### 事例 T (30歳代後半・女性)

T は、子どもが小さかったころ、部屋を散らかしたりすると、それが赤子のすることと看過できず、厳しく叱っていた。今でも、試験の成績が悪いと、「自分の子なのにどうしてクラスの半分にも入れないのか」と感じて、思わず頬を叩いてしまう。自分の子だから良い高校へ当然行くであろうと見ている皆の目を意識してしまう。子どもには、社交性を備えているなど T 自身にないようなよい点がいっぱいあるし、勉強についてもそれなりに努力していることを認めている。しかし、それでも、不甲斐ない点数を見ると手が出てしまうとし、自分が虐待者になっているのかもしれないとの不安、それには自らの虐待の被害経験が影響しているのかもしれないとの不安に襲われることがあるとしている。

事例 H は、子育ての過程で H 自身が追い込まれたと感じて不安定になり、ついには首を絞めるといった虐待にまで発展していることがうかがえる。また、事例 T では、我が子を理解しようと努力しているにもかかわらず、衝動的に暴力に至ってしまうこと、同時に、そうした自分について強く不安を感じていることがうかがえる。

このほか、今回の面接対象者の中には、子育てをする以前から、親の二の舞をすることへの懸念や脅えを示している者がいた。

一方、虐待を受けた者は虐待する傾向があるとの知識をもとに、実際の子育ての中で、それへの対処策を模索している者もいた。以下は、その事例である。

#### 事例 U (30歳代前半・女性)

U は、酒乱の父から母と共に身体的暴力を受け、さらに、同居する叔母から心理的暴力も受けてきたが、虐待が連鎖することをテレビや母親学級の保健婦さんから聞き、本当なんだと実

感している。ついつい子どもをたたいてしまうらしい。しかし、たたいていたら、子どもが両手で頭を抱える仕草をするようになり、その姿を見て「私の小さい頃と同じだ」と驚いた。このことに気付いてからは、たたいた後は、必ずぎゅっと抱きしめて、こういう理由なんだよ、ときちんと話すように努力するようになった。しかし、それで十分と感じているわけではない。現在困っていることとして、子どもをたたいてしまうことを挙げている。

この事例は、虐待は連鎖するとの知識をもとに、自分がやっている行為が虐待である可能性があると認め、多少ともその被害を緩和させるため、子どもに自分がたたいた理由を説明するといった対応策をとっている。この事例のように、虐待が連鎖するとの情報をもとに、自分の行為が虐待であるかもしれないと気付くことが、虐待の連鎖を絶つ初めの一步になることは否定できない。しかし、同時に、このような知識は、すでに虐待を受けた者のさらなる不安を高めることにもつながる。虐待防止の具体的方法についての情報提供を行っていく大切さを示唆している事例とも言える。

## 5 今日に至ることができた理由やそれに影響したと思われる要因

最後に、今日に至ることができた理由やそれに影響したと思われる要因に触れることにする。これらを紹介することは、児童虐待に直面している人々にとって、その事態を乗り越えるに当たっての参考になるのではあるまいか。面接対象者自身が挙げたもの、あるいは、面接対象者の話を勘案し、面接者がそのように解釈したものとして、以下の(1)～(5)があった。

### (1) 他者の存在

他者の存在ゆえ、今日に至ることができたと言及する者が少なくなかった。以下に、それに相当する事例を紹介する。

#### 事例 V (30歳代後半・女性)

V の父は、機嫌が悪いと大声で暴言を吐いたり叩いたりして家族に怒りを爆発させる人だった。しかし、V には、兄弟の中でも特に V をかわいがってくれる祖父母が近くに住んでいた。V は、「そこに相談に行ったり逃げに行ったりすることができたので、他にサポートを求める必要もなかった」と振り返っている。そして、「現在、虐待を受けている人に対して、『自分のような信頼できる人を見つけ、その人に対して、躊躇せずに事実を言うことが効果的である』とアドバイスしたい」と述べている。

この事例では、まず、祖父母宅が、加害者の暴力にさらされない物理的に安全な場を提供し、さらに V の話がそこで真剣に受け止められ、心が癒されたことがうかがえる。ミラーはインタビュー(\*39)の中で、虐待経験を有しながら、その影響がさほど深刻にならずに済んでいる人の周りには、虐待経験を有している当時から、その人のことを理解してくれる「事情をわきまえた証人」が必ず存在していたこと、また、虐待経験によって影響された自分を変えていこうと思える人の周りには、少なくとも、その当時のことを理解してくれる「助ける証人」が存在することを主張している。V 以外には今回の面接対象者の中には、「事情をわきまえた証人」が介入したおかげで、虐待の事態が収拾するに至ったとする者、「事情をわきまえた証人」に喜んでもらうことを目標として、新たなことに色々取り組んできたとの者がい

(\*39) 1996年8月放映 BS スペシャル「閉ざされた魂の叫びーアリス・ミラーが解く子ども時代」

た。

このほか、「心配させたり悲しませたりしたくない他者」の存在を挙げる者もあった。先に取り上げた事例 R についてその様子を見てみる。

#### 事例 R (30歳代前半・女性) のつづき

R の家では、父がき細なことで母に暴力を振るったり、家中のガラスを割ったり、物を壊したりしており、R 自身も止めに入ろうとして暴力を振るわれることを繰り返していた。母は父に逆らうことなく、じっと耐えていたが、R は、これ以上母を悲しませたくないと思い、その思いが自分を今日ここまで至らせることにつながったとしている。ところで、R は、中学生のころから、過食しては吐くといった症状が出ている。しかし、母に精神科にかかりたいと訴えたところ、「あなたよりもお父さんが行った方がいいよね」などと相手にしてもらえずじまいであった。

母に精神科にかかりたいと訴えた際のやりとりからは、母が、R の心境を十分に察知できていなかったことがうかがえる。すなわち、「事情をわきまえた証人」とは異なり、R 自身が、その他者に十分受容されていたわけではない。しかし、R の一方的な思いかもしれないが、これ以上母を心配させたり悲しませたりしたくないとの思いが気持ちの張りとなり、今日まで本人を支えてきたことは間違いない。

このほか、虐待のある家庭の中で、ペットに助けられて、今日に至ることができたと言及する者がいた。「家族から暴力を振るわれた後、ペットを抱きしめていると心がなごんだ」「どうしようもなく腹が立った時、ペットをいじめることで苛立ちを取めることができた」と述べる者、「複雑な家族関係から逃げたいと思った時、ペットがいたので助かった」と述べる者、さらに、「暴力を振るう父を殺したいとか、暴力ばかりの家から家出したいと思ったものの、そうした場合、ペットはどうになってしまうのだろうとの思いが、自分を踏みとどまらせた」と述べる者がいた。

ペットが、虐待で傷ついた心を癒したり和ませたりするほか、虐待に巻き込まれない家族の一員としての役割を担っていたり、人間の家族成員以上の心理的結びつきを有する場合があることがうかがえる。

#### (2) 他者の被虐待情報

虐待を受けているのが自分あるいは自分の家族だけではないといった情報を得ることは、その苦境を乗り切るに当たっての勇気付けとなる様子である。この点について、以下に、本章の初めに取り上げた事例 A—ひどい虐待を経験しながらも面接時点における GHQ では健常域に位置していた事例—について見てみる。

#### 事例 A (20歳代後半・女性) のつづき

父の暴力から逃れようとして施設に入所した A は、その施設で、自分よりひどい境遇の子どもたちに会って、「つらい目にあっているのは自分だけではないんだ」「自分はまだまだ恵まれているんだ」と感じることができたとしている。「あの施設での体験があったからこそ、今の自分がいると思う」と振り返るに至っている。

自分と同種の経験を有している者同士の感情の共有、自分ばかりが不幸なのではないといった孤立感や不遇感の軽減、もっと不幸な人が存在しているからには自分も耐えられるはずであるといった思いなどが、A を今日に至らせたとうかがえる。

このほか、福祉を専攻して、その仲間などと、自らの体験をも含めて話し合えるようになり、気分が随分と楽になると同時に、考えも広がったとする者もいた。

### (3) 虐待以外のことに目を転じること

虐待以外のことに目を転じることで、今日に至ることができたと言及する者がいた。

将来に目を転じ、「夢をかなえたい」「自分のなりたいたいものになって、自立を目指そうとした」などの思いが心の支えになったとする者がいた。本章の初めでひどい虐待を経験しながらも面接時点におけるGHQでは健常域に位置していたものとして取り上げた事例Bも、このうちの一人であった。

また、ややニュアンスは異なるものの、現時点だけでなく先のことまでを考慮に入れて損得を計算しながら行動選択する傾向を有していたことが、今日に至ることができた理由であるとする者もいた。

このほか、虐待されて気分がイライラしたり不安に圧倒されそうになった時、その時点時点で「好きなことをすることで気分を紛らわした」とする者もいた。

さらに、父に家全体をかき回され、嫌な気持ちが持続し、ついには自殺までも考えたが、ふと「役に立ってから自殺しよう」と考えを切り替えたことで、自殺を回避することができ、今日に至ることができたとする者もいた。また、母からの虐待で追い込まれた心境になっていたものの、「死ぬのが怖いから生きているといった理由でこの世にとどまってもいいのだ」と考えるようになって、今日に至ることができたとする者もいた。

### (4) 他者に多くを期待しないこと

他者に過剰期待しないようにと思うことで、今日まで乗り切ってきたとの反応もあった。

先に取り上げた事例Eで、その様子を紹介することにする。

#### 事例E (30歳代前半・女性) のつづき

父が母に怒鳴り散らしては暴力を振るう家庭で成育したEは、「気が小さく、人から怒られたくないとか、トラブルに巻き込まれまいとして、なんとなく今日まできた感じ」と述べている。トラブルになりそうと思えば、自己主張せずとにかく身を引くことで対処してきている。離婚の際も、夫が不倫しており、自分の方が優位な立場にいたことは確かだが、がちゃがちゃするのが煩わしかったので、何の条件もなく離婚したとしている。一人が気楽でよいとし、再婚する気はない。一人住まいで、ガーデニングをしたりして静かに過ごしており、人恋しくなればチャットなどをしている。実家との付き合いは、たまに母に連絡をする程度である。

この事例では、父のみならず、母との気持ちの結びつきも希薄な様子であり、本人自身、他者との強い結びつきを控えることで、情緒的安定を保とうとしている様子がうかがえる。ヴァン・デア・コルクら(1996)は、トラウマを受けた者は、現在のストレスを強い感情を伴って体験するが、その感情は実際には過去に属するものであるとし、さらに、トラウマに起因する感情は、対人関係において頻繁に再体験され、それを補償しようとの試みからトラウマを思い起こすような刺激を避けることによって「閉ざしてしまう」傾向があるとしている。この事例では、そのようなメカニズムが働いていることが推測できる。

このほか、今回の面接対象者の中には、自分は結局一人であるとの思いが今日まで至ることができた理由であるとしている者もいた。

### (5) 自尊心を持つこと

自らの性格などに焦点を当て、自分だからこそ打ちのめされることなく今日に至ることができたとする

る者もいた。先に取り上げた事例 L について、その様子を示すことにする。

#### 事例 L (30歳代後半・女性) のつづき

L は、全く勉強ができないわけではないが、兄に比べては劣っていた。しかし、母は、L が勉強している時、つきっきりで監視し、出来ない時はバシバシ叩き、ついには「お前みたいな子は養護学校に行きなさい」とまで言った。そうした母の教育方針に L は反発した。しかし、その一方で落ちこぼれを見ては、さすがにあそこまではなれないとの思いがあった。そして、プライドや人に負けたくないといった勝気な性格が動員力となり、今日に至ることができたとしている。

このほか、我慢強かったこと、悶々とするのではなく事態を打開するために自分なりに積極的に動いたとしている者もいた。

これらの反応は、ここまでに至ることができた自分に対して、「よくやって来られた」「よく頑張れた」と自己評価している反応とも言える。虐待からの回復の過程で、自尊心を高めることは大切なことになっている。実際、こうした反応をした者の GHQ は、いずれも健常域にあった。ウォーリンら(1993)らも、問題を抱えながらも子ども時代を生き抜いた人々は、つらいことを克服し、自己評価を確立していると述べている。

## 6 むすび

面接対象者の大半が、被害を受けた結果と思われるなんらかの症状を呈した経験を有していたが、面接時点における精神的な健康度については、半数以上の者が健常域にあり、さらに、健常域から外れてはいるものの、少なくとも外見からは、ごく普通に見える社会生活を送っている者もいた。こうした結果からは、場合によっては、虐待を受けてもある程度まで回復することができ、普通に見える社会生活を送ることができる可能性を示唆する。そこで、本章の最後には、こうした面接対象者が今日に至ることができた理由やそれに影響したと思われる要因として挙げたものなどを紹介した。これらは、児童虐待に直面している人々にとって、その事態を乗り越えるに当たっての指針になる可能性がある。

とは言え、今回の面接対象者とは、児童期を過ぎた者であり、しかも「第1 研究の実施概要」の章の「3 分析の意義と制約」の節でも言及したように、面接会場に出向き、自らの被害経験を語ることができた、あるいは語ろうとした人々であるといった集団である。にもかかわらず、その半数近くが、今なお精神的健康度について健常域から外れていたと言うこともできるのである。そして、このことから、児童虐待の影響が長期にわたって深刻な様相を示すことを示唆していると解釈することも可能であろう。なお、「第2 被害の実態」の章の「6 その他の被害」の節で示したように、虐待を受けた者は、家族以外からも被害を受ける危険性が高い様子であったが、こうした者の精神的健康度については、健常域から外れる危険性が高いとの結果も示された。家族からの被害を受ける中で健全な成長が遂げられず、その結果、新たな被害を招き、さらにより一層傷つくといった経路をたどることを意味するのであろうか。

また、児童虐待の種類別に被害を受けて以降の経過を分析検討した結果からは、社会的認知が遅れた心理的暴力についても軽視できないこと、また、現行の「児童虐待の防止等に関する法律」では間接的暴力は児童虐待とはみなされていないが、その被害についても度外視できないことなどが明らかになった。

つづいて、面接時点での面接対象者の被害体験や加害者への思いについては、概して精神的健康度との関連が見られたが、健常域にいる者も含め一見ごく普通の社会生活を送っている者であっても、被害体験や加害者への思いが十分に整理できない状態にいる者が少なくなかった。面接対象者なりに被害を乗り越えようとしてあれこれ考え、当時の状況などを省みて加害者に理解を示そうと試みながらも、ふとしたことで感情が揺すぶられるとする者がいたほか、虐待の事実を自我の記憶の中に統合することなく、未解決のままできるだけそのことに触れないことで、自我の安定を図ろうとしている者もいた。また、加害者と完全に和解が成立したわけではなく、複雑な思いを抱きながらも、児童期を過ぎた面接時点においても同居しているといった者もいた。すなわち、自らが受けた児童虐待について成人になった今も未解決のまま日々を送っている者が多く、児童虐待の被害を児童期の過ぎ去った問題と簡単に片付けられないことがうかがえた。

このほか、面接対象者の中には、満足のいく結婚生活を送ることができていると実感できる段階になって、虐待による傷つきを克服できたとする者がいた一方、異性との交際に戸惑いを感じたり、異性の前でありのままの自分として振る舞えなかったり、あるいは成育した家族からの児童虐待に加えて異性からの暴力をも経験するといった者も見られた。また、自身が子育てをする段階になって、自らの子どもへの感情に戸惑いを覚えたり適切に子育てができていないのではないかとといった不安が高まったりする現象も見られた。これらのことから、児童虐待の経験は、その後の人生の様々な課題に取り組む際にも影響を及ぼすことがあることが示唆された。



## 第6 面接対象者のニーズ

児童虐待の被害を受けている子どもたちや、過去に被害を受けた人々に対するサポートの在り方を考えるに当たり、過去に被害を受けた人々の生の声を聞くことによって得るところは多いものとする。本章では、被害を受けていた当時及び被害経験によるダメージからの回復過程において、彼らがどのような援助やサポートを求めているのか、また、どのような形でそれを周囲に伝えたのか、若しくは伝えなかったのか、加えて、周囲はこれにどのように対応し、結果的にその対応は彼らの必要性にかなった援助やサポートとなり得たのかどうかなどについて、面接結果をまとめ分析する。

以下、①被害を受けた当時の面接対象者のニーズ（面接対象者が求める援助やサポートを、以下では「ニーズ」ともいう。）と周囲の対応、②面接時点での面接対象者のニーズ、③児童虐待防止対策に関する面接対象者の意見の順に、取り上げていくこととする。

ただし、今回の面接が研究調査を目的に、面接対象者に協力を求めて実施するという設定でなされていることの影響に留意する必要がある。面接対象者の多くは、援助やサポートを求めてではなく、研究調査への協力者として面接場面に臨んでおり、このような調査条件が、面接場面における具体的・個人的なニーズの提示に抑止的に働く可能性を否定し切れない。

### 1 面接対象者の被害当時のニーズと周囲のサポート

最初に、被害を受けた当時、面接対象者が誰かに被害を訴えサポートを求めたかどうか、求めたとすれば相手はどのように対応し、その対応は有効なサポートとなり得たかどうか、また、誰にも被害を訴えなかったとすれば、それはどのような理由によるものかなどの点に着目し、サポート機能が有効に働くための条件等を検討することとしたい。

面接対象者において、自ら被害を訴えたと述べているものは、44名のうちの17名（男性は11名のうち2名、女性は33名のうち15名）<sup>(\*)40)</sup>である。以下、まず、周囲に被害を訴えた事例を取り上げ、次に、こうした行為が認められない事例を取り上げて、周囲のサポート状況等を見ていくこととする。

#### (1) 面接対象者が被害を訴えた場合におけるサポートの状況

##### ア 同居家族に対する被害の訴え

被害のさなかにあった面接対象者が、同居家族にこれを訴えたのは10名<sup>(\*)41)</sup>で、すべて女性である。これらの者の加害者は大半が父であることと関連して、10名のすべてが母若しくは母を含めた複数の相手に被害を訴えている。ところが、この10名のうち、訴えた相手から期待したようなサポートが得られなかった者が7名に及ぶ。

##### (ア) 同居家族に被害を訴えた事例

ここでは、同居家族に被害を訴えた場合について、まず、訴えた同居家族から期待したようなサポートが得られなかった事例を紹介する。

(\*)40) 面接対象者が、被害を受けていた当時において、自ら被害を周囲に訴えた、若しくは相談したと語っているものを「被害を訴えた」と見なし計上している。主観的には周囲に被害を訴える意図があったとしても、周囲からはそれが明確に読み取れない行為や、被害が過去のことになってから周囲に被害体験を話したものは、含まれていない。

(\*)41) 一人の面接対象者が、種類の異なる複数の対象に訴えた場合、被害を訴えた対象の種類別の人数については、一人の面接対象者を重複して計上している。

**事例 A (30代前半, 女性)**

A は、幼少期から父による母への暴力を目の当たりにし、自身も小学生時に母から身体的暴力を受けているが、中学生ころからは父による性的暴力が始まり、これに苦しんでいる。性的暴力の内容は、身体に触る、触らせるなどの直接的な行為に加えて、ひわいな言葉を掛けるなどの間接的な行為も日常的に繰り返すもので、父への不信や嫌悪を募らせた A は、高校生時に母に被害を訴えるが、「人ごとのような」反応や、お座なりな対応しか得られず、当時、母の対応自体に「ショック」を受けたと語っている。なお、母自身が児童虐待の被害者で、結婚後は配偶者による暴力の被害者となっている。

**事例 B (20代前半, 女性)**

B は、男子を待望する大家族の中に女子として誕生し、同胞との厳しい差別に心理的に傷つけられ、圧倒されて成育している。そして、小学生時から抑うつ感や対人不安等に悩み、自殺念慮も抱いているが、父は家庭に無関心で、気心が通じる母は家族の中で弱い立場にあり、B の訴えを聞いて「泣いてしまった」母、何もできない母を小学生時に見てからは、母にも思いを十分伝えられないまま「精神的にしんどい」思いを抱えて成育している。

他方、同居家族が問題解決のために決断・行動してくれたので救われたとする事例として、以下のようなものがある。

**事例 C (20代前半, 女性)**

C は、小学生時から同居を始めた義父に懐いていたが、中学生になって義父が就寝中に身体を触るなどの行為を繰り返していることに気付き、これに悩みながらも義父も含めた「新しい家族」の崩壊を懸念して黙っていた。ところが、義父の行為は次第にエスカレートし、これに恐れと嫌悪感を抱いた C は、19歳時、まず恋人に、次に恋人のアドバイスを受けて伯父に事情を打ち明け、伯父がすぐに母に事情を説明して事態に介入し、母、伯父と義父とが話し合いの上で、C と義父が事後一切接触しないための方策を講じて実行してくれたとしている。これについて C は、母を始め周囲が自分の訴えを「真剣に考えてくれた」おかげで救われたと述べている。

**事例 D (20代前半, 女性)**

D は、小学生時に、当時中学生であった兄から、「八つ当たり」で殴る蹴るなどの暴力を受け、これを母に訴えている。訴えを受けた母は、兄の暴力を止めようとしたが、当時は兄が母にも暴力を振るうなど、母の対応によって虐待行為が直ちに終息してはいない。しかし、D は、母が自分をかばい、父とも協力して、兄の暴力を阻止しようとする熱意や努力を示したことで、両親が自分を大切に思ってくれていることを実感できたとしている。

**(イ) 同居家族に被害を訴えた時期**

同居家族に被害を訴えた場合でも、その時期を見ると、被害が始まってから、若しくは被害を認識するようになってから相当の期間を経て、ようやく訴えに至った者が多いことに気付く。

紹介事例を見ても、事例 C では、中学生時から気付いた性的被害を、思い悩んだ末に周囲に訴えるに至ったのは高校卒業後の専門学校在学時である。事例 A では、幼少期から間接的暴力等の被害を受けて

きたところへ、中学生になって性的被害が加わり、高校生になってようやく性的被害を訴えるに至っている。事例 B では、小学生時に訴えているが、物心がついたところから差別的な扱いや言葉の暴力に傷ついてきている。被害が始まった時期とこれを訴えた時期とが近接している事例 D を除くと、いずれも、最も身近なはずの同居家族に対しても、被害を訴えるまでに相当な期間を要しており、その経過には様々な理由によるちゅうちょや葛藤が認められ、よほどのことがないと訴えに踏み切れない様子がかがえる。

#### (ウ) 同居家族に被害を訴えてサポートが得られなかった場合と得られた場合

上記に紹介した事例を含めて、被害を訴えた同居家族（ここでは主に母）から、期待したサポートが得られなかったとする事例と得られたとする事例とを比較検討すると、得られなかったとする事例では、複雑な問題をはらむ家族関係の中で、母自身が被害者や弱者であったり、孤立しているなどの事情が認められる。他方、問題解決のために動いた母は、配偶者の協力や、問題に積極的に介入する親戚の支えを得ている。

以上のことから、虐待に係る家族の問題を正面から受け止めて取り組むためには、家族を取り巻く周囲の支援体制をも含めて、家族成員間の協力に支えられた問題解決的な家庭の機能が求められ、これが不十分な場合には、虐待被害を同居家族に訴えても、有効なサポートにはつながらない事態が多々生じ得ることがうかがえる。

なお、事例 D に見るように、同居家族への子どもの訴えは、具体的なサポートを期待するのみならず、相手の対応から、自分を大切に思い守ろうとする強い意思や愛情が伝わることをも求めており、こうした手応えが得られるかどうかは子どもにとって非常に重要であることがうかがえる。

#### (エ) 同居家族からサポートが得られなかった場合のその後の対応

同居家族に被害を訴えても、期待したサポートを得られなかったとする面接対象者が多いことはすでに述べたが、ここでは、このような事態において、面接対象者がその後どう対応したのかを、見ていくこととしたい。

訴えた母が頼みにならないと感じた事例 A では、「父から離れたい、家を出たいと、一人で思い詰めるばかりだった。相談に応じてくれる公的機関があることを当時知っていたら、行っただと思う」と述べている。事例 B では、自分が訴えることは「母を苦しめる」と感じて、「家族に、もっと自分の気持ちを理解してほしい」と願いながらも家庭内ではこれを表現できず、中学生になり身体症状で受診した医者に、ようやく気持ちのはけ口を見いだしたとしている。また、紹介事例以外では、幼少期から父の暴力におびえ、暴言や「無視」に傷つけられてきた面接対象者が、これを訴えた母からも、「我慢してねと言いつめられ、一人で考え込んでいた。家族以外に相談したことがばれるのが怖いから、相談したいとは思わなかった」と述べている事例や、義父による心理的暴力を母に訴えたが相手にされず、同様の被害体験がある兄に相談相手を求めることで、何とか支えられたとする事例などが認められる。

以上、これらの事例からは、被害を訴えた同居家族から期待したサポートが得られない場合、被害者は更に追い込まれ、自らのニーズを周囲に伝えることなく内面に押し込めてしまったり、または、これを伝えたいと思っても、具体的な対象や方法を長らく見いだせない状況に陥ってしまう場合が少なくないことがうかがえる。

なお、付言すれば、訴えた同居家族からサポートが得られたとしている事例 C と事例 D では、必要なサポートが得られたことを理由に、当時のニーズは特になかったとしている。

#### イ 親戚に対する被害の訴え

サポートを求める先として、祖父母や伯父伯母等の親戚が選ばれることが少なくない。親戚には、緊

急避難できる場所の提供、仲裁者や理解ある支援者の役割など、様々な要請や期待が向けられている。

こうした事例としては、先に同居家族に被害を訴えた事例として紹介した、伯父の介入を得て問題が解決したとする事例Cのほか、父が飲酒して暴れる度に、母と共に遠方の叔父の許へ避難した事例や、家族間で暴力沙汰が始まると、叔母に援助を求めて仲裁してもらった事例などがある。また、被害の訴えを母にまともに受け止めてもらえずに心理的打撃を受けたとして、先に紹介した事例Aでも、成人後になってすべてを打ち明けた伯母から理解と支持とを感じ、ようやく救われたと述べている。その他にも親戚に被害を訴えてサポートを求めたとする様々な事例が認められ、面接対象者の中で6名（男性2名、女性4名）を数える。そして、そのほとんどが、相応のサポートが得られたと受け止めている。日ごろのかかわりなどをとおして、期待に応えてくれそうな相手を選んでいることや、期待の内容も、親戚に対するものは同居家族に対するものなどに比べると限定的であることなどが、その理由として考えられるが、いずれにしろ、いわゆる親戚付き合いが生きている場合には、これが家庭の機能を様々な支援していることがうかがえる。

なお、これら親戚に被害を訴えた面接対象者については、親戚の介入や存在が相応のサポートになったとして、当時のニーズは特になかったとしている者が大半である。

#### ウ 学校関係者に対する被害の訴え

被害を受けていた当時、学校関係者に自らこれを訴えた、相談したと述べている面接対象者は2名<sup>(※42)</sup>である。母から言葉による心理的暴力を受けていた事例では、高校在学中に担任教師と生徒との間で実施していた「交換ノート」に思いをつづることが慰めになり、さらに、面接対象者の思いをくみ取った担当教師が母に働き掛けようと家庭を訪問してくれたと語っている。他方、中学在学中、担任教師に母からの身体的暴力を訴えたが、「親子げんか」程度にしか受け取ってもらえなかったと失望を口にしている者も認められた。面接対象者においては、被害を受けていた時期が学齢期と重なるものが大半であることを考えると、該当者数は少ないとの印象を受ける。

これと関連し、在学中であったが、学校関係者に相談しなかった面接対象者に目を向けると、学校が好きで、教師との関係も良好であったとしながら、家出して交番に保護を求めるほどに追い詰められていた時期にも、学校ではこうした問題をまったく周囲に伝えていない者が認められた。これについて本人は、「学校では家庭での虐待などないかのように、殊更明るく振る舞っていた」「家庭で暴力を受けていることが知られたら、自分や自分の家庭が特別視されるのではないかとおそれていたので、教師に相談することは考えもしなかった」と語っている。事例Cでも、性的暴力のエスカレートに悩んだ末、周囲に訴えようと決意したのは専門学校在学中であり、学校には相談室も設置されていたが、学校関係者には「家庭の問題」を一切知られないように腐心したと述べている。そのほか、「学校ではプライベートなことは出しにくい」「先生に相談しようかと思ったが、恥ずかしいのでやめた」などの発言が複数の者において認められた。

以上、それぞれに若干の相違はあるものの、在学中であるにもかかわらず、学校関係者に相談しなかった場合については、家庭内で被害を受けていることを自分自身を含めた「家庭の問題」と受け止め、学校関係者等に知られることに抵抗感を抱いたり、恐れるような心理がうかがえ、これが学校関係者への相談をためらわせる要因になっているものと解することができる。また、上記のような心理の背後に、

(※42) 他に、被害を受けていた当時、学校関係者が事態に関与したものとしては、後ほど「周囲が自発的に行ったサポートの状況」において紹介する2名があり、これらを加えると、学校関係者が事態に関与した面接対象者は4名となる。

家庭内で虐待被害を受けている面接対象者にとって学校はもう一つの大切な生活の場であり、これを守りたいとする思いをくみ取ることができる場合もあった。

### エ 公的機関・地域住民に対する被害の訴え

児童相談所や当時の養護施設（現在の児童養護施設）に、児童虐待を原因として、係属・保護されたことがあると述べているのは2名であり、そのうち、自ら保護を求めたとしているのは1名である。家出して、警察や地域住民に保護を求めた事例を、以下に紹介する。

#### 事例 E（20代後半、女性）

Eは、小学生のころから父による母や兄への激しい暴力におびえていたが、中学生になって母と兄が家を出てからは、父の暴力が本人に向けられるようになった。これに耐え切れなくなったEは、中学1年時に、家出して交番を訪れたがすぐに父に連絡されて家に帰され、中学2年になって、今度は地域の宗教関係者の許を訪ね、事情を打ち明けた結果、民生委員、市の福祉を經由して、児童相談所の一時保護を経て養護施設への入所に至っている。Eは、一時保護所や養護施設で、様々な子どもたちや職員に出会い、親の虐待に苦しんでいるのは自分だけではないことを知って気持ちが軽くなるとともに、施設での話合いを通して、父もそれ以前よりはましになったとしているが、同時に、交番に保護を求めた際の関係者の対応について、「もっと自分の話を聞いて、何とかしてほしいかった」と語っている。

紹介事例が保護を求めたのは、児童虐待の問題が現在ほどには注目されていなかった10年以上前ではあるが、関係者の対応や児童保護にかかわる地域におけるネットワークなどについて、多々考えさせられる事例である。

具体的には、最初の家出の際に保護を求めた関係者の対応に、当時のEは失望し、現在も不満を表明しているが、児童虐待問題に対する鋭敏な問題意識や専門性が対応した側に備わっていれば、より早期に、問題を察知した適切なサポートを行い得た可能性もあるものと思われ、児童の問題にかかわる幅広い関係者における、児童虐待に関する意識を含めた対応能力の重要性を感じる。また、2度目の家出の際には、訴えを受けた地域住民である宗教関係者が問題の所在を察知して福祉につなげ、適切なサポートに至っているが、個人的判断に依拠するのみでは常にこのような対応が期待できるとは限らないであろうことを思うとき、保護を必要としている児童と福祉等の公的機関とをつなげる、地域におけるネットワークの大切さを再認識させられる。さらに、小学生のころから父の暴力に苦しんでいたEが、中学生になってようやく対処行動を起こせるようになったと解することができるが、この段階でも、具体的な方法を見いだせずに試行錯誤していることから、児童本人が公的機関に保護を求めたいと思ったとき、具体的にどうすれば、どのような保護が受けられるのかに関する情報提供を含めて、子どもの目線からも、とらえ理解できる広報の重要性を感じるところである。

このほか、被害を受けていた当時、公的機関等の所在や役割を知っていれば、援助やサポートを求めたかったなどと述べている面接対象者は複数存在した。例えば、性被害を母に訴えてサポートが得られなかった事例Aでは、「とにかく家を出たかった。公的機関があることを当時知っていたら相談に行ったと思うし、相談に行けば親戚にあずかってもらうとか、色々な方法があったと思う」と語っている。また、被害当時には誰にも訴えなかった者の中にも、「食べ物に困って万引きをしたこともあるくらいで、どこか施設か里親みたいなどころに行きたかった」と述べるなど、安全に生活できる受け皿がほしいとしたとする者や、「当時サポート機関があることを知っていたら、どこかに相談できるという安心感があつ

たと思う」と述べている者がおり、いずれも、公的機関の援助への潜在的なニーズを示す発言ととらえることができる。

#### オ 医療関係者に対する被害の訴え

虐待被害を受けた当時やその後において、被害経験の影響と思われる心身の不調があったとしている面接対象者が19名（男性4名、女性15名）と多数に上ることについては、「第4 面接対象者の逸脱行動等」に記載のとおりであるが、ここでは、医療のなかでも、とりわけ精神的・心理的な手当てを受けることを巡る状況について考えてみたい。

まず、被害を受けていた当時、これを医療関係者に訴えて、精神的な面にも配慮した手当てを受けたとしている事例を取り上げる。当該事例は、先に「同居家族に対する被害の訴え」において紹介した、事例Bであり、幼少期から家庭内で心理的被害を受け、小学生時代からは抑うつ感や対人不安などに悩み、中学生になって身体症状が加わって受診に至っている。その際、身体症状によって受診した医師から精神科専門医等による診断と手当てを勧められ、B自身も精神的な不調を種々自覚していたが、自分が「精神科」の手当てを必要とする状態にあると認めるのは「こわい」し、また、周囲に知られたら「どう言われるか分からない」との強い不安を抱いていたため、精神科には受診せず、代替的な方法として、手当てを勧めてくれた当該担当医に、受診の都度「話を聞いてもらう」ことに感情のはけ口を求めたと語っている。

他方、幼稚園のころから心理的・身体的な被害に苦しみ、中学生になってからは摂食障害や感情の不安定さに悩んで精神科を受診したいと母に訴えたが、まともに取り合ってもらえなかったとする事例もあった。

以上の事例からは、虐待被害者が精神的・心理的な手当ての必要性を感じていても、本人自身の抵抗感や周囲の無理解などから、個々の必要性に応じた十分な手当てを受けることは容易ではない状況の一端をうかがうことができる。

#### (2) 周囲が自発的に行ったサポートの状況

ここでは、周囲が介入・保護の必要性を感じて自発的に対応した事例や、周囲からの積極的な働き掛けに機会を得て、面接対象者が被害を訴えるに至った事例を見ていくこととしたい。面接対象者の中で、該当者は5名（男性2名、女性3名）である。

まず、周囲が自発的に介入・保護した事例については、被害者本人が訴える能力を十分備えていない幼少期の被害にかかわるものが中心であり、ネグレクト及び身体的虐待によって、小学校2年から当時の養護施設に保護された事例、幼少期からの心理的・身体的な虐待に対して、事情を察知した伯母が介入した事例、親のいないところでの姉によるいじめを日常的に受けていた面接対象者が、小学校低学年のころに家を閉め出されて泣いているのを見かねた近所の人が、家に入れるよう姉に掛け合ってくれたと述べている事例などがあった。

次に、周囲からの積極的な働き掛けを受けた面接対象者が被害を訴え、サポートを求めるに至った事例については、不登校であった姉に対する父の暴力について、姉を心配して声を掛けてくれた教師に相談したとする事例と、保健婦（現在の保健師）及び学校教師の家庭訪問等にサポートを期待した、若しくはサポートが得られたとする事例があり、以下に後者を紹介する。

#### 事例F（30代前半、女性）

Fの家庭は、本人によれば、「近所でも荒れた家庭で有名だった」とのことであり、小学生のころの保健婦の訪問についても、Fは、家庭の問題と関連したものと受け止めている。最初の家

庭訪問はFだけが家にいる時になされ、当時父の暴力や叔母による心理的ないじめに苦しんでいた時に、自分の話を十分聞いてもらえてとてもうれしかったと述べている。その後も保健婦の来訪は数回なされ、Fとしてはまた話を聞いてほしいという期待を抱いていたが、その後の訪問時には加害者である父が傍らにいたため、「本当のことを言うと父から何をされるか怖かったので、話せなかった」と語っている。

また、中学入学後は担任教師等がFの家庭での生活状況を気遣い、家庭訪問をするとともに、家庭を離れて寮生活のできる高校への進学を勧めるなど、親身になってサポートをしてくれたおかげで、家族による虐待から逃れ、高校を卒業して資格も取れたと述べている。

家庭を訪れる保健婦は、家庭内で虐待に苦しんでいた当時小学生のFからは、自分の話を聞いてくれる相手ととらえられており、公的機関関係者による家庭訪問が、児童虐待の発見等においても重要な役割を果たし得ることを示す事例であると考えられる。

次に、学校関係者による家庭訪問は、具体的にFをサポートする目的でなされ、本人にとって心強いサポートとなったようであるが、本人の側に、学校関係者が「家庭の問題」に介入することへの抵抗感がほとんど見受けられないことが、先に紹介した事例Cや事例Eとの相違点である。家庭に著しい問題があることは周知の事実であると当時のFが認識しており、言い換えれば内密にする必要性が乏しかったことが一因であろうが、加えて、積極的に介入し「親身になって」サポートを続けてくれる教師に深い信頼感や安心感を抱いていたことも見過ごせない。学校関係者に対する個人的な信頼感がどこまで醸成されているか、若しくは醸成されていくかも、家庭における児童虐待の被害という、プライバシーに深くかわわり、精神的な痛みを伴う領域への学校関係者の関与を、被害者の側がどこまで求め、受け入れるかを左右する、重要な要因となっていることが推察される。

### (3) 面接対象者からの被害の訴えも周囲からのサポートもなされなかった場合

#### ア 面接対象者からの被害の訴えも周囲からのサポートもなされなかった事例

虐待のさなかにある被害者が自らこれを訴えるには、自分が被害にあっていることへの認識や、被害を訴え得る言語等の能力、被害を訴えてサポートを得たいという動機付けが前提となるし、周囲からのサポートへの期待を維持していることも要件となろう。また、誰にどのような形で訴えるかとなると、社会的な知識やスキルも関与する。加えて、訴えることで招くかもしれない周囲の反応への恐れや抵抗感、加害者等による虐待の存在を封じる方向での有形無形の圧力等に抗することが必要な事態も生じ得る。したがって、面接対象者についても、被害を受けていた当時は、周囲に被害を訴えなかった者が相当数を占めることは予想されるところである。

以下では、被害を受けていた当時、面接対象者が周囲に被害を訴えることがなく、周囲からも特段のサポートがなされなかった事例を見ていくこととする。これに該当する者は22名(男性7名、女性15名)である。また、被害を訴えなかった理由等について、明確な言及がない場合が少なからず含まれている。

まず、被害を受ける原因を作った「自分が悪い」とする場合があった。例えば、中学生と高校生のころ、喫煙が発覚して父に顔を殴打されて、しばらく父と口を利けなくなったことがあり、当時、誰かに父との関係を取りなしてほしいとの思いを抱いていたが、殴られたのは「自分が悪い」からと、周囲に訴えることはしなかったとしている事例などがこれに該当する。

他方、被害の程度及び被害によって被ったダメージは深刻であると推察されるにもかかわらず、現実的な対処や周囲のサポートがなされていない事例が存在し、こうした場合、自傷行為などの行動化に向かったり、心身の不調等を長期化させている場合が少なくない。以下に、これらに該当すると思われる

事例を紹介する。

#### 事例 G (20代前半, 女性)

G は、経済的に困窮し、母が生活に追われ、父が家族に暴力を振るう家庭で、4 人の同胞と共に生育した。幼稚園のころはよく拳で頭を殴られ、物を食べられなくなったり、吐いたりした。小学生のころは風呂場で水責めにされたことがある。加えて性的被害もあったが、「みんなが（父に）やられていた」ので当時は「これが当たり前」と思っていたし、「誰に相談してよいかも分からず、我慢するしかなかった」と述べている。現在の生活については、将来の夢があると語っている。ただし、自らの精神状態について、感情の起伏が大きいのではないかとといった不安を抱いていたところ、最近、交際中の男性に負傷するほどの激しい暴力を受け、これにショックを受けて、「心療内科に通いたい」と口に出している。

#### 事例 H (20代前半, 女性)

H は、小学校 3 年生ころからの 1 年余、同室で寝ていた当時中学生の兄から、就寝中、身体をもてあそぶなどの性的虐待を継続的に受けた。高学年になって行為の意味を理解するようになってショックを受けたが、自分が口外すれば「家族がばらばらになる」とか、言っても「信じてもらえないかもしれない」と感じて誰にも打ち明けられずに経過するうち、中学 3 年生ころから、酩酊するまでの飲酒やシンナー吸引、リストカット、売春などの行為を発現させている。現在も、「心療内科に行きたい」と口にする一方、過去の受診時には「話を聞いてもらえなかった」「誰かに言ったところで、起こってしまったことに変わりはない」などと述べるなど、周囲にサポートを求めることにも確かな期待をもてずにいる様子である。

#### 事例 I (30代後半, 男性)

I は、仕事はまじめだがアルコールが入ると暴力を振るう父の許で、成績のよい兄弟とあからさまに差別される、自分ばかりが殴られるとの被害感を小学生のころから抱き続けていた。しかし、家族を含めて「期待する人は誰もいない」との思いから周囲にサポートを求めることなく経過し、中学生になって暴力で父に反撃するようになり、高校入学後は不良集団に接近・親和して非行化している。現在も被害感は根強く、大量の飲酒や睡眠障害、周囲とのトラブルなどを抱えている様子である。

### イ 面接対象者が被害を訴えなかった様々な理由

ここでは、被害のさなかにあった面接対象者が、これを自ら訴えなかった、若しくは訴えられなかった種々の要因を見ていくこととしたい。

面接対象者が周囲に被害を訴えなかった状況や心理機制については、それぞれに固有の事情や傾向がうかがえるところであるが、極めて単純化した表現が許されたとすれば、事例 G は、幼少期は虐待を受けているとの認識がなく、その後も、具体的な対応策が見いだせないことや暴力への恐怖から、虐待状況を忍従したもの、事例 H は、情緒的な混乱や不安から、心理的なダメージを自分の内に閉じこめてしまったもの、事例 I は、幼少期からの被害感や孤立感から他者への信頼感が十分養われず、サポートを求める相手を周囲に見いだせなかったものと、それぞれにとらえることができると思われる。無論、このような傾向は紹介事例に限らず、他の事例においても見受けられるところであり、更に言えば、被害を



周囲に訴えた事例においても、被害が始まってから、若しくは被害を認識するようになってから、これを周囲に訴えるまでには相当の期間を経ている例が少なからず存在することからもうかがえるように、程度の相違はあれ、大半の事例において、被害を周囲に訴えることを阻む様々な要因が働いていたと解することができる。

面接対象者において、被害当時にこれを周囲に訴えることを阻んだ、若しくはちゅうちょさせた要因を検討すると、①家庭外の社会との関係においては、「児童虐待がある家庭」や虐待される自分を「特別視」されることへの恐れが、②家庭内においては、家庭外に家庭の問題や秘密をもらしてはいけないという有形無形のプレッシャーが、③加害者との関係では、更なる暴力や不興を被ることへの恐れや、その支配下にしか居場所がないことによるあきらめ、近親者ゆえの両価感情などがうかがえた。また、④面接対象者自身に即して見ると、幼少で事態を認識する力も訴える力も乏しい場合を筆頭に、ある程度の年齢になっていても、虐待による精神的なダメージや混乱に支配されて現実的な対処能力が低下している場合、問題解決のために判断・行動できる社会的知識やスキルが十分備わっていない場合、親でさえ虐待するのだから、それ以外の人間にサポートを期待しても「無駄」だとか「どうせ効果はない」と断念して自分だけで処理しようとする場合、そして、「自分が悪い」から被害を受けるのは仕方がないなどと、虐待状況を受入れようとしている場合などが見受けられた。

ジョーゲンセン（1990）は、虐待に対して子どもは独特の反応をするとして、受容、混乱、無関心、怒り、無能力感、自己嫌悪を挙げ、受容について、「虐待を受けて当然だと受容し、何としてでも耐え忍ぶべきもの」と思い、自分を非難し、自分のことをよりましな扱いをしてもらうには値しない人間だと思ったり、虐待から解放されると落ち着きを失ったりする。」としているが、事例Gを始め、幼少期の被害に関する事例においては、被害を受ける原因は自分にあると受け止めて忍従している場合が多く存在しており、「受容」について指摘されている特徴の一部に該当する傾向を認めることができる。

#### ウ 表明されなかったニーズ

ここでは、被害のさなかにあった面接対象者がこれを周囲に訴えることがなく、周囲からも特段のサポートがなされなかった事例について、当時の面接対象者がどのようなニーズを有していたのかに焦点を当てて見ていくこととしたい。

被害当時は誰にも訴えなかった面接対象者の中にも、安全に生活できる受け皿がほしかったなどのニーズを有していた者が複数認められることは、すでに「公的機関・地域住民に対する被害の訴え」のところで述べたとおりである。その他としては、「気持ちを聞いてほしかった」など、思いを打ち明ける相手や、自分を理解してくれる相手を求める者が複数認められ、例えば、学校で対人関係に不適応をきたし、母にも精神的に傷つけられて「引きこもった」としている者は、「話を聞いてくれる人がいれば、少しは気分も違ったかもしれない」と語っている。また、ネグレクト及び身体的虐待によって小学校2年から当時の養護施設に保護された者も、「親も話を聞いてくれず、自分の話を聞いてくれる人が欲しかった」と語っている。この、「話を聞いてくれる人がほしかった」という回答は、虐待のさなかにある面接対象者の不安や孤立感の深さと、外界へのきずなを回復してくれるような他者との関係への強い希求とをうかがわせるものである<sup>(\*)</sup>。なお、加害者自身が変化してほしかったの回答も、少数あった。

最後に、当時どのようなニーズを抱いていたかという質問に対して、「考えつかなかった」「特になかつ

(\*) 「話を聞いてもらえてうれしかった」「すべてを打ち明けて救われた」など、サポートが得られてよかったとする者の中に、必ずしも具体的な解決や救済にはつながらなくとも、自分の思いを受け止めてくれる相手がいるだけで、深い安堵や感情の解放が得られたとしている者が少なくなかった。

た」などと、具体的な回答がない者が面接対象者の大半を占めていたことに触れておきたい。ニーズが表明されないことについては、調査条件の影響を考慮する必要があるが、個々の事例を見ていくと、必ずしもこうした条件によるとばかりは言い切れない様々な様相も浮かび上がってきている。例えば、虐待被害によって被った精神的ダメージや情緒の混乱に支配されていたため、ニーズについて頭をめぐらす精神的余裕はなかったとする者、当時は虐待状況をしのぐのに精一杯で、ニーズについて考える余裕はなかったとする者、また、事態を改善するのは無理だと考えたり、耐えるしかないと思い込んでいたため、ニーズについても考えなかったとする者などがいた。

## 2 面接対象者の現在のニーズ

ここでは、被害経験による影響と関連して、面接対象者が、面接時点において、どのようなサポートを必要としているかを見ていくこととする。

面接対象者のうち、現在のニーズについて具体的な言及があったのは女性の10名のみ(\*44)であり、他の、男性11名と女性23名については、現在は特段のサポートを必要としていないと回答している。これについては、冒頭でも説明したような面接場面の設定、すなわち、面接対象者は、サポートを求めてではなく、調査研究の協力者として面接場面に臨んでいることが、具体的・個人的なニーズの提示に抑止的に働いた可能性も否定し切れないところであるが、ともかく、ニーズの提示のあった女性10名を中心に概要を見ていくこととしたい。

### (1) 表明された現在のニーズの概要

ニーズの内容は、①面接時点においても、被害若しくは被害を受ける恐れが継続しており、これに対応するための具体的なサポートを希望するもの、②精神的な問題に関する手当てを求めるもの、③現在の家庭の問題に関する相談相手等を求めるものに大別できる。

まず、①については2名で、長年の父からの被害を逃れるために家を離れて自立したが、加害者に反省の様子がなく、今後にも若干の不安が残るので、もし被害が懸念される事態になれば、公的機関に相談するとの内容のものや、家を離れて自立したいと願っているが、経済力が追いつかないとして、住まいなどの公的な支援を望むものであった。

次に、②については4名で、いずれも「心療内科に通いたい」「精神科に受診したい」とするものであり、年齢的には20代前半が3名、20代後半が1名である。これらの者の被害内容を見ると、3名は、同居家族からの性的被害等に加えて、家族以外の者からの二次被害にもあっており、また、他の1名は幼少時から父の激しい暴力による被害を受けてきたものである。なお、これらの者においては、自身の精神症状及び精神状態等に不安や懸念を抱き、精神的・心理的な手当てに対するニーズを示す一方で、その効果に期待が持てないと口にしたたり、治療中であってもその内容に不満を感じていたりといった傾向が見受けられ、それぞれのニーズを満たし得る、具体的な相手先を見いだすことにはあまり成功していない様子がうかがえた。

最後に、③については年齢的にはすべて30代の4名で、現在は虐待被害にかかわる特段の問題や危機感は抱いていないとしながらも、主に子育てなど家庭の問題について身近な相談相手や援助を求める内

---

(\*44) 現在のニーズについて、サポートが必要であると回答している10名はすべて女性で、男性では該当者が認められない。また、被害を受けていた当時に周囲に被害を訴えたとする者についても、女性は33名のうち15名であるのに対して、男性では11名のうち2名にとどまった。このことから、周囲にサポートを求めたり、被害を訴えることに対する抵抗感が、男性よりも女性の方がより少ない様子がうかがえる。

容であり、子育て上の悩みについて相談できる人がほしい、近所に子どもを預けられる相手がほしい、夫婦関係や姑との関係の愚痴を吐き出せるところがほしいといったものであった。①②ほどの切迫感は感じられないが、育児や家族関係等に関する不安やストレスの存在をうかがわせる。

## (2) 表明されない現在のニーズ

現在必要としているニーズについて、具体的な言及・表明がない者を個々に見ると、面接時点では被害からも被害によって被ったダメージからも回復しており、特段のサポートは必要としていないとか、すでにサポートが得られているので必要ないとする者が大半を占めるが、中には、被害及び被害経験に関連して、若干の不安を残している者や、サポートの必要性をまったく感じていないわけではない者も認められた。

例えば、男性において、今でも母が父から暴力を受けることへの懸念を示している者や、虐待被害にかかわる後遺症と思われる心身の症状が完全にはよくなりえないとの悩みを口にしている者が認められた。ただし、いずれについても、自分なりの方法で対処し得ると考えている点が、サポートが必要とした者との相違点である。女性においても同様に、面接の時点でも、虐待被害にかかわる後遺症が一部残っていると述べている者があったが、治療を要するほどではないとしていた。

このように、現在は特段のサポートは必要としないとしている者についても、個々に見ていくと、その意味するところに若干の相違が認められるが、総じて、現在の自分は特段のサポートを必要としない状態に至っていると受け止めている場合が多くを占めるとみなすことができるものとする。ちなみに、GHQによる精神の健康度を見ると、得点が健常域にあるものが、何らかのサポートの必要性を認めている者については10名のうち1名であるのに対して、現在は特段のサポートを必要としていないとしている者については34名のうち22名（男性8名、女性14名）に及んでおり、このような傾向も、上記の解釈を支持するものとする。

## 3 「児童虐待の防止等に関する意見」にうかがえるニーズ

面接対象者に「児童虐待の防止等に関する意見」を求めたところ、面接の時点で当時を顧みてのニーズが様々に反映されており、被害のさなかにあった当時とは異なる視点からのニーズが提示されていることや、自身のニーズとしては言及されなかったニーズも表明されていることから、以下では、これを概観したい。

内容的には、公的機関の対応に関するものが大半を占めている。

まず、相談機関・相談窓口等に関するものでは、①身近な場所に相談窓口を求めるものが多く、これと関連して、②子どもでも相談に行きたいと思ったときに、具体的にどこに行けばいいのかわかっていることが大切などとして、相談機関に関する情報提供の充実を求めるものが目立った。また、相談への対応等に関するものとしては、③児童虐待に関するより専門的で理解のある対応を求めるもの、④被害者が外部に相談する際には、相談したことを親を始め周囲に知られるのを非常に恐れているとして、こうした心理を十分配慮した対応を求めるもの、⑤平日の執務時間内のみの対応では、生徒・学生は利用しにくいので、この点を配慮した運用上の工夫を期待するものなどがあった。その他、具体的な支援を求めるものとして、⑥被害者が親から離れて生活できるよう住まいなどの提供を望むものがあった。

広報・啓発については、①児童虐待問題に対する意識の向上を図ることで、地域社会等による、より積極的な関与を期待するもの、②児童虐待が容易に起こりうることを広く伝えることは、虐待を受けている子どもたちの側からすれば、「被害を受けているのは自分だけじゃない」「自分だけが特別じゃない」という思いに導くメッセージを受け取ることになり、隠さないで話すよう励ます効果が望めるというも

の、③虐待を受けた人は差別や特別視にはとりわけ敏感であるとし、広報・啓発に当たってもこうした点への十分な配慮を求めるもの、などがあった。

なお、子どもを抱える家庭の支援や教育に関連した意見も示されており、中では、①育児中の母を支援するサポート体制の充実を望むものが多いが、同時に、②父にも子育てに関する教育が必要であり、自分の子育ての仕方のずれを認識したり、調整する機会を提供するために、相互の交流の場を設定することが大切とするものがあった。さらに、少数であるが、③被害者だけでなく、加害者もきちんと隔離したり、治療する必要があるとするものがあった。

#### 4 むすび

本章では、被害のさなかにあった面接対象者による、周囲への被害の訴えの有無に着目しながら、当時の面接対象者がどのようなニーズを有し、周囲のサポート状況はどのようなものであったのかについて検討を行った。また、面接対象者の面接時点におけるニーズや、児童虐待の防止等に関する意見についても概観した。

被害のさなかにある面接対象者が、これを周囲に訴えることについては心理的な障壁となる種々の要因があり、面接対象者において、周囲に被害を訴えたとする者は全体の半数以下で、訴えた対象は同居家族が最も多い。ただし、同居家族に訴えたことで有効なサポートが得られたとする者は少なく、背後には複雑な家庭の問題が認められ、家庭における問題解決機能の不全が指摘される。そして、家庭の機能を支援する存在として親戚がサポートを発揮している場合もあるが、その数は多くはない。学校関係者の介入については、面接対象者が介入を求めなかった場合においては、面接対象者の側に、「家庭の問題」を学校に持ち出すことへの抵抗感が認められた。公的機関については、被害当時、公的機関に自らサポートを求めたとする面接対象者は少ないが、その所在や役割を知っていたら相談したなど、潜在的なニーズをうかがわせる発言はより多くの者において認められた。

被害を受けていた当時、周囲にこれを訴えなかった、若しくは訴えられなかった面接対象者については、それほど必要性を感じていない場合がある一方で、深刻なダメージを受けながらこれに対処する現実的な方法を見いだせず、周囲からのサポートも得られないままに経過したと思われる者も少なくなく、後者については、被害当時のみならずその後も、被害経験の影響と推測される自己破壊的行為や逸脱行為の発現、心身の不調の長期化等、様々な問題を抱えている場合が認められた。

以上、面接事例を検討する中で、①児童虐待のさなかにある被害者が周囲にこれを訴えることには種々の心理的な障壁があり、ことに家族や身内以外には訴えにくい、②同居家族に訴えても、家庭自体が複雑な問題を抱えて機能不全に陥っているため、有効なサポートが得られない場合が少なくない、③深刻なダメージを受けながらも、現実的な対処やサポートを欠いたまま、虐待被害による影響を長期化・深刻化させている場合が少なくない、などを読み取ることができる。

また、面接時点においては、大半の面接対象者は、現在は特段のサポートを要しないと回答しているが、他方で、心身の健康状態に不安を抱え、精神的・心理的な手当てを求める発言や、被害を受けるおそれが未だに残っているとして、公的機関等によるサポートを望む発言も認められた。

上記のような面接対象者を巡る諸状況にかんがみ、児童虐待問題への対応において、公的機関が果たすべき、また果たし得る役割は大きいと思われる。そして、面接対象者に対するサポート状況等を検討する中で、公的機関の役割・機能の更なる充実を図る上での課題等も浮かび上がってきている。これと関連し、児童虐待防止に係る面接対象者の意見においても、公的機関等に対する様々な意見や提言が示されているが、これらをも含めて、被害者のニーズに応じた対応が求められよう。

## 第7 まとめ

第2部は、一般人に対する聞き取り調査結果をまとめたものである。

一般人に対する聞き取り調査は、アンケート調査においていずれかの被害を受けたと回答し、さらに、聞き取り調査に協力してもよいとの意向を示した人を対象に実施したものであり、その結果、44名（男性11名、女性33名）の方から、主に家庭内における児童虐待の被害に関する、様々な声を聞くことができた。もとより、外部からは見えにくい上に、現象としても一定の基準にのっとって取り扱うことが難しい家庭内における児童虐待について、今回の聞き取り調査の結果をもって一般化することはできないことは言うまでもないが、まずは、児童虐待の被害を受けた一般の人々から、詳細な報告が得られたことの意味は大きいと考える。また、被害経験の長期的影響やその克服過程について示唆に富む報告が得られたことや、援助・サポートの在り方について被害を受けた人の視点からの報告や意見が得られたことなどによって、児童虐待問題への取組を進めて行く上で参考となる基礎資料が得られたものと受け止めている。

以下では、今回の聞き取り調査によって明らかになった事項の中から、児童虐待問題に取り組む上で心に留める必要があると思われる幾つかの事項を概括的に取り上げて、第2部のまとめとした。

### ・ 児童虐待にかかわる問題の、児童期以後への広がりについて

今回の調査は児童虐待を対象としたものであったが、調査の結果、児童虐待にかかわる問題は、以下の2点において、「18歳までの児童期」という枠には収まらない広がりを見せていることが明らかになった。まずは、児童虐待がなかなか終息せず、児童期を超えて持続している場合が少なくないことであり、次に、児童虐待の被害による影響やダメージについては、児童期以後の長期間にわたって持続している場合がむしろ多いことである。こうした実態から、児童虐待問題に具体的に対応する実践の場においては、援助・サポートの対象者等について、「18歳までの児童」という枠組みにとらわれない柔軟な対応が求められよう。なお、加害者についても、「同居する保護者」以外の家族が関与している場合も少なくない実態がうかがえた。

### ・ 心理的暴力への対応について

心理的暴力については、「第1部 アンケート調査」の「第4 まとめ」においても、これを「同定し防止することが重要な課題である」との指摘がなされているところであるが、聞き取り調査の結果からも、心理的暴力が被害者に与える影響やダメージには看過できないものがあり、心理的暴力のみによっても、被害者に深刻なダメージを与えている場合があることが明らかになった。家庭内で児童に加えられる心理的暴力をどのように感知し、発見するか、また、有効な援助やサポートをいかに実現するかなど、心理的暴力への対応を巡る課題は多く、これについては今後の実践や研究に期待するところが大きい。加えて、児童虐待問題に取り組む基本的スタンスとしても、児童虐待の中でもとりわけ見過ごされやすい心理的虐待が、被害者に深刻なダメージを与える場合があることへの認識を踏まえた、鋭敏な意識と気付きとが求められよう。

### ・ 児童虐待が発生している家族への働き掛けについて

面接対象者の家族関係を検討する中で、児童虐待の発生や終息には、被害者、加害者の二者関係だけ

でなく、これ以外の家族を含めた家族関係が影響を及ぼしていることが認められた。また、ドメスティックバイオレンス（以下、「DV」とする。）の巻き添えになって子どもが暴力を受ける、DVの被害者が児童虐待の加害者になるなど、DVと児童虐待が密接に関連していることが明らかになった。

これらの結果は、まずは、①児童虐待への対応に当たっては、家族全員の関係や動きを視野に入れる必要があり、被害者や加害者への働き掛けに加えて、児童虐待において第三者の立場にある家族に対しても、積極的な関与や協力を引き出すことが重要であること、また、②DVが絡んで児童虐待が発生している場合には、児童虐待のみを取り出して対応しようとしても奏功することは難しく、家族の問題を全体としてとらえた取組や対応策が不可欠であるとの結論に導くものであろう。なお、間接的暴力のみによっても、被害者に様々なダメージを与えている場合があり、この点も留意を要するところである。

#### ・ 精神的・心理的な手当ての重要性について

児童虐待の被害を受けた人々は、被害当時におけるダメージに加えて、その後も長期間、被害経験にかかわる様々な問題に苦しむことが明らかになったが、中でも、心身の不調等に悩む者が多く、聞き取り調査の時点においても、精神的・心理的な手当てを求める者が少なくなかった。また、ダメージからの回復過程においては、被害体験について理解や洞察を深め、自己の体験として統合することが大切であることも明らかになった。これらのことは、児童虐待の被害者に対する、精神的・心理的な側面での手当てが重要な意味を持つことを示すものである。犯罪や災害等、様々な被害者が被る精神的なダメージの深刻さやこれに対する手当ての重要性に対する社会的な認知が進みつつあるが、児童虐待を受けた人々への対応においても、精神的・心理的な手当てに係る対応の充実が求められよう。

#### ・ 公的機関等による援助・サポートの在り方について

児童虐待のさなかにおいては、面接対象者の多くは、周囲に被害を訴えてサポートを求めることに困難を感じる心理状態にあったことや、また、たとえ被害を訴えても、これが適切に受け止められることは少なく、有効なサポートが得られないままに経過している者が大半を占めることが明らかになった。こうした状況にかんがみ、公的機関の果たすべき、若しくは果たし得る役割は大きいと思われる。面接対象者からは、子どもでも利用できる身近な相談窓口の設置や、子どもの視線からもとらえ理解できる広報の在り方など、児童虐待の防止等における公的機関の対応の充実を求める声が多く聞かれた。また、被害を受けていた当時、公的機関等にサポートを求めた面接対象者の経緯からは、保護を求めている子どもを福祉等の関係機関につなぐ地域におけるネットワークの充実や、子どもの問題を取り扱う関係者の児童虐待に関する意識や専門性の向上など、様々な課題が浮かび上がった。これらは一例ではあるが、児童虐待の被害者がどのような状況に置かれ、また、どのような援助・サポートを求めているのかを踏まえた、児童虐待防止等に係る施策の充実が求められよう。

児童虐待問題に対しては、その広がりに対応して、子どもや家庭の問題にかかわる幅広い関係者や関係機関が有機的に連携した広範な取組が求められるが、本報告が児童虐待防止対策を推し進める上で、いささかなりとも役立つことを願うものである。

## 引用文献

- American Psychiatric Association, *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (4<sup>th</sup> ed.), 1994 (高橋三郎訳「DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引」医学書院, 1995)
- 安部計彦「ストップ・ザ・児童虐待－発見後の援助－」, ぎょうせい, 2001
- Corby, B., *Child Abuse : Towards a Knowledge Base*, 2000 (萩原重夫訳「子ども虐待の歴史と理論」明石書店, 2002)
- Cruz, F.G. & Essen, L., *Adult Survivors of Childhood Emotional, Physical, and Sexual Abuse*, 1994 (倭文真智子監訳「虐待サバイバーの心理療法－成育史に沿った包括的アプローチ」金剛出版, 2001)
- 長谷川博一「幼児期の被虐待と少年犯罪－専門家は何をすべきか－」, 法学セミナー, 566巻, 2002
- Herman, L.J., *Trauma and Recovery*, 1992 (中井久夫訳「心的外傷と回復」みすず書房, 1999)
- 法務総合研究所他「児童虐待に関する研究 (第1 報告) その1－少年院在院者に対する被害経験のアンケート調査」, 法務総合研究所研究部報告, 11, 2001
- 福西勇夫「日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point」, 心理臨床, 3 巻 3 号, 1990
- 池田由子「被虐待児の心理とケア」, ジュリスト, 1188号, 2000
- Jorgensen, E.C., *Breaking the Deadly Embrace of Child Abuse*, 1990 (門真一郎・松林周子・山本由紀訳「虐待される子どもたち」星和書店, 1996)
- Karp, L.C. & Butler, T.L., *Treatment Strategies for Abused Children and the Active Book for Treatment Strategies for Abused Children*, 1996 (坂井聖二・西澤哲共訳「虐待を受けた子ども治療戦略－被害者からサバイバーへ」明石書店, 1999)
- Kaufman, J.G. & Widom, C.S., *Childhood victimization, running away, and delinquency*, Journal of research in crime and delinquency, vol. 36-4, 1999
- 村瀬嘉代子「児童虐待への心理学的アプローチ」(松原康雄・山本保編「児童虐待－その援助と法制度」エディケーション), 2000
- 日本弁護士連合会「罪を犯した少年・その保護者・付添人弁護士および一般高校生に対する質問紙調査の量的分析結果」, 2001
- 西澤哲「トラウマの臨床心理学」, 金剛出版, 1999
- 野崎伸一「児童虐待の防止等に関する法律と厚生省の取組みについて」, ジュリスト, 1188号, 2000
- 奥山眞紀子「子どもへの虐待が行動の問題へ発展する機序に関する考察」, 法務総合研究所研究部報告, 11, 2001
- 大澤智子「二次受傷から身を守るために－支援者の傷つきを考える－」(藤森和美編「被害者のトラウマとその支援」誠心書房), 2001
- 田辺等「児童虐待の構図」, 教育, 681号, 2002
- 田中康雄「発達障害と児童虐待 (Maltreatment)」, 臨床精神医学, 32巻 2 号, 2003
- Van del Kolk, B.A., McFarlane, A.C. & Weisaeth, L., *Traumatic Stress : The Effects of Overwhelming Experience on Minds, Body, and Society*, 1996 (西澤哲監訳「トラウマティック・ストレス－PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて」誠心書房, 2001)
- Wolin, S.J. & Wolin, S., *The Resilient Self－How survivors of troubled families rise above adversity*, 1993 (奥野光・小森康永訳「サバイバーと心の回復力－逆境を乗り越えるための七つのレジリエンス」金剛出版, 2002)

**謝辞**

今回の調査は、その趣旨を御理解いただいた方々の御協力によって実現したものである。これらの方々が、児童虐待防止に役立ちたいとの意思によって、個人的な生活や感情体験に深くかかわる事柄を自ら話して下さったことに、心からの敬意と謝意とを表するものである。